

『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編』
短単位規程集

Ver. 1.0

国立国語研究所コーパス開発センター(鴻野知暁)編

2017年3月

目次

第1章 最小単位認定規程	1
第1 最小単位認定規程	1
第2 和語の最小単位認定に関する規則	9
第3 最小単位の分類	26
第2章 短単位認定規程	27
第1 短単位認定規程	27
第2 最小単位の結合の例	41
第3章 付加情報	47
第1 付加情報の概要	47
第2 品詞情報の概要	48
第3 語種情報の概要	62
第4章 UniDic への登録, コーパス修正で注意すべき事項	64
第1 UniDic 登録時の注意点	64
第2 コーパス修正時の注意点	66
参考文献	89
資料 要注意語	91
1 接頭的要素	92
2 接尾的要素	93
3 助詞	97
4 助動詞	102
5 「一の～」	106
6 「一が～」	114
7 「一つ～」	114

短単位

短単位は、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位である。短単位の認定に当たっては、まず現代語において意味を持つ最小の単位（最小単位）を規程する。その上で、最小単位を短単位認定規程に基づいて結合させる（又は結合させない）ことにより、短単位を認定する。そのため、短単位の認定規程は、最小単位と短単位の二つの認定規程から成る。

なお、「同語異語判別規程」については小椋ほか（2011）を参照のこと。

《凡例》

- 以下の規程に示した例は、コーパスに現れた例又は作例である。「鎌倉時代編」のコーパスに適例が見つからない場合、他の時代のコーパスから挙例した。なお、例の引用に際し、表記をわかりやすく改めたところがある。
- 最小単位・短単位の境界を示すために次の記号を用いた。

最小単位の境界	……………	／	例：／国／立／国／語／研／究／所／
短単位の境界	……………		例： 国立 国語 研究 所
短単位の境界（当該規程で着目している箇所）	……………		例： 国立 国語 研究 所
- 最小単位・短単位について分割しないことを特に示す必要があるときには、次の記号を用いた。

最小単位・短単位のつなぎ目	……………	-	例： 大-丈夫 です
最小単位・短単位のつなぎ目（当該規程で着目している箇所）	……………	=	例： パソ=コン を 使う
- 着目している最小単位・短単位がわかりにくい場合は、当該箇所を【 】で囲った。

第1章 最小単位認定規程

第1 最小単位認定規程

最小単位は、現代語において意味を持つ最小の言語単位のことである。

最小単位は、和語・漢語・外来語・記号・数・人名・地名の種類ごとに、以下の規程によって認定する。

和語・漢語・外来語の語種の判定は、原則として『新潮現代国語辞典』第2版（新潮社）による。『新潮現代国語辞典』第2版の見出しにない語は、『日本国語大辞典』（第2版）（小学館）を主たる資料として語種判定を行う。また、『新潮現代国語辞典』第2版の語種判定に従い難いと判断した場合は、『日本国語大辞典』第2版等を参照し、独自に語種を判定した。

「鎌倉時代編」における最小単位についても、現代語との関連を重視して、原則として現代語を対象とした最小単位認定規程を適用する。現代では用いない語についても、原則として同様の扱いとする。

1

ただし必要に応じて、「鎌倉時代編」での使用実態に基づき、個別の判断をすることがある。例えば、次に挙げのような語である。

【例】
／異／なる／：『日本国語大辞典』第2版では、動詞「異なる」の用例は、明治時代からであり、それ以前は形状詞「異（こと）」＋助動詞「なり」と扱っていることによる。

／こ／の／：「こはいかに」のように「こ」単独の用法があることによる。

2 和語

和語の最小単位は、以下の例のように認定する。

【例】
／母／宮／　／あいだち／なし／　／心／のどか／　／経／【箱】／　／幾／千／歳／　／瑠璃／【色】／
／雲／の／あなた／は／春／に／や／ある／らむ／

2.1 融合形

融合形は、元の形に戻さずに、融合している複数の最小単位全体で1最小単位とする。

【例】
／人／に／【まれ】／（もあれ）　／海／に／【ざり】／ける／（ぞありける）
／なじょう／（何といふ）　／【かる】／が／ゆえ／に／（かあるがゆえに）
／さ／【むばれ】／（さもあれ）　／思ひ／【けらし】／（思ひけるらし）

2.2 省略形

省略形は、元の形に戻さずに、可能な範囲で最小単位を認定する。その際、元の形との対応をできる限り取るよう留意する。

【例】
／さ／も／あら／ば／【れ】／※

※ 元の形「さもあらばあれ」との対応を可能な限り取るように、「れ」を、動詞「あり」の命令形「あれ」の省略された形と考えて、最小単位の認定を行う。

2.3 撥音便無表記

撥音便の無表記は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／助くる／人／も／【無か】／めり／　／安き／事／【な】／なり／

2.4 分割不可

現代語において分割することができない、若しくは分割することが適切でないと考えられるものは、分割せずに全体で1最小単位とする。ただし、「鎌倉時代編」における使用状況から、分割することがある。

【例】
／いなづま／　／えがく／
／異／なる／※　／さ／ぞ／※　／わ／が／まま／※
※現代語では分割しないが、「鎌倉時代編」では分割する。

2.5 前の要素に含め1最小単位としない語

次に挙げるものは、それだけで1最小単位とせずに前の要素に含める。

2.5.1 形容詞語尾

【例】
／さむ=し／　／ひろ=から／　／なつかし=き／

2.5.2 形状詞語末「か」「やか」「らか」

【例】
／しず=か／　／すみ=やか／　／ほが=らか／

2.5.3 動詞の活用語尾

【例】
／おも=ふ／　／ひろ=ふ／　／たよ=る／

2.5.4 いわゆる副詞語尾「と」

【例】
／わざ=と／　／ひた=と／

2.5.5 助数詞「とり（たり）」

2.5.5.1

「ひとり」「ふたり」以外（例：みたり、よたり、いくたり）については、助数詞「たり」を前の要素に含めず、1最小単位とする。

【例】
／み／たり／　／よ／たり／　／いく／たり／

2.5.6 延言の「く」

【例】
／いは=く／　／ねがは=く／

2.5.7 コソアド類の各語末

【例】
／こ=れ／ ／こ=こ／ ／そ=れ／ ／そ=こ／ ／あ=れ／
／あそ=こ／ ／ど=れ／ ／ど=こ／ ／た=れ／ ／いず=れ／

2.5.7.1

「鎌倉時代編」では、原則として連体詞を認めないため、「この」「その」「あの」は、語末の「の」を分割する。（2.6.6 参照）

【例】
／こ／の／ ／そ／の／ ／あ／の／

2.6 前後の要素にまとめないもの

次に挙げるものは、前又は後ろの要素にまとめずに助詞・助動詞と同様に単位を認定する。

2.6.1 接続詞・接続助詞の構成要素となっている助詞・助動詞

【例】
／もの／の／ ／もの／を／

2.6.2 いわゆる形容動詞，いわゆる形容動詞活用型の助動詞の変化部分

【例】
形容動詞 : /静か/なり/ /けざやか/なり/
形容動詞型活用の助動詞: /やう/なり/

2.6.3 いわゆる副詞語尾「に」

【例】
／こと／に／ ／さら／に／ ／げ／に／

2.6.4 その他の副詞，接続詞

【例】
／さ／も／ ／さり／とて／

2.6.5 「動詞連用形+て」から副詞に転じた語の接続助詞「て」

【例】
／あえ／て／ ／あわせ／て／ ／せめ／て／

2.6.6 連体詞

「鎌倉時代編」では、原則として連体詞を認めないため、構成要素となっている助詞・助動詞は分割する。

【例】
／こ／の／ ／そ／の／ ／あ／の／ ／いか／なる／

2.7 副詞「と」「かく」を構成要素に含む語

副詞「と」「かく」を構成要素に含む語については、副詞「と」「かく」を1最小単位とした上で、他の要素もそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／と／かく／ ／と／に／かく／ ／と／て／も／かく／て／も／ ／と／に／も／かく／に／も／

2.8 感動・呼び掛け・応答など

感動・呼び掛け・応答などの1回の描写を1最小単位とする。

【例】
／あな／　／いで／　／よし／

3 漢語

漢語（和製漢語を含む。）は、漢字1文字で表されるものを1最小単位とする。

【例】
／帝／后／　／調／度／　／大／納／言／　／百／両／

4 外来語

外来語・外国語は原語で1単語になるものを1最小単位とする。英語起源の外来語の最小単位の認定は『リーダーズ英和辞典』第2版（研究社）による。それ以外の言語を起源とする外来語については適宜判断する。外来語・外国語に漢字を当てたものも外来語・外国語として扱う。
現代語の最小単位認定規程にある外来語に関する規定を、参考として以下に挙げる。

【例】
／阿闍梨／　／菩薩／　／【菩提】／樹／　／【瑠璃】／色／

5 記号

記号は1文字に当たるものを1最小単位とする。

【例】
／表／A／　／図／B／　／U／ターン／　／V／リーグ／　／甲／類／　／乙／種／

5.1 参考

現代語の最小単位認定規程にある記号に関する規定を、参考として以下に挙げる。

○ローマ字を並べた略語は全体で1最小単位とする。ローマ字の間の中点・ピリオド等は1最小単位としない。

【例】
／OHP／　／OS／　／D・N・A／　／Ph. D.／

6 数

数字は1文字に当たるものを1最小単位とする。

【例】
／丑／三／つ／時／　／子／一／つ／　／み／たり／　／よ／たり／

6.1

「ひとり」「ふたり」は、「鎌倉時代編」においても全体で1最小単位とする。（2.5.5 参照）

【例】
／ひ=とり／　／ふ=たり／

7 人名

7.1 姓・名

人名は姓を1最小単位、名を1最小単位とする。

【例】
／在原／業平／　／壬生／忠岑／　／王／昭君／

7.1.1 通称・雅号・しこ名

通称・雅号・しこ名（その略称も含む。）等は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／千代大海／ 　／十返舎／一九／ 　／古今亭／志ん生／

7.2 姓+読み添えの「の」+名

姓と名との間にある読み添えの「の」が本文に表記されている場合は、助詞として扱い、1最小単位とする。

【例】
／藤原／の／道長／ 　／源／の／頼朝／

7.2.1

本文に表記されていない場合は規定 7.1 を適用する。

【例】
／源／頼朝／

7.3 女房の名前

女房の名前は、次のように最小単位を認定する。

7.3.1

地位に由来するものは、和語・漢語の最小単位として扱い、人名としては扱わない。

【例】
／小／式／部／内／侍／

7.3.2

地名に由来するものであっても、人名として扱う。

【例】
／伊勢／

7.4 称号を表す類概念

神話、伝説、歴史、創作等の人名で、称号を表す類概念が付加された人名は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／豊雲野／神／ 　／イザナギ／ノ／ミコト／ 　／瑞齒別／天皇／ 　／市辺押羽／皇子／ 　／刀自古／郎女／

7.4.1

日本神話の登場人物名のうち「～ヒメ」「～ヒコ」は類概念とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／コノハナサクヤ=ヒメ／ 　／ヌナカワ=ヒメ／ノ／ミコト／ 　／伊福吉部徳足比売／ 　／大気津比売／
／豊玉毘売／ 　／佐用比売／

7.4.2

日本神話の登場人物名以外の「ヒメ」については次のとおりとする。

7.4.2.1

「漢字1字+ヒメ」は、全体で1最小単位とする。

【例】
／絢=姫／ ／清=姫／ ／濃=姫／ ／漁=姫／

7.4.2.2

「2字以上+ヒメ」は、「ヒメ」以外の部分が一般的な名に相当する場合は名と「ヒメ」をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／和子／姫／ ／紗夜／姫／

7.4.2.3

「2字以上+ヒメ」の場合であっても、「ヒメ」を切り出した残りの部分が一般的な名に相当しない場合は、全体で1最小単位とする。

【例】
／小桜=姫／ ／檜皮=姫／ ／おおまき=姫／

7.4.2.4

判断に迷うものは、「ヒメ」を切り出さず、全体で1最小単位とする。

【例】
／花百=姫／ ／火海=姫／

7.5 参考

現代語の最小単位認定規程にある人名に関する規程を、参考として以下に挙げる。

7.5.1

人名のうち「お(御)～」という形のもは、全体をまとめて1最小単位とする。

【例】
／お=千代／ ／お=ゆき／ ／お=春／さん／

7.5.2

姓又は名を略したものは1最小単位とする。

【例】
／仙／ちゃん／ ／おざ／けん／ ／橋／龍／

7.5.3

複数の人物の名それぞれを略した要素(1字で構成される名の場合はその全体)が結合体を構成する場合、その各要素は和語・漢語・外来語の最小単位として扱い、人名としては扱わない。

【例】
／若／貴／兄／弟／ ／柏／鵬／時／代／ ／角／福／戦／争／ ／三／角／大／福／中／

7.5.4

中国系の人名のうち姓と名がそれぞれ一文字ずつのものは、姓名をまとめて1最小単位とする。

【例】
／李=梅／

8 地名

地名は、次の規定により最小単位を認定する。

8.1 地域・地方を表す地名

地域・地方を表す地名（通称や呼称などを含む。）は、名を表す部分と類概念を表す部分及び「東・西・南・北・新」等を分割した上で、名を表す部分を地名の1最小単位とする。類概念を含むそれ以外の部分は最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／但馬／ ／摂津／

8.1.1

七道は、「道」を含めて1最小単位とする

【例】
／東海=道／ ／東山=道／ ／北陸=道／ ／山陰=道／ ／山陽=道／ ／南海=道／ ／西海=道／

8.2 地形名

地形名は、類概念を表す部分を除いた部分を1最小単位とする。

【例】
／比叡／山／ ／音羽／山／ ／賀茂／川／ ／鈴鹿／川／

8.2.1

地形名と類概念を表す部分との間にある読み添えの助詞が本文に表記されている場合は、助詞として扱い、1最小単位とする。

【例】
／音羽／の／山／ ／出雲／の／浦／ ／住吉／の／浦／

8.2.1.1

本文に表記されていない場合は8.2を適用する。

【例】
／音羽／山／

8.2.1.2

ただし、助詞を含む全体で、一般的に地名として用いられているものや、助詞を1最小単位とすることに問題があると思われるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／壇=ノ=浦／ ／如意=が=岳／ ／鬼界=が=島／

8.2.2

名を表す部分が漢字1字の場合は、類概念を表す部分をまとめて1最小単位とする。

【例】
／桂=河／ ／桜=島／

8.3 参考

現代語の最小単位認定規定にある地名に関する規定を、参考として以下に挙げる。

8.3.1

行政区画を表す地名は「都・府・県・郡・市・区・町・村・字」を除いた部分をそれぞれ1最小単位とする。類概念を表す部分には最小単位の認定規定を適用する。

【例】

／東京／都／北／区／西が丘／三／丁／目／九／番／十／四／号／

8.3.1.1

「北海道」は全体で1最小単位とする。

【例】

／北海道／夕張／郡／長沼／町／ / 明日／の／北海道／の／天気／

8.3.1.2

市区内の小区分の「～町」は「～町」を含めて1最小単位とする。

【例】

／大阪／府／豊中／市／待兼山町／ / 千代田／区／大手町／

8.3.1.3

京都の地名のうち、通りの名称の部分には 8.3.3 の規程を適用する。

【例】

／京都／市／上京／区／今出川／通／烏丸／東／入／

8.3.1.4

地名の略称は、全体を1最小単位とする。

【例】

／ちとから／（千歳烏山） / 天六／（天神橋筋六丁目）

8.3.1.5

行政区画を表す地名が他の場所名等に使われている場合には、行政区画の名を表す部分を1最小単位とし、類概念を含むそれ以外の部分は最小単位の認定規定を適用する。

【例】

／さいたま／新／都／心／駅／ / 茨木／市／駅／ / 日比谷／公／園／
／島根／県／立／松江／北／高／等／学／校／

8.3.2

外国の国名や行政区画名などにも 8.3.1 から 8.3.1.5 を適用する。

【例】

／アメリカ／合／衆／国／ / 南アフリカ／共／和／国／ / 中華／人／民／共／和／国／
／カリフォルニア／州／ / 広東／省／ / メキシコ／シティー／ / ミズーリ／ステート／

8.3.3

場所名については、名を表す部分と類概念を含むその他の部分とに分割した後、両方の部分に最小単位の認定規定を適用する。

【例】

／山／手／通り／ / 新／御／堂／筋／ / 神田／橋／ / さいたま／新／都／心／駅／ / 茨木／市／駅／
／山陽／本／線／ / 大／江戸／線／ / 首／都／圏／外／郭／放／水／路／ / アスワン／ハイ／ダム／

8.3.4

地名を略した漢字1字の「日」「米」などについては、漢語の最小単位として扱い、地名としては扱わない。

【例】

／日／米／／日／米／韓／／米／国／／日／韓／漁／業／協／定／／京／阪／／播／但／
／阪／奈／自／動／車／道／／磐／越／西／線／

8.3.5

地名のうち最小単位の認定に当たり判断に迷う例について、その認定方法を示す。

8.3.5.1 地形名

【例】

／瀬戸／内／／瀬戸／内／海／／プリンスエドワード／島／／耶馬／溪／／奥穂高／岳／
／大菩薩／峠／／鬼押出／／ポート／アイランド／／イースト／リバー／

8.3.5.2 場所名（駅名以外）

【例】

／岡田／山／古／墳／／加茂／岩倉／遺／跡／／荒神／谷／遺／跡／
／妻木／晩田／遺／跡／／吉野が里／遺／跡／／田和／山／遺／跡／
／区／役／所／通り／／富士見／坂／
／武田／山／トンネル／／八方／尾／根／スキー／場／／スターリン／広／場／
／関西／国／際／空／港／
／関／空／暗／闇／坂／／駒ヶ坂／／別府／温／泉／

8.3.5.3 駅名

8.3.5.3.1 行政区画名と一致する駅名

【例】

／東中野／／西日暮里／／江戸川／／多賀城／

8.3.5.3.2 二つの地名から成る駅名

【例】

／祖師ヶ谷／大蔵／／多摩／境／／武蔵／境／／武蔵／小山／／武蔵／小杉／／川西／池田／

8.3.5.3.3 その他

【例】

／表／参／道／／半蔵／門／

9 参考 最小単位の例

【例】

／いづれ／の／御／時／に／か、／女／御、／更／衣／あまた／さぶらひ／たまひ／ける／中／に、／いと
／やむ／ことなき／際／に／は／あら／ぬ／が、／すぐ／れ／て／時／めき／たまふ／あり／けり。／はじめ／よ
／り／我／は／と／思ひ／あがり／たまへ／る／御／方々、／めが／ましき／もの／に／おとしめ／そねみ／たま
／ふ。／同じ／ほど、／それ／より／下／藤／の／更／衣、／たち／は／まし／て／やす／から／ず。／朝／夕
／の／宮／仕／に／つけ／て／も、／人／の／心／を／のみ／動かし、／恨み／を／負ふ／つもり／に／や／あ
／り／けん、／いと／あつ／しく／なり／ゆき、／もの／心／細／げ／に／里／が／ち／なる／を、／いよ／いよ
／あか／ず／あは／れ／なる／もの／に／思ほ／して、／人／の／譏／り／を／も／え／憚／ら／せ／たまは／ず、
／世／の／例／に／も／なり／ぬ／べき／御／もて／なし／なり。／上／達／部、／上／人／など／も／あい／なく
／目／を／例／め／つつ、／いと／まば／ゆき／人／の／御／おぼ／え／なり。／唐／土／に／も、／か／かる／事
／の／起／こり／に／こそ、／世／も／乱／れ／あし／かり／けれ／と、／やう／やう、／天／の／下／に／も、
／あ／ち／き／なう／人／の／もて／な／やみ／ぐさ／に／なり／て、／楊／貴／妃／の／例／も／ひき／出／で／つ
／べ／く／なり／ゆ／く／に、／いと／は／した／なき／こと／多／かれ／ど、／か／た／じ／け／なき／御／心／ばへ／の／た／ぐ
／ひ／なき／を／頼／み／に／て／まじ／らひ／たまふ。／

第2 和語の最小単位認定に関する規則

「鎌倉時代編」の短単位認定規程の基礎となっている現代語の短単位認定規程を理解するために、現代語を対象とした短単位認定規程にある「和語の最小単位認定に関する規則」を、参考として以下に掲載する。
「和語の最小単位認定に関する規則」は、現代語を対象とした規則であり、現代語における語意識を基に最小単位の認定を行っている。そのため、規程の中には「鎌倉時代編」に適用しないものがある。それらについては、適宜、注を付した。

1 語の一覧等に基づいて最小単位を認定するもの

1.1 常用漢字表の訓

常用漢字表（1981年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）の音訓欄に掲げられた訓は、1最小単位とする。
可能動詞形については、元の動詞に準じて1最小単位とする。

【例】
／あわ=せる／ ／まつり=ごと／ ／え=がく／
／え=がける／

1.2 二語に分解しにくい「じ」「ず」を含む語

語源的には二つ以上の要素から成る語のうち、現代仮名遣い（1986年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）の第2の5において「現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの等として、それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則と」すると規定されている語のうち次に挙げるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／いな=ずま／ ／かた=ず／ ／き=ずな／ ／さか=ずき／ ／ときわ=ず／ ／ほお=ずき／ ／みみ=ずく／
／うな=ずく／ ／おと=ずれる／ ／かし=ずく／ ／つま=ずく／ ／ぬか=ずく／ ／ひざ=ま=ずく／
／あせみ=ずく／ ／さし=ずめ／ ／で=ずつ=ぱり／ ／なか=ん=ずく／ ／うで=ずく／

1.3 「要注意語」

「要注意語」の「助詞」「助動詞」「接頭的要素」「接尾的要素」に挙げたものは1最小単位とする。
可能動詞形については、元の動詞及び動詞性接尾辞に準じて1最小単位とする。

【例】
／それ／で／も／ ／話し／た／ ／考え／がたい／ ／乗り／こなす／ ／乗り／こなせる／
／使い／まくれる／

2 上記の規定に該当しないものに関する規定

2.1 単独で使用される語

コーパス中の文において、他の要素と結合せず単独で語として使われているものは1最小単位とする。

【例】
／空／が／ 【かすむ】／

2.2 複合語を構成する要素

複合語を構成する要素については、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.2.1

複合語の構成要素のうち、現代語において単独で語として機能し得るものどうしが結合して語を構成している場合は、それぞれの構成要素を1最小単位とする。

【例】
／空き／家／ ／灰汁／抜き／ ／揚げ／足／ ／明け／暮れる／

2.2.2

結合の際に音変化が起きているものは、以下の規程によって最小単位を認定する。

2.2.2.1

複合語の前項に音変化が起きているものは、以下の規程によって最小単位を認定する。

2.2.2.1.1

前項が被覆形となっているものは、その音節数等によって、以下のように最小単位を認定する。

2.2.2.1.1.1

2音節以上であれば、原則として1最小単位とする。

【例】
／つま／先／

2.2.2.1.1.1.1

ただし、以下のいずれかに該当するものは、1最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

2.2.2.1.1.1.1.1

既に語源意識が失われていると考えられるもの

【例】
／うつ=ぶす／

2.2.2.1.1.1.1.2

一方の構成要素が語源未詳、若しくは語源は判明しているが、音変化等のため一般には元の語への還元が難しいと考えられるもの

【例】
／うわ=みず／（上溝）　／しら=に／（白土）　／しら=ふ／

2.2.2.1.1.2

1音節で、元の形への還元が難しくないと考えられるものは1最小単位とする。

【例】
／木／陰／　／木／枯らし／　／木／立ち／

2.2.2.1.1.2.1

語源意識が失われている等の理由によって一般には元の形への還元が難しいと考えられるものは1最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

【例】
／こ=だま／　／こ=ぬれ／　／か=ぶれる／　／こ=がね／　／こ=よみ／

2.2.2.1.2

前項の名詞に音変化が生じている場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／かい=ま／（垣間）　／かえ=で／（<蛙手）　／かん=ざし／（簪）

2.2.2.1.3

前項が用言の音便形となっているものは、以下のように最小単位を認定する。

2.2.2.1.3.1

後項が動詞である場合（当該の複合語が複合動詞，又はその転成名詞である場合），前項を1最小単位とする。一般には語源が意識されることの少ない語についても同様に扱う。

【例】
／追っ／掛け／　／切っ／掛け／　／くっ／付く／

2.2.2.1.3.2

前項の動詞が連用形に見られる音便形とは異なる音便形を取っていても，それが規則的で広く用いられるものである場合は，前項を1最小単位とする。

【例】
／突っ／張る／　／引っ／掛かる／　／吹っ／切れる／

2.2.2.1.3.3

前項の動詞が連用形に見られる音便形とは異なる音便形で個別的な事例と考えられる場合や，音の脱落を生じている場合は，前項を1最小単位とせず，全体で1最小単位とする。

【例】
／おもん=ばかる／　／しゃべ=くる／　／せっ=かち／

2.2.2.1.3.4

後項が用言以外である場合，後項と結合した形で1最小単位とする。

【例】
／追っ=手／　／同い=年／　／切=手／

2.2.2.1.4

後項が個別の変化を起こしている等のことから，それを1最小単位と認定し難い場合は，個別の判断によって最小単位を認定する。

【例】
／飲んだくれる／
※「たくれる」を最小単位と認定する必要はないと考えられるため。
／引っ／ぺがす／
※「引っ／ぱがす」が2最小単位となることとの整合性を取るため。

2.2.2.2

複合語の後項に音変化が起きているものは，以下の規定によって最小単位を認定する。

2.2.2.2.1

連濁を生じている場合も，元の形が規定 2.2.1 に該当するものであれば，1最小単位とする。

【例】
／わたし／ぶね／（渡し船）　／ほん／ばこ／（本箱）

2.2.2.2.1.1

常用漢字表の音訓欄に挙げた訓には，規定 1.1 が優先的に適用される。

【例】
／え=がく／　／いろ=どる／

2.2.2.2.2

後項の語頭の母音に子音が挿入されている場合も，前項・後項をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／あき／さめ／（秋雨）　／きり／さめ／（霧雨）

2.2.2.2.3

後項の語頭音が個別的に変化・脱落している場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／かわ=も／（川面）　／かわ=ら／（川原）　／ごき=ぶり／

2.2.2.2.4

結合部分の母音が融合している場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／おっしやる／　／きゅうり／　／しょう／（背負う）

2.2.2.2.4.1

ただし、「ひと（人）」に由来する「と」「うと（ど）」「っと」等を最小単位と認める関係上、本規定に該当する語であっても、「と」「うと（ど）」「っと」と前項とをそれぞれ1最小単位とすることがある。

【例】
／おちゅ／うど／（落人）　／わこ／うど／（若人）

2.2.2.2.4.1.1

「（う）と」の部分に「人」の意味が殆ど認められない語は、全体で1最小単位と認めることがある。

【例】
／隼人／　／もうと／（真人）

2.2.3

結合の際に挿入された促音又は撥音は、後項に含める。

【例】
／開け／っ広げ／　／朝／っばら／　／甘／ったれ／　／甘／っちよろい／　／腕／っ節／　／崖／っ淵／
／首／っ引き／　／くま／ん蜂／　／下／っ端／　／しみ／ったれる／　／杉／っ葉／　／手／っ取り／早い／
／出／っ歯／　／出／っ張る／　／菜／っ葉／　／抜き／ん出る／　／猫／っ毛／　／端／っ端／
／びり／っけっ／　／宵／っ張り／

2.3 助詞・助動詞を構成要素に含む語

助詞・助動詞を構成要素に含む語は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.3.1 1最小単位とする助詞・助動詞

以下に挙げる語の構成要素となっている助詞・助動詞は1最小単位とする。助詞・助動詞以外の構成要素は、特に定めのない限り、他の規定に基づいて最小単位を認定する。

2.3.1.1 「一の～」

前後の要素が古語であったり、音変化を生じていたりする場合も、助詞「の」を1最小単位とする。

【例】
／味／の／素／　／天／の／川／　／あま／の／じゃく／　／有り／の／俣／　／タツ／ノ／オトシ／ゴ／

2.3.1.2 助動詞の連用形が独立性を失い、動詞と1語化して名詞・形状詞に転じたもの

【例】
／いわ／れ／（謂れ）／いやがら／せ／／知ら／せ／／憎ま／れ／っ子／／人／泣か／せ／
／人／騒が／せ／／番／狂わ／せ／／虫／刺さ／れ／／やら／せ／

2.3.1.3 その他の名詞・形状詞等

【例】
／擦っ／た／揉ん／だ／／土／踏ま／ず／／人／で／なし／／減ら／ず／口／／間／に／合う／
／水／入ら／ず／

2.3.1.4 「動詞＋て」型の副詞

【例】
／あえ／て／／改め／て／／得／て／し／て／／かえっ／て／／かね／て／／辛う／じ／て／
／極め／て／／強い／て／／すべ／て／／せめ／て／／次い／で／／なべ／て／／果たし／て／
／ひい／て／は／／翻っ／て／／まし／て／

2.3.1.5 「動詞＋ず」型の副詞

【例】
／すかさ／ず／／取り／あえ／ず／

2.3.1.6 「動詞の未然形・已然形＋ば」型の副詞

【例】
／言わ／ば／／例え／ば／

2.3.1.7 「形容詞の連用形＋は」型の副詞

【例】
／あわ／よく／ば／

2.3.1.8 「副詞・形容詞の連用形＋も」型の副詞

【例】
／いと／も／／やや／も／／奇しく／も／／いやしく／も／／畏く／も／／からく／も／
／くれ／ぐれ／も／／よく／も／

2.3.1.9 その他の副詞

【例】
／飽く／まで／／如何／せ／ん／／いわ／ん／や／／なる／べく／／願わく／ば／／びく／と／も／
／まる／で／／わり／と／

2.3.1.10 「動詞＋ぬ・ない」型の連体詞

【例】
／素／知ら／ぬ／／尽き／せ／ぬ／

2.3.1.11 「動詞＋べき」型の連体詞

【例】
／さる／べき／／しかる／べき／

2.3.1.12 「動詞＋たる」型の連体詞

【例】
／さし／たる／

2.3.1.13 「動詞＋て＋動詞」型の動詞及びその転成名詞

【例】
／取っ／て／置き／

2.3.2 1 最小単位としない助詞・助動詞

以下に挙げる語の構成要素となっている助詞・助動詞は1最小単位とはしない。助詞・助動詞を含む全体で1最小単位とする。

2.3.2.1 「動詞+て+動詞」のうち、助詞「て」が後続の動詞と縮約しているもの

【例】
／打ちやる／ ／置いてけ／ぼり／

2.3.2.2 「持って」に由来する「も(っ)て」を含む語(その転成名詞を含む。)

【例】
／も=て／あそぶ／ ／持=て／余す／ ／も=て／なす／ ／も=て／なし／

2.3.2.3 助詞「は」を含む語のうち、助詞「は」に由来する要素が「わ」と表記される語

【例】
／イマ=ワ／ (今際)

2.3.2.4 「～に」型の副詞

本規定の適用を受ける語については、「鎌倉時代編」と現代語とで異なる場合がある。

【例】
／大い=に／ ／更=に／ ／ひとり=で=に／

2.3.2.5 「～なる・な」型の連体詞

「鎌倉時代編」では、原則として連体詞を認めない。

2.3.2.6 「動詞以外+たる」型の連体詞

「鎌倉時代編」では、原則として連体詞を認めない。

2.3.2.7 あいさつ・掛け声等の感動詞

【例】
／どう=ぞ／ ／さら=ば／ ／けしから=ん／ ／こんにち=は／ ／こんばん=は／ ／さよう=なら／

2.3.2.8 その他

【例】
／あた=か=も／
※「あた」を最小単位とは認め難いため。

2.4 副詞「と」「かく」を構成要素を含む語

副詞「と」「かく」を構成要素を含む語については、副詞「と」「かく」を1最小単位とした上で、他の要素もそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／と／ある／ ／兎／角／ ／兎／に／角／ ／と／も／あれ／ ／兎／も／角／ ／と／て／も／
／と／に／も／かく／に／も／

2.5 派生形容詞・繰り返しの要素を含む副詞・形状詞

派生形容詞及び繰り返しの要素を含む副詞・形状詞については、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.5.1

「AAしい」という語構成の形容詞は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／青／々しい／ 　／軽／々しい／ 　／白／々しい／ 　／痛／々しい／ 　／忌／々しい／ 　／初／々しい／

2.5.2

「黄色い」「奥ゆかしい」等、複合語に形容詞語尾が付いた語（「待ち遠しい」のようにク活用型形容詞の語幹にシク活用型形容詞の活用語尾が接続したものを含む。）は、以下のように最小単位を認定する。

【例】
／黄／色い／ 　／待ち／遠しい／ 　／奥／ゆかしい／

2.5.3

複合名詞の一部が形容詞語尾として異分析された語や、後項に個別的な音変化が生じているものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／目=ぼしい／
※目星の転
／目=まぐるしい／
※「目+紛らしい」の転。後項「紛らしい」に音変化が生じている。

2.5.4

重複要素を含む副詞・形状詞は、次のように重複する要素をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／粗／々／ 　／生き／生き／ 　／色／々／ 　／浮き／浮き／ 　／更／々／ 　／偶／々／ 　／つい／つい／
／いよ／いよ／ 　／しば／しば／ 　／そろ／そろ／

2.6 接頭辞

接頭辞は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.6.1.1 生物の雌雄を区別する「お（雄）」

【例】
／雄／牛／ 　／牡／鹿／

2.6.1.1.1

ただし、生物の雌雄を直接指示しない「お」は除く。

【例】
／雄=たけび／

2.6.1.2 おお（大）

【例】
／大／君／ 　／大／雨／

2.6.1.3 か

【例】
／か／細い／ 　／か／弱い／

2.6.1.4 こ（小）

【例】
／小／商い／

2.6.1.4.1

ただし、「小間」の「こ」を除く。

【例】

／小=間／物／ 　／小=間／使い／

2.6.1.5 こっ

【例】

／こっ／ばずかしい／ 　／こっ／酷い／

2.6.1.6 さ

【例】

／さ／迷う／ 　／小／夜／

2.6.1.7 さか (逆)

【例】

／さか／うらみ／ 　／さか／のぼる／

2.6.1.7.1

ただし、以下の「さか」は除く。

【例】

／逆=さ／ 　／逆=らう／

2.6.1.8 だだ

【例】

／だだっ／広い／

2.6.1.9 ど

【例】

／ど／田舎／ 　／ど／えらい／ 　／ど／ぎつい／ 　／度／肝／ 　／度／突く／ 　／どん／底／

2.6.1.10 どす

【例】

／どす／黒い／

2.6.1.11 ひ

【例】

／ひ／弱／

2.6.1.12 ひた

【例】

／ひた／隠す／ 　／ひた／あやまり／

2.6.1.12.1

ただし、以下のものは除く。

【例】

／ひた=すら／ 　／ひた=むき／

2.6.1.13 ま (真)

【例】
／ま／いわし／ 　／真ん／中／ 　／真っ／白／

2.6.1.14 め (雌)

【例】
／雌／牛／ 　／牝／鹿／

2.6.1.15 ゆう (夕)

【例】
／夕／焼け／ 　／夕／暮れ／

2.7 接尾辞

接尾辞は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.7.1 1 最小単位とする接尾辞

次に挙げる接尾辞は、1 最小単位と認定する。

2.7.1.1 がましい

【例】
／おこ／がましい／ 　／押し／付け／がましい／

2.7.1.2 がり

【例】
／暗／がり／ 　／怖／がり／ 　／強／がり／ 　／広／がり／

2.7.1.3 かす

【例】
／甘や／かす／ 　／脅／かす／ 　／おびや／かす／ 　／散ら／かす／ 　／寝／かす／ 　／冷や／かす／
／ほったら／かし／ 　／ほったら／かす／ 　／ほっぽら／かす／ 　／見せびら／かす／ 　／やら／かす／
／笑／かす／

2.7.1.4 け

【例】
／真っ／暗／け／ 　／真っ／白／け／

2.7.1.5 ころ

【例】
／石／ころ／ 　／犬／ころ／

2.7.1.6 ずむ

【例】
／黒／ずむ／

2.7.1.7 たらしい

【例】
／長／たらしい／ 　／憎／たらしい／ 　／みじめ／たらしい／

2.7.1.8 っこい

【例】
／油／っこい／ 　／丸／っこい／ 　／ねば／っこい／ 　／ねち／っこい／

2.7.1.9 ったい

【例】
／野暮／ったい／ 　／口／幅／ったい／

2.7.1.10 ったけ

【例】
／首／っ丈／ 　／有り／っ丈／

2.7.1.11 ったるい

【例】
／甘／ったるい／

2.7.1.12 っち

【例】
／タマゴ／ッチ／

2.7.1.13 っちい

【例】
／丸／っちい／ 　／嘘／っちい／

2.7.1.14 っちよ

【例】
／先／っちよ／ 　／横／っちよ／

2.7.1.15 っばち

【例】
／嘘／っばち／ 　／自棄／っばち／

2.7.1.16 っぺ

【例】
／田舎／っぺ／ 　／野／っぺ／

2.7.1.17 っぺら

【例】
／薄／っぺら／

2.7.1.18 っぺらい

【例】
／薄／っぺらい／ 　／やす／っぺらい／

2.7.1.19 っぼ

【例】
／尾／っぼ／ 　／先／っぼ／ 　／空／っぼ／

2.7.1.20 っぼい

【例】
／荒／っぼい／ 　／安／っぼい／

2.7.1.21 びる

【例】
／古／びる／

2.7.1.22 びれる

【例】
／悪／びれる／

2.7.1.23 べったい

【例】
／平／べったい／

2.7.1.24 ぼったい

【例】
／厚／ぼったい／ ／暗／ぼったい／ ／腫れ／ぼったい／

2.7.1.25 めかしい

【例】
／艶／めかしい／ ／古／めかしい／

2.7.2 1 最小単位としない接尾辞

次に挙げる接尾辞は前の要素に含める。

2.7.2.1 ク語法

【例】
／いわ=く／ ／ねがわ=く／ ／思えら=く／

2.7.2.2 こ

擬音語・擬態語に付いて、「～という状態である」という意の語や他の擬音語・擬態語を作る。

【例】
／泥ん=こ／ ／どんぶら=こ=っこ／ ／ぺたん=こ／ ／ぺちゃん=こ／

2.7.2.3 こ

名詞や擬音語に付いて、そのものに対する愛着・愛情等を表現する名詞を作る。

【例】
／にゃん=こ／ ／わん=こ／

2.7.2.4 ち（歳）

【例】
／はた=ち／ ／三十=路／

2.7.2.5 っか

【例】
／輪=っか／

2.7.2.6 っかしい

【例】
／危な=つかしい／ 　／そそ=つかしい／

2.7.2.7 　　かかる

【例】
／乗っ=かる／

2.7.2.8 　　つける

【例】
／乗っ=ける／

2.7.2.9 　　っぴら

【例】
／大=っぴら／ 　／真=っぴら／

2.7.2.10 まか

【例】
／大=まか／ 　／ちょこ=まか／

2.7.2.11 　　まる

【例】
／薄=まる／ 　／奥=まる／ 　／固=まる／ 　／静=まる／ 　／狭=まる／ 　／高=まる／

2.7.2.12 　　める

【例】
／赤ら=める／ 　／薄=める／ 　／固=める／ 　／静=める／ 　／高=める／

2.7.2.13 　　み

【例】
／とろ=み／ 　／柔らか=み／ 　／弱=み／

2.8 　1音節の基本語を構成要素に含む語

1音節の基本語を構成要素に含む語は、その基本語を分析・還元することが難しいと考えられる場合、最小単位とせず全体で1最小単位とすることがある。

2.8.1 　サ変動詞「する」の連用形「し」

サ変動詞「する」の連用形「し」を含む語については、「し」に当たる要素が「仕」「支」等の別字で表記されることが多いため、原則として「し」を最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／試=合／ 　／し=あわせ／ 　／仕=入れる／ 　／仕=立て／ 　／仕=付け／糸／ 　／仕=留める／ 　／し=にせ／
／支=払い／ 　／仕=舞う／ 　／仕=業／

2.8.1.1

ただし、「する」の意味が比較的強く感じられる語は、「し」を1最小単位とする。

【例】
／為／手／ 　／為／直す／

2.8.2 　「す(素)」 「そ(素)」

「す(素)」「そ(素)」を含む語は、「す」「そ」を1最小単位とする。

【例】

／素っ／飛ばす／ ／素っ／飛ぶ／ ／素っ／びん／ ／素っ／裸／ ／素／手／ ／素／通り／ ／素／肌／
／そ／振り／

2.8.2.1

ただし、以下のように、他方の構成要素の意味が独立して認識される度合いの小さい語に用いられたものは「す」「そ」を1最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】

／素=直／ ／素=晴らしい／ ／素っ=気／

2.8.3 「て(手)」

「て(手)」を含む語は、原則として「て」を1最小単位とする。

【例】

／手／垢／ ／手／上げ／ ／手／足／ ／手／厚い／ ／手／当て／ ／手／薄／ ／手／落ち／ ／手／紙／
／手／柄／ ／手／軽／ ／手／際／ ／手／口／ ／手／答え／ ／手／塩／ ／手／摺／
／手／っ取り／早い／ ／手／引き／ ／痛／手／ ／射／手／ ／受け／手／ ／薄／手／ ／裏／手／
／売り／手／

2.8.3.1

ただし、以下に挙げるものは「て」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.3.2.1 他の規定によって全体で1最小単位と認定されるもの

【例】

／てんでん／ ／てんやわんや／

2.8.3.2.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】

／挺子／ ／てこずる／ ／手伝う／ ／手間／

2.8.4 「ま(間)」

「ま(間)」を含む語は、原則として「ま」を1最小単位とする。

【例】

／間／際／ ／間／口／ ／間／近／ ／間／取り／ ／間／に／合う／ ／間／抜け／ ／間／引く／
／間／違い／ ／間／違う／ ／間／違え／ ／間／違える／

2.8.4.1

ただし、現在語源意識が極めて希薄であるもの等は、「ま」を最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

【例】

／万=引き／ (<間引き)

2.8.5 動詞「見る」の連用形「み」

動詞「見る」の連用形「み」を含む語は、原則として「み」を1最小単位とする。

【例】
／見／合い／ 見／出だす／ 見／入る／ 見／劣り／ 見／限る／ 見／応え／ 見／詰める／
／看／取る／ 見／栄え／ 見／舞う／ 国／見／ 下／見／ 見／付かる／※

※「付かる」という語が単独で存在しているわけではないが、「／見／付ける／」に対応する語として「／見／付かる／」の2最小単位に分割する。

2.8.5.1

ただし、以下に挙げるものは「み」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.5.1.1 他の規定によって1最小単位と認定されるもの

【例】
／認める／ 醜い／

2.8.5.1.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／見事／ 見／みともない／

2.8.6 「め（目）」

「め（目）」を含む語については、原則として「め」を1最小単位とする。

【例】
／目／新しい／ 目／当て／ 眼／鏡／ 目／くじら／ 目／先／ 目／指す／ 目／敏い／
／目／覚める／ 目／付き／ 目／抜き／ 目／安／ 網／目／ 板／目／ 裏／目／ 上／目／
／負い／目／

2.8.6.1

ただし、以下に挙げるものは「め」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.6.1.1 他の規定によって1最小単位と認定されるもの

【例】
／め＝くるめく／ め＝じろ／ め＝ぼしい／ 目ま＝ぐるしい／

2.8.6.1.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／め＝ど／

2.9 語の構成要素となっている古語

語の構成要素となっている古語は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.9.1

語の構成要素となっている動詞が、文語の活用形を残存している場合にも、それを1最小単位と認定する。

【例】
／あし／げ／（足蹴） ／こじ／開ける／ 攀じ／登る／

2.9.2

助詞「つ」「の」等の母音交替形や、鎌倉時代において既に生産性が低くなっていると判断される助詞は、最小単位とせず全体で1最小単位とする。

【例】
／ひ=な=た／ /み=な=そこ／

2.9.3

1 語化した語の中に残存する文語の助動詞は、1 最小単位としない。

【例】
／あら=まし／ /いわ=ゆる／

2.10 その他、最小単位としないもの

以下に挙げる要素は、最小単位としない。

2.10.1 指示代名詞の構成要素「あ」「か」「こ(ん)」「さ」「そ(ん)」等

【例】
／あそこ／ /あちら／ /あなた／ /きゃつ／ /こいつ／

2.10.2 疑問代名詞・疑問副詞などの構成要素「いか」「いく(幾)」「ど」等

【例】
／いく=た／ /いく=ばく／ /いく=ら／

2.10.3 単独では動植物を示すことがない一般語が複数結合し、動植物名として用いられている語の構成要素、及び構成要素の一部に動植物名を含むが、結合した全体は個々の構成要素が表す動植物とは無関係な動植物を表す語の構成要素

【例】
／あさ=がお／ /いし=もち／ /かた=つむり／ /き=くらげ／

2.10.4 競走馬名などの構成要素

【例】
／マチ=カネ=フク=キタル／ /マチ=カネ=ワラウ=カド／

2.11 その他、問題となる語

以上に定めたもののほか、問題となる語の最小単位認定について、次に一覧する。

2.11.1

次に挙げる語は、元々は二つ以上の要素から成るが、現在は既に1語と意識されていると考えられるため、全体で1最小単位とする。

《あ》

仰向け(アオムケ) 足掻く(アガク) 論う(アゲツラウ) 曙(アケボノ) 浅はか(アサハカ)
朝ぼらけ(アサボラケ) 嘲笑う(アザワラウ) 汗疹(アセモ) 厚かましい(アツカマシイ)
呆気(アツケ) あっけらかん 当てずっぽう(アテズッポウ) あどけ(ない) 脂ぎる(アブラギル)
油ぎる(アブラギル) あやふや 現人(神) (アラヒト(ガミ)) 在処(アリカ)
有りふれる(アリフレル) 経緯(イキサツ) 行成(イキナリ) 藺草(イグサ)
居た堪れる(イタタマレル) 躰(イビキ) 息吹き(イブキ) 鋳師(イモジ) いんちき
後ろめたい(ウシロメタイ) 団扇(ウチワ) 自惚れる(ウヌボレル) 姥目(ウバメ)
羨ましい(ウラヤマシイ) 羨む(ウラヤム) 浮つく(ウワツク) 得手(エテ) 干支(エト)
花魁(オイラン) 大凡(オオヨソ) 落ちぶれる(オチブレル) 弟切(オトギリ) 一昨日(オトトイ)
一昨年(オトトシ) 乙女(オトメ) 寛束無い(オボツカナイ) おわします おんぼろ

《か》

神楽(カグラ) 駆けずる(カケズル) 瘡蓋(カサブタ) 気質(カタギ) 片栗(粉)(カタクリ(コ))
忝い(カタジケナイ) 象る(カタドル) 形見(カタミ) 竈(カマド) 蒲鉾(カマボコ)
我楽多(ガラクタ) 枳殻(カラタチ) 木こり(キコリ) 如月(キサラギ) きな粉(キナコ)
木目(キメ) 際どい(キワドイ) 草薙(クサナギ) 嘴(クチバシ) 毛羽(ケバ)
毛むくじゃら(ケムクジャラ) 煙たい(ケムタイ) 悉く(コトゴトク) 言葉(コトバ) 寿ぐ(コトホグ)
諺(コトワザ) 小間(コマ)

《さ》

棧敷(サジキ) 皐月(サツキ) 最中(サナカ) ざりがに 潮騒(シオサイ) しこたま
枝垂れる(シダレル) 芝居(シバイ) 僕(シモベ) 白ける(シラケル) しるべ 辛抱(シンボウ)
酢橘(スダチ) 簾(スダレ) すっからかん すっ込む(スッコム) 住処(スミカ) 背子(セコ)
そそくさ 某(ソレガン)

《た》

暈付く(タタナツク) 忽ち(タチマチ) 七夕(タナバタ) たなびく 容易い(タヤスイ) ちぎれる
稚児(チゴ) 司る(ツカサドル) 辻褄(ツジツマ) 恙ない(ツツガナイ) 津波(ツナミ) 唾(ツバ)
椿(ツバキ) 鶴嘴(ツルハシ) 釣瓶(ツルベ) 出しゃばり(デシャバリ) 出しゃばる(デシャバル)
出鱈目(デタラメ) てんでん(テンデン) 途切れ(トギレ) 途切れる(トギレル) 途絶える(トダエル)
怒鳴る(ドナル) とびきり(トビキリ) 戸惑い(トマドイ) 戸惑う(トマドウ) 止めど(トメド)
鳥居(トリイ) 虜(トリコ) 砦(トリデ) 取り分け(トリワケ) 団栗(ドングリ) とんでも(ない)

《な》

名うて(ナウテ) 亡くなる(ナクナル) なけなし 何某(ナニガシ) 名乗り(ナノリ) 名乗る(ナノル)
名乗れる(ナノレル) なまじっか 何ぼ(ナンボ) ねんね 仰け反る(ノケゾル) のさばる

《は》

羽織(ハオリ) 羽交い(ハガイ) 葉書(ハガキ) 渉る(ハカドル) 儂い(ハカナイ) 儂む(ハカナム)
狭間(ハザマ) 梯子(ハシゴ) 鱒(ハタハタ) 葉っぱ(ハツバ) 餞(ハナムケ) 埴輪(ハニワ)
羽根(ハネ) 原っぱ(ハラッパ) 遙々(ハルバル) 日がな(ヒガナ) 蹄(ヒヅメ) ひねくれる
日和る(ヒヨル) 平たい(ヒラタイ) 平たく(ヒラタク) ひれ伏す(ヒレフス) 広げる(ヒロゲル)
ふくらはぎ 不貞腐れる(フテクサレル) へたばる 部屋(ヘヤ) ほくそ笑む(ホクソエム)
ほつつき(歩く) 進む(ホトバシル)

《ま》

馬子(マゴ) 実しやか(マコトシヤカ) まさか 真砂(マサゴ) 真面目(マジメ) 混ぜこぜ(マゼコゼ)
まっしぐら 真秀ろば(マホロバ) 蝮(マムシ) 丸切り(マルキリ) 晦日(ミツカ) 見附(ミツケ)
見惚れる(ミトレル) 深山(ミヤマ) 蝕む(ムシバム) 息子(ムスコ) 群がる(ムラガル)
娶る(メトル) 目眩(メマイ) 基づく(モトツク) 裳抜け(モヌケ) 最早(モハヤ) 最寄り(モヨリ)

《や》

館(ヤカタ) やきもき 火傷(ヤケド) 屋敷(ヤシキ) やっとこ やっとこさ 屋根(ヤネ)
矢張り(ヤハリ) 流鏑馬(ヤブサメ) 山びこ(ヤマビコ) 昨夜(ユウベ) タベ(ユウベ)
湯がく(ユガク) 行きずり(ユキズリ) 蘇る(ヨミガエル) 四方山(ヨモヤマ)
夜半(ヨフ)

《わ》

轍(ワダチ) 侘助(ワビスケ)

2.11.2

次に挙げる語は、現在単独で用いられることがない、あるいはほとんどない要素を含む。しかし、それを構成要素に持つ語について、現在のところ複数の構成要素から成る語であると意識されており、その要素も複数の語の中に認められるなど、一定の独立性を持っていると考えられるため、1最小単位とする。

《あ》
 /あから/さま/ /朝な/朝な/ /朝な/夕な/ /あだ/名/ /新/巻/ /熱り/立つ/
 /投げ/うつ/ /産/声/ /産/湯/ /うろ/覚え/ /うろ/つく/ /うわ/ごと/ /生き/餌/
 /撒き/餌/ /笑/顔/ /生い/立ち/ /おい/どん/ /面/影/ /面/持ち/
 《か》
 /嵩/張る/ /わり/かし/ /神/主/ /色/きち/ /くす/だま/ /無茶/苦茶/ /滅茶/苦茶/
 /かま/くら/ /おし/くら/
 《さ》
 /遠/ざかる/ /今/更/ /殊/更/ /しか/じか/ /しず/しず/ /じり/安/ /代/物/
 /道/すがら/ /後/ずさり/ /炭/すご/ /せせら/笑う/ /ぞろ/目/ /寝/そべる/
 《た》
 /横/たえる/ /塗り/たくる/ /耳/たぶ/ /だふ/屋/ /たわ/ごと/ /横/たわる/
 /千/尋/ /千/代/ /乳/飲み/子/ /乳/首/ /ちよめ/ちよめ/ /はい/つくばる/
 /常/夏/ /常/世/ /どさ/くさ/ /どさ/回り/ /とど/松/ /どんでん/返る/
 /どんど/焼き/
 《な》
 /ぬるま/湯/ /のんべん/だりり/
 《は》
 /端/唄/ /端/ぎれ/ /羽/ばたく/ /はし/ぶと/ /はし/ぼそ/ /はす/向かい/
 /はちや/めちや/ /食み/瓜/ /はみ/出す/ /はみ/出る/ /曾/孫/ /久/方/
 /引っこ/抜く/ /芝/生/ /舐/先/ /海/辺/ /川/辺/ /岸/辺/ /へし/合い/
 /へし/折る/ /へり/くだる/ /瘦せ/つぼち/ /洞/穴/ /ほろ/苦い/
 《ま》
 /ぶち/まける/ /まて/貝/ /まてば/しい/ /まな/板/ /継/子/ /継/母/ /まま/ごと/
 /血/みどろ/ /むく/鳥/ /女/神/ /やたら/めったら/ /めり/はり/ /もも/とり/
 /諸/手/ /諸/刃/ /諸/々/
 《や》
 /八百/屋/ /八百/万/ /青/柳/ /朝な/夕な/ /ゆすら/うめ/ /夜な/夜な/
 《わ》
 /板/わさ/

第3 最小単位の分類

短単位を認定するために、最小単位を以下のように分類する。

【例】
 分類

一般	和語 【例】春 花 あはれ 言ふ 言葉 …
	漢語 【例】関 白 加持 …
	外来語 【例】阿闍梨 菩薩 瑠璃 …
付属要素	接頭的要素（「要注意語」の「接頭的要素」に掲げたもの。） 【例】相 御（おおん、ご、み） 打ち なま …
	接尾的要素（「要注意語」の「接尾的要素」に掲げたもの。） 【例】君（ごみ） 難し 気（げ） 様（さま） …
記号	【例】、 ・ 。（ 「 」 …
数	【例】一 二 十 百 千 …幾 数 何
固有名	人名 【例】源 貫之 伊勢 あこぎ …
	地名 【例】大和 土佐 入間 住吉 吉野 逢坂 …
助詞・助動詞	【例】の を ぞ こそ し る・らる ず まじ まほし なり …

1 補則

1.1 一般

1.1.1

ヒトリ（一人）・フタリ（二人）は、「一般」に分類する。

1.1.2

「一」「二」等、数を表す最小単位のうち、数量を表すことに主眼がなく、他との結合が慣用的であり、かつ全体で一つの決まった内容を表すもの（おおよそ次の 1.1.2.1 から 1.1.2.7 に当たるもの）は「一般」に分類する。

1.1.2.1 サ変動詞、副詞、形状詞として使われる語やそれに準じる意味となる語

【例】

一休み 一読 三振 一刻 一律 一時 一流 三角 四角

1.1.2.2 四字熟語、成句の構成要素

【例】

一石二鳥 一夫多妻 一騎当千 ひと騒ぎふた騒ぎ（「ひと一ふた一」という型の表現）

1.1.2.3 比喩的・抽象的で、数字どおりの数を示さないもの（不定の量や大量を表す。）

【例】

一種 一团 一員 一抹 一欠片 八宝 四方 十二分に

1.1.2.4 そのカテゴリに属する種類の数を表すもの

【例】

三家 四季 四苦八苦 六法 七味

1.1.2.5 その他具体的な事柄を表すもの

【例】

七節（虫の名前） 八頭（里芋の品種） 八字・十字（字の形） 四捨五入 四球（四死球） 三箇日 三つ星 二紋

1.1.2.6 数字を含む略語

【例】

小六 中二 高三 四駆（四輪駆動の略） 二文（早稲田大学第二文学部の略）

1.1.2.7 その他

【例】

二の腕 三つ編み 四つ角 二枚舌

1.2 数

「幾」「数」「何」が「幾人」「数百」「何個」のように不定の数を表す場合は、「数」に分類する。

第2章 短単位認定規程

第1 短単位認定規程

短単位は、長単位の中で最小単位が以下の規程に基づいて結合した（又は結合しない（これは0回結合と考える。））結合体である。

短単位の認定に関する規程は、第1章 第3 「最小単位の分類」で分類した種類ごとに適用すべき規程が定められている。以下に、それを示す。

1 一般

1.1 原則

原則として、「一般」に分類した和語・漢語の最小単位二つの1次結合は1短単位とする。

【例】

|母=宮| |あいだち=なし| |心=のどか| |法=師| |帝=后| |調=度| |経=箱|

1.2 複合動詞

鎌倉時代の動詞連続は、複合動詞と認定すべきか否か判断に迷うものが多い。「鎌倉時代編」では、複合動詞を認めず、動詞1最小単位を1短単位とする。

【例】

|歎き|明かす| |歎き|おそる| |思し|放つ|

1.2.1

ただし、以下に挙げるものは2最小単位の結合であっても全体で1短単位とする。

【例】

|参い上る| (まいのぼる) |参い来る| (まいくる) |漕ぎ回う| (こぎまう)
|駢ち臥す| (くづちふす) |老い痴らう| (おいしらう) |聞こし召す| |思し召す| |仕えまつる|

1.3 3最小単位以上の結合を1短単位とするもの

以下に挙げるものは、3最小単位以上の結合であっても全体で1短単位とする。

1.3.1 切る位置が明確でないもの、あるいは切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるもの

【例】

|観世音| |大殿籠もる|

1.3.2 「一が～」 「一つ～」 「一の～」

資料「要注意語」の「一が～」 「一つ～」 「一の～」 に挙げたもの。本規定の適用を受ける語は、「鎌倉時代編」での実態を踏まえて、現代語より範囲を限定している。「鎌倉時代編」で1短単位とする「一が～」 「一つ～」 「一の～」 は、以下のとおり。

なお、以下のほかに、一宮・二宮の類、一君・二君の類、榎・檜の類を1短単位とする。

【例】

「一が～」
雁が音 岩が根

「一つ～」
滝つ瀬 夜去方 (よさりつかた) わたつうみ 海神 (わたつみ)

「一の～」
天の川 (あまのがわ) 天の橋立 (あまのはしだて) 有りの俣 (ありのまま) 一院 (いちのいん)
一上 (いちのかみ) 一宮 (いちのみや) 齋宮 (いつきのみや) 亥子 (いのこ) 猪 (いのしし)
表袴 (うえのはかま) 氏上 (うじのかみ) 卯の花 (うのはな) 馬頭 (うまのかみ)
上の空 (うわのそら) 鬼の間 (おにのま) 尾の上 (おのえ) 香菓 (かくのみ) 鹿の子 (かのこ)
軽市 (かるのいち) 貫の木 (かんのき) 后宮 (きさいのみや) 北の方 (きたのかた)
柵造 (きのみやつこ) 樟 (くすのき) 国守 (くにのかみ) 国造 (くのみやつこ)
呉母 (くれのおも) 評督 (こおりのかみ) 郡造 (こおりのみやつこ) 言の葉 (ことのは)
兄 (このかみ) 権守 (ごんのかみ) 権帥 (ごんのそち) 陣座 (じんのざ) 少領 (すけのみやつこ)
實の子 (すのこ) 兄の君 (せのきみ) 帥宮 (そちのみや) 対屋 (たいのや) 竹の子 (たけのこ)
田の面 (たのも) 榊 (たぶのき) 月の桂 (つぎのかつら) 次の間 (つぎのま) 頭弁 (とうのべん)
外の重 (とのえ) 外葉 (とのくすり) 伴の緒 (とものお) 豊明 (とよのあかり)
鳥の子 (とりの子) 尚侍 (ないしのかみ) 典侍 (ないしのすけ) 中君 (なかのきみ)
中の間 (なかのま) 尚縫 (ぬいのかみ) 野の宮 (ののみや) 灰の木 (はいのき)
発緒 (はちのお) 蜂の巣 (はちのす) 左の司 (ひだりのつかさ) 外国 (ひとのくに)
日本 (ひのもと) 書司 (ふんのつかさ) 臍の緒 (ほぞのお) 目の当たり (まのあたり)
道の辺 (みちのべ) 水の面 (みのめ) 宮畔 (みやのめ) 室の木 (むろのき) 物の奥 (もののく)
物の具 (もののぐ) 物の怪 (もののけ) 武士 (もののふ) ものの節 (もののふし)
山の端 (やまのは) 海原 (わたのはら)

1.3.2.1

以下に挙げるものは「鎌倉時代編」では原則として使用しない。
 天の原（あまのはら） 彼の世（あのよ） 思いの外（おもいのほか） 型の如く（かたのごとく）
 上の句（かみのく） 仮の世（かりのよ） 殊の外（ことのほか） 此の方（このかた）※1
 此の頃（このころ）※2 木の葉（このは） 此の方（このほう） 木の間（このま）
 木の実（このみ）※3 木の下（このもと） 此の世（このよ） 下の句（しものく）
 末の世（すえのよ） 旅の空（たびのそら） 束の間（つかのま） 手の内（てのうち）
 手の裏（てのうら） 手の筋（てのすじ） 手の者（てのもの） 時の間（ときのま）
 年の内（としのうち） 年の暮れ（としのくれ） 火の気（ひのけ） 又の日（またのひ）
 水の泡（みずのあわ） 身の上（みのうえ） 身の毛（みのけ） 身の程（みのほど）
 物の数（もののかず） 山の神（やまのかみ） 世の中（よのなか） 世の習い（よのならい）
 浅茅が原（あさじがはら） 君が代（きみがよ） 我が儘（わがまま） 我が家（わがや）
 ※1 「以来」のように表記上分割不可の場合のみにのみ使用可能。
 ※2 「近来」や「近日」のように表記上分割不可の場合にのみ使用可能。
 ※3 「菓」「菓子」「果」のように表記上分割不可の場合にのみ使用可能。

1.3.2.2

「一が～」「一つ～」「一の～」で1短単位とするものを選定するに当たっては、以下の事項をおおよその目安とする。

1.3.2.2.1

助詞が読み添えとなっているもの

【例】
 齋宮（いつきのみや） 対屋（たいのや） 夜去方（よさりつかた）

1.3.2.2.2

品詞が名詞以外となるもの

【例】
 案の定※ 気の毒※
 ※「鎌倉時代編」のコーパスには出現しないが、参考として挙げた。

1.3.2.2.3

動植物名等を表すもの

【例】
 卯の花 竹の子

1.3.2.2.4

切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるもの

【例】
 天の川 言の葉 日の本

1.3.2.2.5

分割した場合、そのため（だけ）に語を新規登録する必要の生じるもの

【例】
 わたのはら わたつうみ

1.4 1最小単位を1短単位とするもの

以下に挙げるものは、1最小単位を1短単位とする。

1.4.1 外来語・外国語の最小単位

【例】
| 瑠璃 | 色 | | 阿闍梨 | | 菩提 | 樹 |

1.4.2 最小単位が三つ以上並列した場合の、それぞれの最小単位

【例】
| 仏 || 法 || 僧 |

1.4.3 名を表す部分と類概念を表す部分とが結合してできた固有名のうち、名を表す部分・類概念を表す部分が共に1最小単位である場合の、それぞれの最小単位

【例】
| さくら || 屋 | | のぞみ || 号 | | くない || 会 |

1.4.3.1

ただし、名を表す部分が1字の漢語である場合は、その1次結合体を1短単位とする。

【例】
| 仏=教 | | 李=朝 | | 壮=族 | | 礼=記 |

1.4.4 感動詞

【例】
| あな | | いで | | よし |
|| いで || あな || うれし | の | こと | や |

1.4.5 規定 1.1 ~ 1.4.4 によって得られた短単位に、前又は後ろから結合した最小単位

【例】
| 大 || 納言 | | 右 || 衛門 || 府 | | 舎利 || 会 |

1.4.6 単独で文節を構成する最小単位

【例】
| 皆人 | | 【涙】 | | 落とし | | たまふ | | | 大蔵 | | 卿 | | くら人 | | 【仕うまつる】 | |
| 【まして】 | | 【しげく】 | | 渡ら | | せ | | たまふ | | 御 | | 方 | | は |

1.5 参考

現代語の短単位認定規程にある一般の最小単位に関する規定を、参考として以下に挙げる。

1.5.1

「一般」に分類した外来語の最小単位のうち省略されたものは、和語・漢語の最小単位と同様に扱う。

【例】
| バツ=コン | | 塩=ビ |

1.5.2

以下に挙げるものは、3最小単位以上の結合であっても全体で1短単位とする。

1.5.2.1

三つ以上の最小単位から成る組織の名称等の略称

【例】
| 統=数=研 | | 奈=文=研 | | 日=経=連 |

1.5.2.1.1

ここでいう略称とは、組織の名称を構成する短単位すべて又はその一部を略して結合させたもののことである。したがって、以下のような構成要素の一部（「国語」「党」）が略されていないものは、略称とはしない。

【例】
 国立 | 【国語】 | 研究 | 所 | → | 【国語】 | 研 |
 自由 | 民主 | 【党】 | → | 自民 | 【党】 |
 【主婦】 | 連合 | 会 | → | 【主婦】 | 連 |

2 記号

記号は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】
 表 | A | 図 | B | J R | N T T | L . A . |
 E | が | 形態 | 素 | 情報 | F | が | 分節 | 音 | の | ラベル |
 今回 | も | N T T | データベース | を | 用い | て |
 P | ・ | J | ・ | ブラウン | と | ジュワン | ・ | ハワード | だ | 。 |
 東京 | ・ | Y | ・ | N |

2.1

それがないときに 1 短単位となるものの中にある記号は無視する。

【例】
 しゅ = ・ = く = ・ = だ = ・ = い |
 四百 | + | 五 | 条 | 以下 | に | 規程 | が | あ = じ = る | 。 |
 都心 | から | 一 | 時間 | 半 | どころ | か | 、 | 三 = = 四十 | 分 | 、 |

3 数

数は、以下の規定によって単位認定する。

3.1

数は、ほかの最小単位と結合させない。

【例】
 二十 | 四 | 日 | 。 | 昨日 | の | 同じ | ところ | なり | 。 |
 わ | が | みかど | 六十 | 余 | 国 | の | なか | に |
 長 | さ | 二十 | 丈 | ， | 広 | さ | 五 | 丈 | ばかり | なる |

3.2

数の間どうしの結合については、一・十・百・千の桁ごとに 1 短単位とする。「万」「億」「兆」などの最小単位は、それだけで 1 短単位とする。小数部分は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】
 それ | の | 年 | の | 十 | 二 | 月 | の | 二十 | 日 | あまり | 一 | 日 | の |
 子 | 一 | つ | より | 丑 | 三 | つ | まで | ある | に |
 ここ | にて | 三 | 人 | は | ， | いと | よく | 見 | はべり | ぬ | べし |

3.2.1

「四、五」を結合させるのは概数の場合に限る。並列の場合は結合させない。

【例】
 四 | 五 | 両月 | を | 数へ | たり | けれ | ば | ※
 ※「およそ四月か五月あたり」という概数の意味ではなく、「四月と五月（の両方）」という並列の意味なので、「四」と「五」を結合させない。

4 固有名

固有名（人名・地名）は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】

〔人名〕	伊勢	豊雲野	神	コノハナサクヤビメ	絢=姫	紗夜 姫
〔地域名〕	但馬	摂津	北海道	東海道	山陰道	
〔地形名〕	比叡	山	音羽	山	賀茂	川

4.1 参考

現代語の短単位認定規程にある固有名に関する規定を、参考として以下に挙げる。

4.1.1

固有名は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】

〔国名〕	アメリカ	合衆	国	ロシア	共和	国	南アフリカ	共和	国
〔行政区画名〕	東京	都	立川	市	緑町	十番	二	号	
〔場所名〕	京都	市	上京	区	今出川	通	烏丸	東入る	山陽
〔略称〕	茨木	市	駅	さいたま	新	都心	駅	線	大
	東海道	中山道	ちとから	天六					

4.1.1.1

姓又は名を略した最小単位は、「一般」の最小単位に分類されるので、「一般」の最小単位に関する規定により短単位を認定する。

【例】

おざ=けん | 橋=龍

4.1.1.2

地名を略した一字漢語の「日」「米」、それに相当する片仮名の「ロ」（「ロシア」の略）などは、「一般」の最小単位に分類されるので、「一般」の最小単位に関する規定により短単位を認定する。

【例】

米国 | 来日 | 日ロ | 日|米|韓 | 京阪|地方 | 阪奈|自動|車|道

4.1.1.2.1

ただし、地名を略した一字漢語が三つ以上並列したものが、ある地域を表す場合は、全体で 1 短単位とする。

【例】

京=阪=奈|丘陵 | 京=阪=神|急行|電鉄

5 付属要素

付属要素は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】

打ち||いづる | かづき||あまる | もて|なし||きこゆ |

5.1 居体言の構成要素となっている動詞性接尾辞

付属要素に分類した動詞性接尾辞は、居体言の構成要素となっている場合も接尾的要素として扱う。

【例】

憎き|さかしら|も|言ひ|ませ|て|言よ||がり||など|も|す|める|を|

5.2 敬語の動詞性接尾辞

敬語の動詞性接尾辞が複合動詞の間に入った場合も、接尾的要素として扱う。

【例】
|何ごと|を|か|と|，|思ひ||たまへ||寄る|に|

6 助詞・助動詞

助詞・助動詞は、1 最小単位を 1 短単位とする。

【例】
|雲||の||あなた||は||春||に||や||ある||らむ||
|男||も||す||なる||日記||と||いふ||もの||を||

6.1 「-が〜」「-つ〜」「-の〜」

資料「要注意語」の「-が〜」「-つ〜」「-の〜」に挙げられた語の中の助詞「が」「つ」「の」は、助詞・助動詞として扱わない。

【例】
「-が〜」： |雁=が=音|
「-つ〜」： |わた=つ=うみ|
「-の〜」： |天=の=川| |言=の=葉| |竹=の=子|

7 補則

7.1 掛詞

原則として、掛詞の後ろの語句とのつながりで解釈する。この原則によっても意味を一つに特定できないときは、文脈全体から自然な解釈を選ぶ。

【例】
|いづく|に|か|身|を|ば|捨て|む|と|しら雲|の|かから|ぬ|山|も|泣く泣く|ぞ|行く|

※前とのつながりから「|捨て|む|と|しら(知ら)|雲|の|」と分割するのではなく、後ろとのつながりから上の例のように分割する。

7.2 動詞「-（サ）ス」

原則として、四段・ラ変・ナ変動詞の未然形+助動詞「ス」、四段・ラ変・ナ変以外の動詞の未然形+助動詞「サス」に分析可能なものは、語末「ス」「サス」を助動詞とする。

【例】
|書か||す| |食べ||さす| |織ら||せ||物| |思わ||せ||振り|

※動詞が「-（サ）ス」によって派生し、下二段に活用するもの。

7.2.1

四段・ラ変・ナ変動詞の未然形+助動詞「ス」、四段・ラ変・ナ変以外の動詞の未然形+助動詞「サス」と分析できないものは、語末の「（サ）ス」を分割しない。

【例】
|着=す|

※「着る」は上一段動詞であるため、使役の助動詞としては「サス」が接続し、「着さす」となる。したがって、語末の「ス」を助動詞として切り出すのは、助動詞「ス」の接続の上で適切ではない。

[参照] |見||さす|

7.2.2

『日本国語大辞典』第2版において、尊敬の助動詞と認定されている「ス」は分割しない。

【例】
|のたまは=す| |たまは=す|

7.2.3

『日本国語大辞典』第2版において、意味の変化を伴い一語化したとの記述のある「ス」は分割しない。

【例】

「参ら=す | ※1 | 遣は=す | ※2

※1 謙譲語として使用され、使役の意味が認められない場合は分割しない。〈参上させる〉と使役の意味が認められる場合は分割する。
※2 〈おやりになる〉という意味を表す場合は分割しない。

7.2.4

「合はす」は『日本国語大辞典』第2版において、明らかに一語の他動詞として認められているので、「ス」は分割しない。

7.3 文節との関係

1 最小単位の体言と1最小単位の用言とが接続した場合に、1短単位として結合させるか否かの判断基準を7.3.1, 7.3.2として示す。

7.3.1 体言+動詞

2 最小単位から成る動詞のうち、体言+動詞という形式のものについては、以下の規定に基づいて短単位を認定する。

7.3.1.1 原則

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、見出し語（空見出し・子見出し・連語としての見出し語は除く。）になっているものは1短単位とする。

【例】

「心=ゆく | | 里=離れる |

7.3.1.2

原則に当たらないものは、体言の後ろで分割し、2短単位とする。

【例】

「茜 || さす |

7.3.1.3

複合語の先頭又は中間に位置する体言+動詞（連用形）については、7.3.1.1及び7.3.1.2を適用せず、1短単位とする。

【例】

「波=打ち | 際 | | 波=分け | 衣 | | 世=捨て | 人 |

7.3.1.3.1

体言+動詞の品詞については、以下のように判定する。

7.3.1.3.1.1

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、動詞として立項されているものは、同語異語判別規程の細則3「動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準」に基づいて動詞か名詞かを判定する。

【例】

波打ち（際）……動詞

7.3.1.3.1.2

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれにおいても動詞として立項されていないもの、両方に立項されているが、「連語」とされているもの、又は一方の辞典にしか立項されておらず、なおかつその辞典で「連語」とされているものは、名詞とする。

【例】

波分け（衣），世捨て（人）……名詞

7.3.2 体言＋形容詞

2 最小単位から成る形容詞のうち、体言＋形容詞という形式のものについては、以下の規定に基づいて短単位を認定する。

7.3.2.1 原則

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、見出し語（空見出し・子見出し・連語としての見出し語は除く。）になっているものは1短単位とする。

7.3.2.1.1 体言＋「ナシ（無）」

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれかで見出し語になっているものを次に挙げる。1短単位とする「体言＋「ナイ（無）」」は、原則として次に挙げるものとする。

《あ》
あえない（敢え無い） あじきない（味気無い） あじけない（味気無い） あじない（味無い）
あやない（文無い） いとまない（暇無い） いろない（色無い） いわれない（謂われ無い）
うつつない（現無い） おうない（奥無い） おしめない（惜しみ無い） おぼえない（覚え無い）
おぼつかない（覚束無い） おもいない（思い無い） おもない（面無い） およびない（及び無い）

《か》
かいない（甲斐無い） かぎりない（限り無い） かくれない（隠れ無い） かたわらない（傍ら無い）
きわない（際無い） きわまりない（極まり無い） くもりない（曇り無い） こころない（心無い）
こころもとない（心許無い） ござない（御座無い） こちない（骨無い） ことない（事無い）

《さ》
さだめない（定め無い） ざんない（慙無い） しおない（潮無い） しだらない（しだら無い）
じつない（術無い） じゅつない（術無い） すげない（素気無い） すじない（筋無い）
ずつない（術無い） ずない（図無い） すべない（術無い） せんない（詮無い）
そうない（双無い） そこない（底方無い） そっけない（素っ気無い）

《た》
たあいがない（たあい無い） だいもない（大も無い） たぐいがない（類無い） たとしえない（譬えない）
たゆみない（弛み無い） だらしない（だらし無い） たわいがない（たわい無い） ちからない（力無い）
つきない（付き無い） つきもない（付きも無い） つつがない（恙無い） つねない（常無い）
ところない（所無い）

《な》
なごりない（名残無い） ならびない（並び無い） にない（二無い） にべない（鰐膠無い）
のこりない（残り無い）

《は》
はかない（儂い） びんない（便無い） へんない（篇無い） ほどない（程無い）

《ま》
まぎれない（紛れ無い） またない（又無い） みつともない（みつともない）

《や》
やくない（益無い） やごとない（止事無い） やむない やんごとない（止ん事無い）
ゆえない（故無い） ゆるしがない（許し無い） ゆるぎない（揺るぎ無い） ようない（要無い）
よしがない（由無い）

《ら》
らちない（埒無い） ろんない（論無い）

《わ》
わりない（理無い）

7.3.2.1.2 体言＋「ナシ（甚）」

以下に挙げたのは、飽くまで語例である。「1 最小単位＋ナシ（甚）」という語構成のナシ（甚）型形容詞は、以下の語と同様に1短単位とする。

【例】
あたじけない あどけない あらげない (荒気ない) いたいけない (幼気ない) いわけない
ぎごちない しどけない せつない (切ない) せわしない (忙しい) はしたない むげない

7.3.2.1.3 上記以外の体言+形容詞

【例】
ほどちかい (程近い) ところせい (所狭い) ころよわい (心弱い)

7.3.2.2 原則に当たらないもの

原則に当たらないものは、体言の後ろで分割し、2短単位とする。

【例】
| 違い || ない | | 訳 || ない |

7.3.2.3 関連事項

「要注意語」の「接頭的要素」に掲げていない接頭辞又は語素と1最小単位の形容詞との結合体は1短単位とする。

【例】
| うら=寂しい | | うら=恥ずかしい | | うら=若い | | け=だるい | | もの=悲しい |

7.4 短単位認定に当たって問題となる語

「鎌倉時代編」と現代語とで単位認定の異なるもの等、短単位認定に当たって問題となる語について、どのように短単位を認定するかを、次に示す。

7.4.1 連体詞

原則として「鎌倉時代編」では、連体詞を認めないため、現代語で1短単位となるものも、次のように分割する。

【例】
| いか | なる | | こ | の |

7.4.1.1

「さる」「同じ」の単位認定は現代語と変わらないが、付与する品詞が異なる。

| さる | ……動詞「然り(さり)」の連体形
| 同じ | ……形容詞「同じい」の語幹

7.4.2 副詞

7.4.2.1 「～に」型、「～て」型の副詞

7.4.2.1.1 副詞と認めないもの

7.4.2.1.1.1

「～」に当たる要素に自立用法があれば、「に」を分割する。

【例】
| さすが || に | | こと || に | | ふさ || に | (多に)

7.4.2.1.1.2

副詞「(おし)なべて」は認めず、形状詞「(おし)なべて」は「なべて{なり/の}」の場合に使用。

7.4.2.1.1.3

以下に挙げるものは「鎌倉時代編」では副詞とせず、「動詞の連用形+接続助詞「て」とする。

改め||て|| | 却つ||て|| (かえつて) | かね||て||
強い||て|| (しいて) | 初め||て|| | 別け||て|| (わけて)

7.4.2.1.2 副詞と認めるもの

切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるものや、文末と呼応するものは、切らずに全体で1短単位とする。また、現代語とのつながりを考慮して、「に」「て」を切らずに全体で1短単位とするものもある。

【例】

「～に」型の副詞

朝なけ=に | あ=に | (豈) | 雨もよ=に | 如何=に | げ=に | さら=に | すで=に |
つい=に | ひとへ=に | まさ=に | 雪もよ=に |
世=に | (〈非常に〉〈決して〉の意味を表す場合)

「～て」型の副詞

さ=て | かく=て | と=て | さし=て | (打ち消しと呼応する場合のみ※)
せめ=て | (希望表現と呼応する場合のみ) | 極め=て | (推量と呼応する場合のみ)
敢え=て | (否定と呼応する場合のみ) | 定め=て | (推量と呼応する場合のみ)

※それ以外は、他動詞「指す(差す)」+助詞「て」と分割する。

7.4.3 副詞「と」「かく」を含む語

【例】

と | あり | かかり | と | と | も | かくて | も | と | に | かく | と | に | も | かく | に | も |
と | も | かく | と = かく |

7.4.4 その他の副詞、接続詞

【例】

いか=で | おの=ず=から | いは=む=や | ※ | ある=い=は |

※「～{と/を} いはむや」となる場合は「いは | む | や」と分割。

7.4.5 その他、副詞と認めない語

以下に挙げるものは「鎌倉時代編」では副詞と認めない。

【例】

己 || と | (おのれと) ※1 | 然 || しも | (さしも) ※2
然 || も | (さも) ※3 | 固 || より | (もとより) ※4
遍く | (あまねく) ※5 | 同じく | (おなじく) ※5 | 正しく | (まさしく) ※5
難 || なく | (なんなく) ※6

※1 代名詞「おのれ」+格助詞「と」と分割する。

※2 副詞「さ」+副助詞「しも」と分割する。

※3 副詞「さ」+係助詞「も」と分割する。

※4 名詞「もと」+格助詞「より」と分割する。

※5 形容詞の連用形とする。

※6 名詞「難」+形容詞「無し」連用形と分割する。

7.4.6 助詞

7.4.6.1 「もが」「もがも」の類

終助詞「がな」「がも」「もが」のうち、「もが」の一まとまりとすることを優先して単位認定する。

【例】

もが || な | もが || も |

7.4.6.2 「てしがな」「にしがな」の類

【例】

て || しが || な | に || しが || な |

7.4.7 その他

【例】

あくる || 日 | | 明くる || 年 | | 子 || ども |
行く || 方 (え) | | 行く || 先 | | 行く || 手 | | 行く || 末 |
来 || たる | (動詞「来る」と助動詞「たり」に分割)
異 || なる | (名詞「異」と助動詞「なり」に分割) | 御=門 | (「門」の意味でも分割しない。)

7.5 参考 短単位認定規程の補則

現代語を対象とした短単位認定規程の補則のうち、鎌倉時代を対象としたコーパス構築作業と関連が低いと考えられるものを規程本体から削除した。

しかし、より高い精度を維持しながら作業を進めるためには、「鎌倉時代編」の短単位認定規程の基礎となっている現代語の短単位認定規程を理解しておくことが望ましい。

そこで、短単位認定規程の補則のうち規程本体から削除したものを、参考として以下に掲載する。

7.5.1 略語として扱わない外来語の最小単位

省略された外来語の最小単位のうち、以下に掲げたものは省略された外来語の最小単位として扱わない。

アイゼン (シュタイクアイゼンの略)
アクセル (アクセレーターの略)
アニメ (アニメーションの略)
アパート (アパートメント・ハウスの略)
アマ (アマチュアの略)
アンプ (アンプリファイヤーの略)
イラスト (イラストレーションの略)
インテリ (インテリゲンチヤの略)
イントロ (イントロダクションの略)
エクス (エキストラクトの略)
エゴ (エゴイスト, エゴイズムの略)
エレキ (エレキテルの略)
オートバイ (autbikeの略)
キャッチ (キャッチャーの略)
キャップ (キャプテンの略)
キロ (キロメートル, キログラム, キロワットの略)
コーポ (コーポラスの略)
コンテ (コンティニューイティの略)
コンパ (コンパニーの略)
コンビ (コンビネーションの略)
ジム (ジムナジウムの略)
スーパー (スーパーインポーズの略)
センチ (センチメートルの略)
ダイヤ (ダイヤグラムの略)
ダダ (ダダイズムの略)
デパート (デパートメント・ストアの略)
デマ (デマゴギーの略)
テレビ (テレビジョンの略)
トイレ (トイレットの略)
トランス (transformerの略)
ナンバリング (numbering machineの略)
ニス (ワニスの略)
ネル (フランネルの略)
ノート (ノートブックの略)
ノンプロ (nonprofessionalの略)
ノンポリ (nonpoliticalの略)
パーマ (パーマネントウェーブの略)
バイオ (バイオテクノロジーの略)
パブ (pubulic houseの略)
ハンカチ (ハンカチーフの略)
ピケ (ピケットの略)
ビデオ (ビデオテープ, ビデオテープレコーダー等の略)
ビル (ビルディングの略)
プレミア (プレミアムの略)
プロ (プロフェッショナルの略)
ペーパー (サンドペーパーの略)
ホーム (プラットホームの略)
ポルノ (ポルノグラフィの略)
マイク (マイクロホンの略)
マンネリ (マンネリズムの略)
ミス (ミステークの略)
ミリ (ミリグラムの略)
メカ (メカニズムの略)
モノクロ (モノクロームの略)
ラボ (ラボラトリーの略)
リストラ (リストラクチュアリングの略)
リハビリ (リハビリテーションの略)
リュック (リュックサックの略)
レジ (レジスターの略)
ロケ (ロケーションの略)
ロゴ (ロゴタイプの略)

7.5.1.1 選定の観点

7.5.1 に掲げた語を選定した際の観点は、以下のとおりである。

7.5.1.1.1 元の語形が一般に余り使われない

【例】

テレビ (テレビジョン) ジム (ジムナジウム)

7.5.1.1.2 原語に略語形がある

【例】
プロ (pro (プロフェッショナル)) キヤップ (cap (責任者))

7.5.1.1.3 原語に類義の同語形がある

【例】
バイオ (バイオテクノロジー, bio (生物学))

7.5.1.1.4 その他

【例】
アマ (アマチュア) ……「プロ」を略語としないこととの対応

7.5.2 可能動詞

7.5.2.1

可能動詞は、元になった五段活用動詞と同様に短単位を認定する。

【例】
| 読める | | 行ける | | 離せる | | 切り離せる | | 話し合える |

7.5.2.2

ら抜き言葉は語末の「れる」を切り出さない。

【例】
| 着=れる | | 来=れる | | 食べ=れる | | 見=れる | | 透かし見=れる | | こじ開け=れる |

7.5.3 固有名

固有名に関する短単位認定の例を以下に示す。

7.5.3.1 人名等

【例】
水戸	黄門		孫	悟空		李梅		ホーチミン		ジャック	・	シヤパン	=	デルマス
フェルディナン	・	ド	・	ソシユール		レオナルド	・	ダ・ビンチ						
サアド	・	アル=ガーミディー		イザナギ	ノ	ミコト		コノハナサクヤビメ						
濃姫		和子	姫											

7.5.3.2 駅名

【例】
東中野	駅		西日暮里	駅		駒沢	大学	前	駅		栗駒	高原	駅		新	高島平	駅		
新	三河島	駅		新	大久保	駅		西	八王子	駅		青山	一	丁目	駅		外苑	前	駅
半蔵	門	駅		宮団	赤塚	駅		京成	上野	駅		祖師ヶ谷	大蔵	駅		武蔵	境	駅	
武蔵	小山	駅		代々木	上原	駅		千歳	烏山	駅		表	参道	駅					

7.5.3.3 路線名

【例】
| 新 | 玉川 | 線 | | 磐越 | 西線 |

7.5.3.4 地形名

【例】
| 伊良湖 | 岬 | | プリンセスドワード | 島 | | 浄土が浜 | | 瀬戸 | 内 | | 瀬戸 | 内海 | | 耶馬 | 溪 |
| 大菩薩 | 峠 | | 奥穂高 | 岳 | | 鬼押出 | | 黄河 | | 桜島 |

7.5.3.4.1

地形名と同じ行政区画名については、それが行政区画名として用いられていることが明確な場合及び当該行政区画内に存在する施設名である場合は、分割しない。

【例】

| 大分 | 県 | 下毛 | 郡 | 耶馬溪 | 町 | | 江戸川 | 高校 | | 江戸川 | 駅 |

7.5.3.4.2

類概念が外来語であり、名を表す部分が地名を表す最小単位以外の場合は結合する。

【例】

| イースト=リバー | | ポート=アイランド | | ストーム=レイク | | 六甲 | アイランド |
| テムズ | リバー |

7.5.3.5 場所名等

【例】

北の丸	公園		岡田	山	古墳		加茂	岩倉	遺跡		吉野が里	遺跡
荒神	谷	遺跡		妻木	晩田	遺跡						
田和山	遺跡		富士見	坂		区	役所	通り		武田	山	トンネル
八方	尾根	スキー場										

7.5.3.5.1

場所名と同じ行政区画名については、それが行政区画名として用いられていることが明確な場合及び当該行政区画内に存在する施設名である場合は、分割しない。

【例】

| 東京都 | 千代田 | 区 | 北の丸公園 | | 多賀城 | 高等 | 学校 |

8 参考 短単位の例

【例】

いづれの御時に、か、ぬ、女御、更衣、あまた、さぶらひ、たまひりける中、に、いと、や
むごとく、際、に、は、あ、ら、ぬ、が、る、す、ぐ、れ、あ、ま、た、さ、ぶ、ら、ひ、た、ま、ひ、り、け、る、中、に、は、じ、め、よ、り、
我、は、思、ひ、あ、が、り、た、ま、へ、の、み、御、方、々、に、あ、て、時、め、き、た、ま、ふ、あ、り、け、り、。、そ、ね、み、た、ま、ふ、。、
つ、け、て、ほ、ど、、そ、れ、の、よ、り、心、を、の、み、の、更、衣、た、ち、は、ま、し、て、め、ざ、ま、し、て、も、の、に、お、と、し、め、。、朝、夕、の、宮、仕、に、い、
と、あ、つ、し、く、な、り、ゆ、き、、も、の、心、細、げ、に、里、が、ち、な、る、を、。、い、よ、い、よ、あ、か、ず、あ、は、れ、
なる、も、の、に、思、ほ、し、て、、人、の、の、譏、り、を、も、え、憚、ら、せ、た、ま、は、ず、。、世、の、例、に、も、
なり、ぬ、ま、ば、ゆ、き、御、人、の、御、お、ぼ、え、。、な、り、。、や、う、や、う、。、唐、土、上、人、な、ど、も、あ、い、なく、目、を、起、こ、り、に、こ、そ、
世、も、乱、れ、あ、し、かり、け、れ、と、。、貴、妃、の、例、も、ひ、き、出、で、つ、つ、べ、く、な、り、ゆ、く、に、。、い、と、
は、し、た、な、き、こ、と、多、か、れ、ど、。、か、た、じ、け、な、き、御、心、ば、へ、の、た、ぐ、ひ、な、き、を、頼、み、に、て、ま、じ、ら、ひ、
たまふ。

第2 最小単位の結合の例

1 数詞関連

【例】

※ | 八 | 番 | 目 | | 八 | 個 | 目 | | 八 | 回 | 目 | | 八 | 年 | 目 |

※ | 八 | か | 所 | | 八 | か | 国 | | 八 | か | 月 | | 八 | か | 日 |
| 八 | か | 年 | | 八 | か | 条 |

※ | 一 | 年 | 生 | | 一 | 回 | 生 | | 一 | 期 | 生 |

※ | 一 | 月 | 号 |

※ | 八 | 週間 | | 八 | 日間 | | 八 | 時間 | | 八 | 分間 | | 八 | 秒間 |

2 曜日

【例】

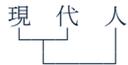
| 日曜 | 日 | | 月曜 | 日 | | 火曜 | 日 |

3 漢語の複次結合語

漢語の複次結合語について、語構造の解釈の仕方を示す。

ただし、短単位認定においては、以下に挙げた解釈とは異なる解釈をしても、結果的に認定される単位が同じという場合がある。例えば、3.3.1.1 に※印を付けて示した「債権所有者」などがその例である。「債権所有者」の語構造は「債権を所有する者」と考えることとしているが、「債権の所有者」（債券+{(所有)+者}）と考えても認定される単位は結果的に同じである。したがって、語構造の解釈について、すべて以下のとおりに解釈しなければならないというものではない。

3.1.1



【例】

| 現代 | 人 | | 伝染 | 病的 | | 昨年 | 末 | | 新築 | 中 | | 自主 | 性 |
| 家庭 | 用 | | 全国 | 的 |

3.1.2



【例】

都	議会		市	庁舍		核	軍縮		食	中毒		正	反対
総	工費		全	理事		大	規模		不	明朗		非	能率
各	選手		同	理事									

3.1.3



【例】

| 年 | 月 | 日 | | 松 | 竹 | 梅 | | 衣 | 食 | 住 |

3.1.4



【例】

| 都区内 | | 統廃合 | | 町村長 |

3.1.5



【例】

| 国内外 | | 輸出入 |

3.1.6

[構造を示すことができないと考えられるもの]

【例】

| 不可解 | | 不思議 |

3.2 4 最小单位語

3.2.1

火 災 防 止

```
graph TD; A[火 災 防 止] --- B[火 災]; A --- C[防 止]; B --- D[ ]; C --- D;
```

【例】

| 火災 | 防止 | | 公共 | 事業 |

3.2.2

幼 稚 園 児

```
graph TD; A[幼 稚 園 児] --- B[幼 稚 園]; A --- C[児]; B --- D[ ]; C --- D;
```

【例】

| 幼稚 | 園 | 児 | | 郵便 | 局 | 長 | | 警備 | 員 | 室 | | 解剖 | 学 | 者 |

3.2.3

中 学 校 長

```
graph TD; A[中 学 校 長] --- B[中 学 校]; A --- C[長]; B --- D[ ]; C --- D;
```

【例】

| 中 | 学校 | 長 | | 法 | 医学 | 者 |

3.2.4

総 調 達 額

```
graph TD; A[総 調 達 額] --- B[総 調 達]; A --- C[額]; B --- D[ ]; C --- D;
```

【例】

| 総 | 調達 | 額 | | 軽 | 飛行 | 機 | | 各 | 管制 | 塔 | | 同 | 動物 | 園 |

3.2.5

市 町 村 長

```
graph TD; A[市 町 村 長] --- B[市 町 村]; A --- C[長]; B --- D[ ]; C --- D;
```

【例】

| 市町村長 |

3.2.6

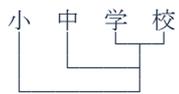
青 少 年 法

```
graph TD; A[青 少 年 法] --- B[青 少 年]; A --- C[法]; B --- D[ ]; C --- D;
```

【例】

| 青少年 | 法 | | 小中学 | 生 |

3.2.7



【例】
| 小 | 中 | 学校 |

3.2.8



【例】
| 市 | 区 | 町 | 村 | | 都 | 道 | 府 | 県 |

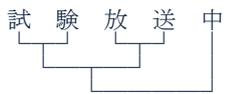
3.2.9



【例】
| 生 | 年 | 月 | 日 |

3.3 5最小単位

3.3.1



【例】
| 試験 | 放送 | 中 | | 有線 | 放送 | 網 | | 行政 | 区画 | 名 | | 独占 | 禁止 | 法 |

3.3.1.1



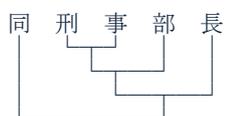
【例】
| 債権 | 所有 | 者 | | 宇宙 | 飛行 | 士 | | 沿岸 | 警備 | 隊 |
| 地震 | 観測 | 所 | | 入試 | 改善 | 策 |

3.3.2



【例】
| 都 | 清掃 | 条例 | | 準 | 保護 | 世帯 |

3.3.3



【例】
| 同 | 刑事 | 部 | 長 | | 同 | 事務 | 所 | 長 |

3.3.4



【例】
| 再 | 編成 | 論議 |

3.3.5



【例】
| 地下 | 核 | 実験 |

3.3.6



【例】
| 船員 | 中労委 |

3.3.7



【例】
| 経団連 | 会長 |

3.4 6 最小単位語

3.4.1



【例】
| 都市 | 交通 | 問題 | | 消費 | 減退 | 傾向 | | 高校 | 全入 | 運動 |

3.4.2



【例】
| 総合 | 警備 | 本部 | | 事故 | 合同 | 会議 |

3.4.3



【例】
 |野鳥|用|給水|池| |自動|車|修理|工|

3.4.4



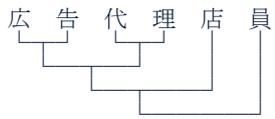
【例】
 |社会|科|副|読本|

3.4.5



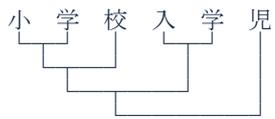
【例】
 |都市|交通|課|長| |宇宙|開発|史|上|

3.4.6



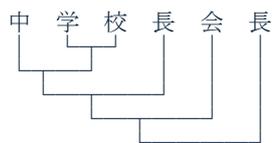
【例】
 |広告|代理|店|員|

3.4.7



【例】
 |小|学校|入学|児|

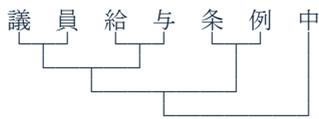
3.4.8



【例】
 |中|学校|長|会|長|

3.5 7 最小单位語

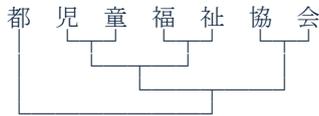
3.5.1



【例】

| 議員 | 給与 | 条例 | 中 |

3.5.2



【例】

| 都 | 児童 | 福祉 | 協会 |

3.5.3



【例】

| 新 | 長期 | 経済 | 計画 |

3.5.4



【例】

| 強風 | 波浪 | 注意 | 報 | 下 |

第3章 付加情報

第1 付加情報の概要

短単位認定規程によって認定された各単位に、次に挙げる付加情報を付与する。

1 語彙素読み

語彙素読みは、同一語の活用変化・音の転化・ゆれ・省略・融合等によって生じた異形態や送り仮名の違い等の異表記をグループ化するための情報である。原則として、コーパスに出現したすべての短単位に付与する。

2 語彙素

語彙素は、語彙素読みに対する国語の表記である。原則として、コーパスに出現した全ての短単位に付与する。

3 品詞等の情報

各単位に対して、品詞等の情報（以下、品詞情報）として、次に挙げる情報を付与する。

- (1) 品詞
- (2) 活用型
- (3) 活用形

4 語種情報

語種とは、語をその出自によって分類したもののことである。原則として、コーパスに出現した全ての短単位に付与する。

第2 品詞情報の概要

1 品詞

UniDicの品詞のうち、「鎌倉時代編」に関わる主なものを、以下に挙げる。

1.1 名詞

1.1.1 名詞-普通名詞-一般

1.1.2 から 1.1.6 以外の普通名詞

【例】
食い物 仏法 菩薩

1.1.2 名詞-普通名詞-サ変可能

形式的な意味の「す」「きこゆ」などが直接続き、動詞として用いられることのあるもの。可能性を示すものであって、実際にサ変動詞の語幹として使われているか否かは問わない。

【例】
旅 涙

1.1.3 名詞-普通名詞-形状詞可能

助動詞「なり」が付いて述語になったり、連体修飾成分になったりするもの。可能性を示すものであって、実際に助動詞「なり」が付いているか否かは問わない。

【例】
不思議 哀れ

1.1.4 名詞-普通名詞-サ変形状詞可能

形式的な意味の「す」「きこゆ」などが直接続き、動詞として用いられることのあるもので、助動詞「なり」が付いて連体修飾成分にもなるもの。可能性を示すものであって、サ変動詞の語幹として使われているか否か、形状詞として使われているか否かは問わない。

【例】
幸い

1.1.5 名詞-普通名詞-副詞可能

単独で連用修飾成分になるもの、及び句又は節による連体修飾を受けて、それ全体で連用修飾成分となるもの。可能性を示すものであって、実際に単独で、又は句や節による連体修飾を受けて連用修飾成分として使われているか否かは問わない。

【例】
今日 辺り辺り

1.1.6 名詞-普通名詞-助数詞可能

数詞に付き、助数詞として用いられることのあるもの（主として『日本国語大辞典』第2版、『大辞林』第2版において、名詞のほか助数詞としての用法に関する記述のあるもの）。可能性を示すものであって、実際に助数詞として使われているか否かは問わない。

【例】
重ね 帖

1.1.7 名詞-固有名詞-一般

1.1.8 から 1.1.12 以外の固有名詞。組織の名称や元号など。

【例】
寛平 仁和 冷泉 藤壺

1.1.8 名詞-固有名詞-人名-一般

日本・中国・韓国以外の人名及び 1.1.9 , 1.1.10 に分類できない人名。あだ名やしこ名なども含む。

【例】
佐多 虚空蔵

1.1.9 名詞-固有名詞-人名-姓

日本・中国・韓国の人名のうち姓に当たるもの。

【例】
柿本 源 紀 凡河内

1.1.10 名詞-固有名詞-人名-名

日本・中国・韓国の人名のうち名に当たるもの。

【例】
人麿 赤人 貫之 躬恒

1.1.11 名詞-固有名詞-地名-一般

国名以外の地名（行政区画名・地域地方名・地形名）。

【例】
出雲 安積 葛城 難波津 春日野

1.1.12 名詞-固有名詞-地名-国

地名のうち国名。

【例】
日本 唐 新羅

1.1.13 名詞-数詞

【例】
一 二十 幾（人） 何百 数千

1.2.1 代名詞

【例】
まろ こち こなた

1.3 形状詞

1.3.1 形状詞-一般

1.3.2 以外の、いわゆる形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
いたづら まめ 清ら

1.3.2 形状詞-タリ

いわゆるタリ活用の形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
荒涼

1.4 連体詞

現在、「鎌倉時代編」で連体詞として認めているのは、以下の語である。

あが※1 あらゆる ある 所謂（いわゆる）※2 去りぬる※3 この※4 どの なんじょう わが※5

- ※1 「我」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※2 「所謂」「所謂」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※3 「去」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※4 「此」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※5 「我」のように表記上分割不可の場合のみ

1.5 副詞

擬音語・擬態語を含む。名詞としての用法を持つものは、「名詞-普通名詞-副詞可能」とする。

【例】
いと やをら すがすが

1.6 接続詞

現代語において接続詞としているものの大部分は、「鎌倉時代編」では、元の語構成に基づいて分割される。そのため、接続詞と認定されるものはわずかである。

【例】
さりとして 現代語 : | さりとて | (接続詞)
「鎌倉時代編」 : | さり || とて | (動詞+助詞)
されど 現代語 : | されど | (接続詞)
「鎌倉時代編」 : | され || ど | (動詞+助詞)

1.6.1

「鎌倉時代編」で接続詞と認定しているものは、次に挙げるもののみである。

或いは 及び（および） かるが故に※1 扱（さて） さわれ 然し（しかし）※2
而して（しかして・しこうして） 然しながら※3 然のみならず（しかのみならず）※4
然も（しかも）※5 然れども（しかれども）※6 即ち（すなわち）※7 そえに
夫れ（それ） 但し（ただし） 乃至（ないし） 並びに※8 又（また）
若しくは（もしくは）

- ※1 「故に」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※2 「併」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※3 「併」「併ら」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※4 「加之」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※5 〈加えて〉という添加の用法の場合のみ。〈そんなにもまあ〉と解釈できる場合は副詞
- ※6 「然而」のように表記上分割不可の場合のみ
- ※7 〈つまり〉という言い換えの用法、かつ、文頭の場合のみ接続詞
- ※8 「并」のように表記上分割不可の場合のみ

1.7 感動詞

感動詞-一般

【例】
あな いざ いで

1.8 動詞

1.8.1 動詞-一般

1.8.2 以外の動詞

【例】
聞く 笑ふ

1.8.2 動詞-非自立可能

名詞に直接続くことのある「す」の類や補助動詞として動詞連用形や動詞連用形に接続助詞「て」を添えた形に接続することのあるもの。資料「要注意語」の「接尾的要素」に上げた語のうち、品詞を動詞とするものはここに分類する。可能性を示すものであって、実際に補助動詞として使われているか否かは問わない。

【例】
す 来 聞こゆ

1.9 形容詞

1.9.1 形容詞一般

1.9.2 以外の形容詞

【例】
美し をかし

1.9.2 形容詞-非自立可能

形容詞・形容詞活用型助動詞の連用形や形容詞・形容詞活用型助動詞の連用形に接続助詞「て」を添えた形に接続し、補助的に用いられることのあるもの。可能性を示すものであって、実際に補助的に使われているか否かは問わない。

【例】
なし

1.10 助動詞

【例】
なり べし

1.11 助詞

1.11.1 助詞-格助詞

【例】
が から つ に の

1.11.2 助詞-副助詞

【例】
きり すら のみ

1.11.3 助詞-係助詞

【例】
こそ ぞ なむ

1.11.4 助詞-接続助詞

【例】
つつ と なり ば

1.11.5 助詞-終助詞

【例】
いねよわ

1.11.6 助詞-準体助詞

【例】
の

1.12 接頭辞

【例】
うち(かたぶく) ほの(聞く) もて(かしづく)

1.13 接尾辞

1.13.1 接尾辞-名詞的-一般

【例】
(むこ)がね (殿)ばら (ミ語法の)み

1.13.2 接尾辞-名詞的-サ変可能

名詞に接続してサ変動詞の語幹となり得る語を作るもの。

【例】
(三)分

1.13.3 接尾辞-名詞的-副詞可能

名詞に接続して作られた語が、単独で連用修飾成分になり得るもの。

【例】
(見)がてら (並列の)み

1.13.4 接尾辞-名詞的-助数詞

助数詞としての用法しか持たないもの。

【例】
つ 個 本 か

1.13.5 接尾辞-形状詞的

名詞・動詞の連用形に接続して形状詞を作るもの。

【例】
(時雨)がち (うつくし)げ

1.13.6 接尾辞-動詞的

名詞・動詞の連用形・形容詞の語幹に接続して動詞を作るもの。

【例】
(聖)だつ (萎え)ばむ

1.13.7 接尾辞-形容詞的

名詞・形状詞・動詞の連用形・形容詞の語幹に接続して形容詞を作るもの。

【例】
(わざと) がまし (逢ひ) がたし

1.14 記号

1.14.1 記号-一般

1.14.2 以外の記号。簡条書きの項目名に使われた1文字の片仮名，地名以外の固有名を略した1文字の片仮名を含む。新聞記事の署名等で姓又は名を略した1文字の漢字を含む。

【例】
ブ (大統領) マ (社)

1.14.2 記号-文字

アルファベットやギリシャ文字。

【例】
A α Σ

1.15 補助記号

1.15.1 補助記号-一般

【例】
・ △ ※ — ’

1.15.2 補助記号-句点

【例】
。 ・ !

1.15.3 補助記号-読点

【例】
、 ’

1.15.4 補助記号-括弧開

【例】
(《 「

1.15.5 補助記号-括弧閉

【例】
) » 」

1.16 空白

行頭の字下げなどの空白

1.17 品詞一覧

品詞	類
名詞-普通名詞-一般	体
名詞-普通名詞-サ変可能	体
名詞-普通名詞-形状詞可能	体
名詞-普通名詞-サ変形状詞可能	体
名詞-普通名詞-副詞可能	体
名詞-普通名詞-助数詞可能	体
名詞-固有名詞-一般	固有名
名詞-固有名詞-人名-一般	人名
名詞-固有名詞-人名-姓	姓
名詞-固有名詞-人名-名	名
名詞-固有名詞-地名-一般	地名
名詞-固有名詞-地名-国	国
名詞-数詞	数
代名詞	体
形状詞-一般	相
形状詞-タリ	相
連体詞	相
副詞	相
接続詞	他
感動詞-一般	他
動詞-一般	用
動詞-非自立可能	用
形容詞-一般	相
形容詞-非自立可能	相
助動詞	助動
助詞-格助詞	格助
助詞-副助詞	副助
助詞-係助詞	係助
助詞-接続助詞	接助
助詞-終助詞	終助
助詞-準体助詞	準助
接頭辞	接頭
接尾辞-名詞的-一般	接尾体
接尾辞-名詞的-サ変可能	接尾体
接尾辞-名詞的-副詞可能	接尾体
接尾辞-名詞的-助数詞	接尾体
接尾辞-形状詞的	接尾相
接尾辞-動詞的	接尾用
接尾辞-形容詞的	接尾相
記号-一般	記号
記号-文字	記号
補助記号-一般	補助
補助記号-句点	補助
補助記号-読点	補助
補助記号-括弧開	補助
補助記号-括弧閉	補助
空白	補助

2 活用型

UniDicの活用型のうち、「鎌倉時代編」に関わる主なものを、以下に挙げる。

2.1 動詞

2.1.1 文語四段活用

2.1.1.1 文語四段-カ行

【例】
行く 置く

2.1.1.2 文語四段-ガ行

【例】
仰ぐ 凌ぐ

2.1.1.3 文語四段-サ行

【例】
明かす 致す

2.1.1.4 文語四段-タ行

【例】
うがつ 放つ

2.1.1.5 文語四段-ハ行 (-一般)

2.1.1.6 , 2.1.1.7 以外の文語ハ行四段活用動詞

【例】
争ふ 追ふ

2.1.1.6 文語四段-ハ行 (-ノウ)

語幹末尾がア段音の文語ハ行四段活用動詞。連用形がウ音便になる場合、語幹末尾がオ段音に変わる。語幹が仮名書きされている場合、この変化が表記に現れる。

【例】
会ふ 買ふ

2.1.1.7 文語四段-ハ行 (-イウ)

動詞「言ふ」。終止形・連体形が「ユウ」と発音されることがある。

2.1.1.8 文語四段-バ行

【例】
遊ぶ 選ぶ

2.1.1.9 文語四段-マ行

【例】
歩む 読む

2.1.1.10 文語四段-ラ行

【例】
煽る 散る

2.1.2 文語上一段活用

2.1.2.1 文語上一段-カ行

【例】
着る

2.1.2.2 文語上一段-ナ行

【例】
煮る 似る

2.1.2.3 文語上一段-ハ行

【例】
干る 簞る

2.1.2.4 文語上一段-マ行

【例】
見る 鑑みる 試みる

2.1.2.5 文語上一段-ヤ行

【例】
射る 鋳る

2.1.2.6 文語上一段-ワ行

【例】
居る 率る 用ゐる

2.1.3 文語上二段活用

2.1.3.1 文語上二段-カ行

【例】
起く 生く

2.1.3.2 文語上二段-ガ行

【例】
過ぐ

2.1.3.3 文語上二段-タ行

【例】
落つ 満つ

2.1.3.4 文語上二段-ダ行

【例】
閉づ 恥づ

2.1.3.5 文語上二段-ハ行

【例】
恋ふ 生ふ

2.1.3.6 文語上二段-バ行

【例】
浴ぶ 侘ぶ

2.1.3.7 文語上二段-マ行

【例】
試む

2.1.3.8 文語上二段-ヤ行

【例】
老ゆ 悔ゆ 報ゆ

2.1.3.9 文語上二段-ラ行

【例】
降る 懲る

2.1.4 文語下一段活用

【例】
蹴る

2.1.5 文語下二段活用

2.1.5.1 文語下二段-ア行

【例】
得 心得

2.1.5.2 文語下二段-カ行

【例】
避く 溶く

2.1.5.3 文語下二段-ガ行

【例】
上ぐ 告ぐ

2.1.5.4 文語下二段-サ行

【例】
乗す 見す

2.1.5.5 文語下二段-タ行

【例】
当つ 捨つ

2.1.5.6 文語下二段-ダ行

【例】
出づ 撫づ

2.1.5.7 文語下二段-ナ行

【例】
ぬ (寝)

2.1.5.8 文語下二段-ハ行 (一般)

2.1.5.9 以外の文語ハ行下二段活用動詞

【例】
和ふ 終ふ

2.1.5.9 文語下二段-ハ行 (-経)

【例】
ふ (経)

2.1.5.10 文語下二段-バ行

【例】
比ぶ 並ぶ

2.1.5.11 文語下二段-マ行

【例】
留む 止む

2.1.5.12 文語下二段-ヤ行

【例】
消ゆ 燃ゆ

2.1.5.13 文語下二段-ラ行

【例】
暮る 忘る

2.1.5.14 文語下二段-ワ行

【例】
植う 飢う

2.1.6 変格活用（文語）

2.1.6.1 文語カ行変格

【例】
来

2.1.6.2 文語サ行変格-ス

【例】
す 接す

2.1.6.3 文語サ行変格-ズ

【例】
信ず 甘んず

2.1.6.4 文語ナ行変格

【例】
死ぬ

2.1.6.5 文語ラ行変格

【例】
あり 居り

2.2 形容詞

2.2.1 文語活用

2.2.1.1 文語形容詞-ク（一般）

2.2.1.2 2.2.1.3 以外のク活用の形容詞。

【例】
白し 遠し

2.2.1.2 文語形容詞-ク（-〇シ）

語幹末尾がア段音の形容詞は、連用形がウ音便になる場合に語幹末尾がオ段音になる。語幹が仮名書きされている場合、この変化が表記に現れる。

【例】
高し 小さし

2.2.1.3 文語形容詞-ク (-多シ)

形容詞「多し」。終止形に「多し」のほか、「多かり」がある。

2.2.1.4 文語形容詞-シ (-シク)

2.2.1.5 以外のシク活用の形容詞。

【例】
美し 樂し

2.2.1.5 文語形容詞-シ (-ジク)

シク活用の形容詞のうち活用語尾の語頭が「じ」のもの。

【例】
いみじ

2.3 助動詞

2.3.1 個別の活用型

次に挙げる助動詞の活用は、動詞・形容詞の活用と比べて個別的であるため、例に示したように助動詞ごとに活用型を立てる。

き けむ けらし けり こす ごとし じ ず たり (完了) たり (断定) つ なり (断定)
なり (伝聞) ぬ べし べらなり まし まじ む むず めり らし らむ り

【例】
ず ……活用型：文語助動詞-ズ
なり (断定) ……活用型：文語助動詞-ナリ-断定
べし ……活用型：文語助動詞-ベシ

2.3.2 その他

2.3.1 以外の助動詞には、動詞・形容詞と同じ活用型を付与する。

【例】
さす ……活用型：文語下二段-サ行
まほし ……活用型：文語形容詞-シク

2.4 接尾辞

「接尾辞-動詞的」は動詞の活用型を、「接尾辞-形容詞的」は形容詞の活用型を付与する。

【例】
難し ……活用型：文語形容詞-ク-一般
ばむ ……活用型：文語四段-マ行

2.5 活用型一覧

文語四段-〇行
 文語四段-ハ行 (-一般)
 文語四段-ハ行 (-〇ウ)
 文語四段-ハ行 (-イウ)
 文語上一段-〇行
 文語上二段-〇行
 文語下一段-〇行
 文語下二段-〇行
 文語下二段-ハ行 (-一般)
 文語下二段-ハ行 (-経)
 文語カ行変格
 文語サ行変格-ス
 文語サ行変格-ズ
 文語ナ行変格
 文語ラ行変格
 文語形容詞-ク (-一般)
 文語形容詞-ク (-〇シ)
 文語形容詞-ク (-多シ)
 文語形容詞-シク (-シク)
 文語形容詞-シク (-ジク)
 文語助動詞-キ
 文語助動詞-ケム
 文語助動詞-ケリ
 文語助動詞-コス
 文語助動詞-ゴトシ
 文語助動詞-ジ
 文語助動詞-ズ
 文語助動詞-タリ (-完了)
 文語助動詞-タリ (-断定)
 文語助動詞-ツ
 文語助動詞-ナリ (-伝聞)
 文語助動詞-ナリ (-断定)
 文語助動詞-ヌ
 文語助動詞-ベシ
 文語助動詞-マシ
 文語助動詞-マジ
 文語助動詞-ム
 文語助動詞-ムズ
 文語助動詞-メリ
 文語助動詞-ラシ
 文語助動詞-ラム
 文語助動詞-リ

※活用型の名称のうち括弧でくくられた部分は、入力活用型の細分類である。UniDicで語形を新規登録する際には、ほぼ自動で入力される。UniDicによる形態素解析結果には、入力活用型の細分類は出力されない。

3 活用形

UniDicの活用形のうち「鎌倉時代編」に関わる主なものを、以下に挙げる。

3.1 語幹

3.1.1 語幹-一般

活用語の語幹。

3.2 未然形

3.2.1 未然形-一般

下記以外の未然形。

3.2.2 未然形-補助

文語形容詞の補助活用、文語形容詞型活用の助動詞の補助活用、文語助動詞「ず」の未然形「ざら」。

3.3 連用形

3.3.1 連用形一般

下記以外の連用形。

3.3.2 連用形-○音便

助動詞「たり」や接続助詞「て」が接続する場合の一般的な音便形。

3.3.3 連用形-ト

文語助動詞「たり」の連用形「と」。

3.3.4 連用形-ニ

文語助動詞「なり」の連用形「に」。

3.3.5 連用形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の連用形「ざり」。

3.4 終止形

3.4.1 終止形一般

下記以外の終止形。

3.4.2 終止形-補助

文語形容詞「多し」の終止形「多かり」。

3.5 連体形

3.5.1 連体形一般

下記以外の連体形。

3.5.2 連体形-○音便

3.5.3 連体形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の連体形「ざる」。

3.6 已然形

3.6.1 已然形一般

下記以外の已然形。

3.6.2 已然形-補助

文語形容詞「多し」の已然形「多かれ」，文語助動詞「ず」の已然形「ざれ」。

3.7 命令形

【例】

許せ 起こせ こ（文語動詞「来」） せよ 無かれ

3.8 ク語法

【例】
言はく 良けく（文語形容詞「良し」） けらく（文語助動詞「けり」）

3.9 活用形一覧

語幹-一般
未然形-一般
未然形-補助
連用形-一般
連用形-○音便
連用形-ト
連用形-ニ
連用形-補助
終止形-一般
終止形-○音便
終止形-補助
連体形-一般
連体形-○音便
連体形-補助
已然形-一般
已然形-補助
命令形
ク語法

第3 語種情報の概要

1 語種とは

日本語の語種は一般に、和語、漢語、外来語と、これら3種類の語種のうち異なる2種類以上の語種の語が結合した混種語の4種類に分けられる。この4種類のほかに固有名、記号の2種類を加えた6種類に分類した。なお、各語に語種を付与するに当たっては、[]内の略称等を用いた。

1.1 和語〔和〕

日本固有の語。

【例】
暖かい、言葉、話す

1.2 漢語〔漢〕

近世以前に中国から入った語。

【例】
音楽、国語、報告

1.2.1

和製漢語も漢語とする。

【例】
大根、返事

1.3 外来語〔外〕

欧米系の諸言語から入った語。

【例】
ゲーム、コーパス、データ

1.3.1

上記のほか、以下のものも外来語とする。

1.3.1.1 和製英語

【例】

アフレコ ナイター

1.3.1.2 梵語等を中国で音訳した語に由来する語

【例】

阿羅漢 盂蘭盆 卒塔婆

1.3.1.3 アイヌ語から入った語

【例】

昆布 鮭 ラッコ

1.3.1.4 中国以外のアジア諸国語から入った語

【例】

キムチ カボチャ パッチ

1.3.1.5 近代以降に中国から入った語

【例】

クーニャン シュウマイ メンツ

1.4 混種語〔混〕

和語・漢語・外来語のうち異なる2種類以上の語種の語が二つ以上結合した語。漢語・外来語であったものの末尾が活用するようになった語。

【例】

塩ビ トラブル 本箱 力む

1.5 固有名〔固〕

人名・地名・商品名等。品詞が固有名詞となる語。

【例】

大阪 和田 豊 ソニー

1.6 記号〔記号〕

句読点・括弧などの補助記号や、箇条書きの項目名として使われた一字のカタカナなどの記号。固有名以外のローマ字略語。

【例】

， 。 「 」 ア A OHP

2 語種の判定

2.1

語種の判定は、次の手順によった。

2.1.1

原則として『新潮現代国語辞典』第2版（新潮社）による。

※『新潮現代国語辞典』第2版を使ったのは、見出し語が漢語・外来語の場合は片仮名で、和語及び不明の場合は平仮名で表記しており、その表記を手掛かりにして語種を知ることができるためである。

2.1.2

『新潮現代国語辞典』第2版の見出しにない語は、『日本国語大辞典』第2版（小学館）を主たる資料として語種判定を行う。

また、『新潮現代国語辞典』第2版の語種判定に従い難いと判断した場合は、『日本国語大辞典』第2版等を参照し、独自に語種を判定した。

2.2

なお、『新潮現代国語辞典』第2版では、見出し語が和語の場合のほか、語種が不明の場合も見出し語を平仮名で表記している。見出し語が平仮名表記のものを一律に和語とすると、語種が不明であるため平仮名表記されていた語まで和語と判定してしまうことになる。

そのため、見出し語が平仮名で表記されている場合、『新潮現代国語辞典』第2版の注記や他の辞書等を参照して、和語とすべきか他の語種とすべきか適宜判断した。

第4章 UniDicへの登録、コーパス修正で注意すべき事項

第1 UniDic登録時の注意点

1 語彙素となる語形

新規に登録する動詞・形容詞の「語彙素」は、現代語形とする。現代では使用されないような語も、以下の規則に従って現代語形化し、それを語彙素とする。

1.1 動詞

文語二段活用の動詞は口語一段活用にした終止形
文語サ変・カ変の動詞は口語サ変・カ変にした終止形
文語ラ変・ナ変・下一段活用の動詞は口語五段活用にした終止形

1.2 形容詞

文語ク活用の形容詞は、形容詞語尾「ーし」を「ーい」に変更
文語シク活用の形容詞は終止形に「ーい」を加える

【例】
うたてし → 語彙素「ウタテイ」 語形「ウタテシ」
とどむ → 語彙素「トドメル」 語形「トドム」

2 仮名形

仮名形の表記は、書字形で平仮名の部分はそのまま歴史的仮名遣いとするが、書字形の漢字部分については現代仮名遣いのままとしておく。

【例】
書字形「変はる」 → 仮名形「カハル」
書字形「変る」 → 仮名形「カワル」

※仮名形については、小木曾・中村（2011）を参照。

3 品詞情報

3.1 既登録語の品詞情報の書き換え

語を新規に登録するのではなく、既登録の語の情報を書き換えることで、「鎌倉時代編」に対応したものがある。

3.1.1 品詞情報の変更を認めたもの

品詞情報に関して変更を認めるのは、「動詞-一般」を「動詞-非自立可能」に変更する場合のみとする。

【例】

「聞こえる」の文語形「聞こゆ」
「鎌倉時代編」では敬語補助動詞としての用法があるため、品詞情報を「動詞-一般」から「動詞-非自立可能」に変更した。

3.1.2 品詞情報の変更を認めない例

「鎌倉時代編」での使用実態から判断して、既登録語の品詞情報の変更が必要な場合でも、3.1.1 以外の書き換えは認めない。この場合、以下のいずれかの方法により登録を行う。

3.1.2.1 別語彙素又は別語形として新規登録

【例】

よそに積もる【夜な夜な】を恨み、

※UniDicに既登録の「夜な夜な」は副詞であるが、「鎌倉時代編」では上のように名詞と認定せざるを得ない場合がある。

既登録の「夜な夜な」の品詞を「名詞-普通名詞-副詞可能」に書き換えるのではなく、「名詞-普通名詞-一般」の「夜な夜な」を別語彙素として新規登録する。

3.1.2.2 既登録語をそのまま使用

【例】

いみじく【したり顔】にても来たるかな

※「したり顔」の品詞を「名詞-普通名詞-一般」から「名詞-普通名詞-形状詞可能」に書き換えることも、新規に形状詞の「したり顔」を登録することもしない。この例も「名詞-普通名詞-一般」としておく。

※「鎌倉時代編」において、形状詞用法が存在する名詞に関しては、
(a) 既登録の名詞については、「形状詞可能」でなくても、そのまま使う。
(b) 新規登録する場合は、「名詞-普通名詞-形状詞可能」とする。

3.1.2.3

別語彙素として新規登録するか、既登録の語をそのまま使用するかは、以下に示す原則に従う。

3.1.2.3.1

名詞として登録されている語のうち、「鎌倉時代編」において形状詞用法、副詞用法などがあるものは、品詞小分類の「形状詞可能」「副詞可能」などの情報の書き換えは行わず、既登録の語をそのまま使用する。

3.1.2.3.2

名詞以外（副詞、形状詞など）として登録されている語のうち、「鎌倉時代編」において名詞用法があるものは、別語彙素として名詞を新規登録する。

3.2 「名詞-普通名詞-サ変可能」について

「鎌倉時代編」では対格助詞が現れないことが多いため、名詞がサ変動詞化しているか否かの判断がつかない。よって、新規登録する名詞について「サ変可能」という品詞を与えない方向で統一した。ただし、既登録の「名詞-普通名詞-サ変可能」「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」については、品詞の変更等を行わず、そのまま用いることとした。

【例】

石の象を【安置】せる堂有り。

3.3 語頭変化型

「鎌倉時代編」特有の連濁に対応するため、語頭変化型の情報を追加することがある。

【例】

「対面」

現代語 : 連濁が想定されないため、語頭変化型の情報なし。
「鎌倉時代編」 : 「名対面 (なだいめん)」等、語頭の濁音化が認められるため、語頭変化型の「タ濁」の情報を付与する。

※語頭変化型については、小木曾・中村 (2011) を参照。

3.4 読み添えの「の」の処理

読み添えの「の」を含む形で語形を登録するのは、姓・地名のみとする。

【例】

《人名》語彙素 : フジワラ — 語形 : フジワラノ
《地名》語彙素 : イヨ — 語形 : イヨノ

3.4.1

姓・地名以外の読み添えの「の」は語形登録せず、「の」を読まない形とする。

【例】

中関白 (なかのかんぱく) → 中 : ナカ / 関白 : カンパク
光親卿 (みつちかのきょう) → 光親 : ミツチカ / 卿 : キョウ

第2 コーパス修正時の注意点

1 品詞認定

1.1 助詞に関するもの

1.1.1 「ぞ」「や」「か」

助詞「ぞ」「や」「か」に関しては、「終助詞」と「係助詞」両方が登録されているが、「鎌倉時代編」では一貫して係助詞を使い、終助詞は使わない。(UniDicでの終助詞「ぞ」「や」「か」は、あくまで現代語の終助詞である。「鎌倉時代編」修正時に、参照する本文等の注釈で「(古い)終助詞」と書かれているものとは質が異なる。注釈で「終助詞」とされていても、全て係助詞と認定する。) 下のような詠嘆表現の場合、「終助詞」と注釈されることがあるが、そのような場合も含め処理上は全て係助詞に統一する。

【例】

雨とやなりたまひけむ、雲とやなりたまひけむ、いとおぼつかなき御旅なりし【か】。

1.1.2 格助詞と接続助詞の判別

文脈・格関係などを基に判断していくが、実際いずれかに決めかねる場合は多い。現状、迷う場合は『新編日本古典文学全集』(小学館)の訳文などを参考に個別に判断している。現時点では、次のように判別を行っている。

名詞に後続 → 格助詞

格関係として解釈できないもの → 接続助詞

※「平安時代編」では接続助詞の「が」は認めていないが、『日本国語大辞典』第2版で接続助詞の「が」について「院政期から多く現われる」としており、「鎌倉時代編」では逆接の接続助詞の「が」を認めることとする。

※接続助詞の「を」は、「ものを」の「を」に限って認める。1.1.4 参照。

※連体形に助詞「に」が後続する場合、意味上明らかに逆接と取れるものは接続助詞とし、そうでなければ格助詞とする。

1.1.3 「間投助詞」の扱い

UniDicの助詞の分類には「間投助詞」はない。「係助詞」「副助詞」や「終助詞」(の文中用法)として処理する。

【例】

「や」 : 係助詞
「し」 : 副助詞
「を」 : 終助詞

1.1.3.1

終助詞「を」は、「鎌倉時代編」の間投助詞「を」に対応するために設けたものであるが、詠嘆を表す実際の終助詞もある。

【例】
いま心のどかにを。御格子参りなむ。
もろともに帰りを。

1.1.3.1.1

このような終助詞「を」と格助詞・接続助詞との判別については、現時点では、格助詞・接続助詞としての解釈を優先し、終助詞としか解釈できないものに限り終助詞「を」を使うこととする。

【例】
同じ死に【を】。後に人も聞けかし。（格助詞）

※接続助詞「を」は「ものを」の場合のみ（1.1.4）。

1.1.4 「ものを」「なくに」の「を」「に」

次の例のような「鎌倉時代編」の「ものを」「なくに」については、「もの（普通名詞）／を」「なく（助動詞「ず」連用形）／に」と分割する。「を」「に」は接続助詞とする。

【例】
愁へども頻りなる【ものを】、など遅くは参りつるぞ
あか【なくに】まだきも月のかくるるか

1.1.4.1

『日本国語大辞典』第2版や古典の注釈などをみると、「ものを」の「を」は間投助詞、「なくに」の「に」は終助詞という解釈が一般的のようだが、UniDicには終助詞「に」は登録されておらず、前述のとおり間投助詞用に設けた終助詞「を」も極力使わない方針を取るため、このような措置を取っている。
ただ、文末表現となるものも多く（「ものを」の大部分は文末）、逆接などの接続的な意味合いが感じられない詠嘆表現も見られるため、現状の処理には若干問題があるとも言える。

【例】
おのれが蹴てんには、いかにも生かじ【ものを】。
白妙の波路を遠く行きかひて我に似べきは誰なら【なくに】

1.1.5 助詞分類一覧

「なくに」の「に」を終助詞とする解釈のように、現代語の助詞と同一語形のものが、終助詞・間投助詞・副助詞など別の助詞と認定される場合がある。しかし、そのようなものに対し、UniDicに逐一別語彙素として助詞を登録し、同一形態で別助詞という種類がやみくもに増えるのも望ましくない。そこで現状では、できる限り現在登録されている助詞の種類で対応することにする。以下、「鎌倉時代編」で現代語とは異なる種類に認定されそうな主な助詞に関して、UniDicでの認定との対応をまとめておく。

1.1.5.1 Unidicでの選択肢

1.1.5.1.1 「に」

- ・格助詞
- ・接続助詞（「終助詞」とされるもの含む。）

1.1.5.1.2 「を」

- ・格助詞
- ・接続助詞（「ものを」の「を」の場合のみ）
- ・終助詞（「間投助詞」含む。格助詞又は接続助詞とも解せるものに関しては、そちらの解釈を優先。）

1.1.5.1.3 「は」

- ・係助詞（「終助詞」とされるもの含む。）

1.1.5.1.4 「も」

- ・係助詞（「終助詞」とされるもの含む。）
- ・接続助詞

1.1.5.1.5 「ぞ」

- ・係助詞
- （・終助詞：使用せず）
- （・副助詞：使用せず）

1.1.5.1.6 「や」

- ・係助詞（「間投助詞」「並立助詞」とされるもの含む。）
- （・終助詞：使用せず）
- （・副助詞：使用せず）

1.1.5.1.7 「か」

- ・係助詞（「終助詞」とされるもの含む。）
- （・終助詞：使用せず）
- （・副助詞：使用せず）

1.1.5.1.8 「こそ」

- ・係助詞（「終助詞」とされるもの、呼び掛け含む。）

1.1.5.1.9 「なむ」

- ・係助詞
- ・終助詞

1.1.5.1.10 「し」

- ・副助詞（「間投助詞」とされるもの含む。）
- （・接続助詞：使用せず。現代語「行きたくないし、」の「し」）

1.2 副詞と断定の助動詞「なり」の接続

副詞と断定の助動詞「なり」の接続は、原則として認めない。UniDicに副詞として登録されているものに助動詞「なり」が下接している場合は、形状詞と認定する。

【例】

あながちなり
現代語 : 副詞「あながち」のみ。
「鎌倉時代編」 : 形状詞「あながち」を認定。

1.2.1

以下のように、どうしても形状詞とは認定し難い語については、例外的に副詞のままとし、断定の助動詞「なり」との接続を認めることにする。

さ(然) しか(然) かく(斯) つゆ わざと

1.3 「～に」型副詞

「～に」型副詞は、「～」に当たる要素に自立用法があれば、「に」を分割する。分割した「に」の品詞は、「鎌倉時代編」では助動詞「なり」（断定）の連用形とする。

※「～に」型副詞の品詞認定は、1.2 と併せて、結果的に現代語と大きく異なる場合がある。

【例】

「さすがに」
現代語 : 副詞「さすが」／格助詞「に」
「鎌倉時代編」 : 形状詞「さすが」／助動詞「なり」（断定）連用形

1.4 出現形「にて」の判別基準

出現形「にて」の品詞認定は、「断定の助動詞「なり」連用形＋接続助詞「て」」または格助詞「にて」とし、「格助詞「に」＋接続助詞「て」」という認定はしない。以下の基準に従って「なり＋て」か「にて」かを判別する。

1.4.1 意味から判別する基準

1.4.1.1

「～であって」の意：助動詞「なり」＋接続助詞「て」

【例】

高季が子の、いまだ童【にて】、年十四なるを召して、

1.4.1.2

「～として」「～にして」の意：助動詞「なり」＋接続助詞「て」

【例】

但し天皇の御墓所【にて】は左右は下れり。

1.4.1.3

「～において」「～を使って」「～のために」の意（場所・時、手段・方法、原因・理由）：格助詞「にて」

【例】

男ほか【にて】聞つるだに、頭の毛太りて怖しきに、
然れば返らむにも御車【にて】送り給へ。
随分にせん者の功德、これ【にて】いよいよ推し量られたり。

1.4.2 先行語・後続語から判別する目安

1.4.2.1

先行語が形状詞：助動詞「なり」＋接続助詞「て」

【例】

渋々【にて】具して行きぬ。
いと軽びやか【にて】大刀ばかりを帯びてぞ有りける。

1.4.2.2

「あり」「はべり」「候ふ」「おはします」などの存在詞が後続する：助動詞「なり」＋接続助詞「て」

【例】

越中の守【にて】有ける時

1.4.2.3

「～を～にて」：助動詞「なり」＋接続助詞「て」

【例】

其の雲をしるし【にて】尋ね行く。

1.4.2.4

上記以外：格助詞「にて」

1.4.3

この目安は、あくまで作業上の利便を考え設けたものであり、例外もある。意味から判別する基準での認定と、先行語・後続語から判別する目安での認定が齟齬をきたす場合は、意味から判別する基準での認定を優先する。

【例】
しばしは六角櫛笥の屋【にて】ありしが（しばらくは六角櫛笥の家に行った）※
※存在詞「あり」が後続するが、「～において」（場所）という意味からの判別を優先し、格助詞「にて」とする。

1.5 出現形「に」の判別基準

以下には、断定の助動詞「なり」連用形と認定する基準を示す。これに該当しないものは、1.1.2 に従い、格助詞または接続助詞と認定する。

1.5.1

「に」の先行語が形状詞

【例】
速やか【に】道照を呼び入れて

1.5.2

「あり」「はべり」「候ふ」「おはす」などの存在詞が後続し、意味上「～で（～であって）」と解せるもの

【例】
これは宇治殿の御子【に】おはしけり。（宇治殿の御子でいらっしやった）
汝を見るに、只者【に】あらず。（ただものではない）
もし女【に】侍りとも、（もし女であるにしても、）

1.5.2.1

ただし、存在詞が後続していても、「～で」とは解せず、場所存在そのものを表す場合は格助詞とする。

【例】
いつく【に】おはする人にか

1.5.3

係助詞「や」「か」が後続（「あらむ」が補えそうなもの）

【例】
「何なる事の有る【に】か」と怪しび思ひて

1.5.3.1

ただし、このタイプでも、場所存在そのものを表す場合は格助詞とする。

【例】
児は、其も国府【に】か

1.5.4

やう（様）に、ごとくに

【例】
童子即ち掻き消つ様【に】失せぬ。
速やかに申す如く【に】仏の像に造るべし。

1.5.5

～にもがな

【例】
物忘れする心【に】もがな

1.5.6 出現形「に」の判別に関する補則

1.5 から「に」の先行語が形状詞（「普通名詞-形状詞可能」含む。）の場合、「に」を断定の「なり」と認定するが、「鎌倉時代編」ではここでの「形状詞」という認定をUniDicに登録されている情報よりやや拡大する必要がある。第1 3.1.2 より、UniDicに「名詞-普通名詞-一般」として登録されている名詞で、「鎌倉時代編」では形状詞としての用法を持つものについては、品詞情報の書き換えを行わない。そのため、「鎌倉時代編」では形状詞としての用法を持ちながらもUniDic上は「名詞-普通名詞-形状詞可能」ではなく「名詞-普通名詞-一般」となっているものがあるので、それらについての処理を定めておく。

1.5.6.1

UniDic上は「名詞-普通名詞 - 一般」「名詞-普通名詞-副詞可能」とされている名詞のうち、『日本国語大辞典』第2版には形容動詞としての用法が挙げられているものに関しては、下接する「に」の品詞を断定の助動詞「なり」とする。

【例】
「まだらに」 UniDic：まだら（名詞-普通名詞-一般）
※『日本国語大辞典』第2版に形容動詞としての記述があるので、「に」は助動詞「なり」とする。

「まことに」 UniDic：まこと（名詞-普通名詞-一般）
※『日本国語大辞典』第2版に形容動詞としての記述がないので、「に」は格助詞とする。

1.5.6.1.1

UniDicの品詞情報に基づく判定は、以下のとおり。

1.5.6.1.1.1

「形状詞」＋「に」：断定「なり」

【例】
すずろに ねむごろに まめに

1.5.6.1.1.2

「名詞-普通名詞-形状詞可能」＋「に」：断定「なり」

【例】
むげに あはれに

1.5.6.1.1.3

「名詞-普通名詞-副詞可能」＋「に」：『日本国語大辞典』第2版を参考に判断

1.5.6.1.1.3.1

形容動詞用法の記述あり→断定「なり」

【例】
まのあたりに

1.5.6.1.1.3.2

形容動詞用法の記述なし→格助詞

【例】
ありのままに

1.5.6.2 注意の必要なもの

UniDicでの品詞情報と「鎌倉時代編」での使用実態、『日本国語大辞典』第2版での記述とにずれがあるため、作業上注意が必要なものを以下に示す。以下に示すものの「に」の前項は、UniDicでは形状詞（または普通名詞-形状詞可能）ではないが、これらの「に」については上記補則に従い、断定の助動詞「なり」連用形とする。

あだ（徒）に　いかさま（如何様）に※1　おろか（疎）に　～顔に（「馴れ顔に」など）　つね（常）に
とみ（頓）に　なのめ（斜）に　によほう（如法）に　人笑われに※2
ほかほか（外々）に　みさお（操）に　もろとも（諸共）に　ゆうそく（有職）に

- ※1 「～様に」の「に」の品詞は、『日国』での「～様」の品詞によって決定する。
「～様」が『日国』で「形動」、または、「名詞」で「形動」用法の記載がある場合
→原則、断定の助動詞「なり」
「～様」が『日国』で「形動」用法の記載なし
→格助詞「に」
※2 「人笑われ」は長単位で普通名詞。

1.6 形式的な意味の「す」「きこゆ」の続く語

「す」「きこゆ」が続く語について、動詞連用形とするか動詞転成名詞とするかに迷う場合の判別基準を次に示す。

1.6.1 名詞とするもの

1.6.1.1

以下に挙げるもの。

遊び（管弦の意）　いさり（漁り）　いらへ（応／答）　行ひ（仏道修行の意）　返し（返歌の意）
声作り　近劣り　近勝り　交じらひ　見劣り

1.6.1.2

接頭辞「御」に続くもの。

1.6.1.3

連体修飾を受けているもの。

1.6.1.4

名詞の品詞が「名詞-普通名詞-サ変可能」となっているもの。

1.6.1.5

出現書字形に送り仮名が無いもの（四段動詞のみ）。

【例】
釣

1.6.1.6

動詞以外の1短単位に続くもの。

【例】
京のぼり　月参り

1.6.1.7

「動詞以外+動詞-連用形」で構成され、『日本国語大辞典』第2版に名詞として立項されているもの。

【例】
家居 田舎渡らい 歌合せ 面変わり 口覆い 心遣い 言誤り そら乱れ 名乗り 口繕い
酒飲み 殿造り 長籠り 物語り

※「言出で」は除く

1.6.1.8

「動詞-連用形+動詞-連用形」で構成されるが、複合動詞とみなし得ない（活用しない）もの。

【例】
出で消え 出で映え 寝覚め 浮き寝 言い伸立て

1.6.1.8.1

ただし、複合動詞とみなせるものは動詞と動詞に分割する。

【例】
下り乗り 書き劣り 書き勝り 酔い泣き 忍び歩き 取り配り いらもみ まいりまかで
生い直り 裁ち縫ひ のべしじめ

1.6.2 動詞の連用形とするもの

1.6.1 に当てはまらないもの。

1.6.2.1 「～もせず」「～はせず」の類の前項

「～もせず」「～はせず」など、係助詞または副助詞+サ変動詞「す」の前項について、動詞連用形とするか動詞転成名詞とするかに迷う場合の判別基準を次に示す。

1.6.2.1.1

原則として動詞連用形とする。

【例】
このたびばかりぞ【申し】もすべき
こけのたもとは【かはき】だにせず

1.6.2.1.1.1

ただし、連体修飾を受けている場合は名詞とする。

【例】
我が男は世も無下の【死に】はせじものを
覚むるよもなき【嘆き】のみする

1.6.2.1.2

以下のものは名詞とする。

遊び（管弦の意） いさり（漁り） いらへ（応／答） 行ひ（仏道修行の意） 返し（返歌の意） 声作り
近劣り 近勝り 交じらひ 見劣り

【例】
侘歌など書きてやれども、返しもせず、

1.7 ほか、品詞判別に注意を要する語

上述の事項以外に、「鎌倉時代編」での品詞判別に注意を要する語を挙げる。

1.7.1 「来たる」

「鎌倉時代編」では原則的に動詞「来」+助動詞「たり」との解釈を優先し、動詞「来たる」の使用は控える。
※出現書字形が「来る」であるなどの理由で、明らかに動詞「来たる」であると確定できる場合は、動詞「来たる」を使用してよい。

1.7.2 「異なる」

「鎌倉時代編」では、名詞「異」+助動詞「なり」（断定）とし、動詞「異なる」は使用しない（『日本国語大辞典』第2版によれば、動詞「異なる」の用例は明治以降、それ以前は形容動詞「異なり」としているため）。

1.7.3 「また」

1.7.3.1

接続詞：並列、「そのうえ」、「さらに」の意

【例】
然れば命も惜しく、【また】妻も去りがたく思ゆれば、
京にては常に物欲き時も有らむ、【また】要事なる事も有らむ。

1.7.3.2

副詞：反復、類似、その他（「またの機会」）、「山また山」の類、疑問（「これはまたどうした」）、評価強調（「これがまた格別」）

【例】
【また】四五日ばかり有りて、【また】同じ様に打ちけるに、
其の宮も【また】鷹を極めて好み給ひければ、
【また】の夜、夜前のごとく行きて火をともしてそこを通りけるに、

1.7.4 「とて」

1.7.4.1

副詞：「とてもかくても」などの「とて」

1.7.4.2

格助詞：引用の場合

【例】
我、其の事を云ひ聞かせむ【とて】ここに立ちたりつるなり。

1.7.4.3

接続助詞：使用せず（現代語用）

1.7.5 「さて」

1.7.5.1

副詞：「そのまま」「そうして」「それでは」「それなのに」の意

【例】
取りて棄つる人も無ければ、未だ【さて】有るを、

1.7.5.2

接続詞：文頭に出現、話題転換、続く事態の言い起こし

【例】
またそのあたりには小子どもも多く出で来て、里も賑ひけり。【さて】この内供は鼻長かりけり。

1.7.6 「ながら」

1.7.6.1

接続助詞：「鎌倉時代編」では接続助詞に統一。

【例】
よそ【ながら】，ときどき通ひ住まんこそ，年月へても絶えぬなからひともならめ。

1.7.6.2

接尾辞：使用せず（現代語用）

1.7.7 「ただ」

1.7.7.1

形状詞：「一なり（に）」「一の」が後続

【例】
かく【ただ】ならぬ気色なるは
【ただ】の人どもも多くして来るなりけり。

1.7.7.2

副詞：上記「形状詞」の場合以外

【例】
主は上なる所に皮など敷きて，【ただ】独り臥したりけるに，

1.7.7.3

名詞：使用せず（現代語用，「無料」の意など）

1.7.8 「やう（様）」

1.7.8.1 接尾辞

1.7.8.1.1

動詞連用形について方法を表す

【例】
家の作り【やう】は，夏を旨とすべし

1.7.8.1.2

名詞について例示

【例】
狐・鼻【やう】の物も，人気にせかれねば，所得顔に入り棲み，

1.7.8.2 普通名詞

上記「接尾辞」の場合以外

【例】
霊搔き消つ【様】に失せにけり。

1.7.9 「されたる呉竹」等の「され」

語彙素「戯（ご）れる」の語形「サル」とする。

1.7.10 「かう（斯う）」

1.7.10.1

副詞「斯く」ウ音便：「鎌倉時代編」ではこれに統一する。

【例】
【かう】惜しみ申すものなり。

1.7.10.2

副詞「こう」：使用せず

1.7.11 「よく」「いたく」「まったく」

形容詞連用形と副詞の場合があるので、以下の例に示すように適宜使い分ける。

【例】
「よく」
見目なども【よく】、世の思えなども有りければ、（形容詞）
京に上りて宮仕へして笛をぞ【よく】吹きける。（副詞）……〈非常に・十分に〉
※〈うまく〉を表し、どちらとも解釈できる場合は形容詞とする。

「いたく」
腹【いたく】成りたり（形容詞）
暫くこそ人にて有りけれ、【いたく】責めければ、遂に狐に成りて有りけるを、（副詞）

「まったく」「またく」
ただ身を【全く】して人間に返し遣るべし（形容詞）
其の所行【全く】例の人に似ず。（副詞）……否定との呼応

1.7.12 「上手」

1.7.12.1

名詞：「鎌倉時代編」ではすべて名詞に統一する。

【例】
この童はいみじき【上手】にこそ有りけれ。

1.7.12.2

形状詞：使用せず

1.7.13 「など」

1.7.13.1

副助詞：「～等」の意

【例】
従者どもは下なる所に馬【など】繋ぎて居ぬ。

1.7.13.2

副詞：「なぜ」の意

【例】

【など】久しくは参り給はざりつるぞ。

1.7.14 「あまり」

1.7.14.1

副詞：連用修飾要素となるもの

1.7.14.2

名詞：「あまりの（名詞）」 「～のあまり」

1.7.14.3

形状詞：「なり」が後接するもの

1.7.15 「ほうほう」

1.7.15.1

副詞：動詞終止形二つが重なり（「這う這う」に該当），連用修飾要素となるもの

1.7.15.2

名詞：「ほうほうの体」

1.7.16 「つゆ」

1.7.16.1

副詞：〈ちょっと〉 〈わずかに〉 の意を表すもの。否定表現を伴い強い否定の意を表すもの

1.7.16.2

名詞：「～の」，汁的なもの

1.7.17 「起き伏し」

1.7.17.1

副詞：〈ずっと（起きていても寝ていても）〉 の意で連用修飾要素となるもの

1.7.17.2

名詞：〈起きることと寝ること〉 の意

1.7.18 「夜な夜な」

1.7.18.1

名詞：連体修飾を受けるもの。格助詞が後接するもの

1.7.18.2

副詞：連用修飾要素となるもの

1.7.19 「見事」

1.7.19.1

形状詞：「なり」が後接するもの

1.7.19.2

名詞：〈見ること〉〈見物〉の意

1.7.20 「いさ」

1.7.20.1

副詞：否定と呼応しているもの

【例】
【いさ】，我は知らず。

1.7.20.2

感動詞：上記「副詞」の場合以外

【例】
女いみじく恥づかしくて、「【いさ】」といらふ。

1.7.21 名詞とするもの

以下に挙げるものは、原則名詞とする。

明け暮れ 数多(あまた) 勢い 幾ら 色々 幸い 第一 盛り(もり)

1.7.22 副詞とするもの

以下に挙げるものは、原則副詞とする。

いとど※1 自然(しぜん・じねん)※2 早(はや)※3

※1 虫の名前は名詞。
※2 「自然{と／に}」の形で連用修飾するもの。
※3 「矢継早」のように「早」を末尾に持つ名詞を作る場合は名詞。

2 活用型・活用形認定

2.1 活用型が上二段か四段か判じ難い場合

「恨む」「忍ぶ」の連用形「恨み」「忍び」など、上二段か四段か判じ難い場合は上二段とする。

【例】
妻男を見て、【恨み】(上二段)たる気色も無く、

2.2 文末の活用形認定(終止形・連体形の判別)

2.2.1 係り結び

「ぞ」「なむ」「や」「か」の結びは連体形とする。

【例】
必ずそこへ【ぞ】行く【らむ】（連体形）。
然々の事【なむ】【候ふ】（連体形）。

2.2.2 疑問詞疑問文の文末

疑問詞疑問文の文末で、終止形か連体形か判じ難い場合は連体形とする。

【例】
「この花の庭に散りたる様は、【いかが】見【給ふ】（連体形）」
【など】かくは【いふ】（連体形）。

2.2.3 係助詞文末用法・終助詞に上接する語の活用形

原則として、以下に示すとおりとする。

2.2.3.1

「ぞ」「か」「かな」の上：連体形

【例】
これ、若し、死人を埋めるが生きて【云ふ】（連体形）か
「この童何の故に【泣く】（連体形）ぞ」

2.2.3.2

「や」「かし」の上：終止形

【例】
「輔親はこの鳴く音をば【聞く】（終止形）や」
昔思しめし出でて、哀れに思しめし【けむ】（終止形）かし。

2.2.4 引用的な「の」

引用的な「の」の上は終止形とする。

【例】
仕ら【む】（終止形）の志有りて参りたるなり。

2.3 形容詞シク活用の語幹／終止形の判別

文語形容詞シク活用は、形態上終止形と語幹の区別がつかない。語幹と認定するのは以下の場合とする。

2.3.1 接尾辞を下接させるもの

【例】
此の馬を万の人の【欲し】（語幹）がりて、

2.3.2 接続助詞「ながら」を下接させるもの

【例】
妻【怖ろし】（語幹）ながら、喜しく思ひて、

2.3.3 連体用法の「同じ」

現代語では以下の例のような「同じ」は連体詞となるが、「鎌倉時代編」では原則として連体詞を認めないため、形容詞語幹と認定する。

【例】
それをまた【同じ】（形容詞語幹）湯に指し入れてさらめき、

2.3.4 詠嘆「あな（形容詞）」

【例】
あな【いみじ】（語幹）。物に狂ふか。

2.3.5 詠嘆「（形容詞）や」

【例】
「こは何の音ぞとよ。【怖ろし】（語幹）や」

2.3.6 詠嘆「（形容詞）の（名詞句）や」

【例】
傍に【あやし】（語幹）の弓，胡録，大刀など置いて，

3 読みの認定

「鎌倉時代編」では、漢字などの読みを一つに特定できない場合も少なくない。作業時は小学館『新編日本古典文学全集』などを参考にしているが、最終的には基本的な読みを設定し、参照本文と多少ずれても、コーパス内での読みをある程度統一することを目指した。

3.1 読み統一の基本方針

現状での基本方針を、以下に示す。この方針はあくまでも目安であり、語によっては、現在一般的な読み方を優先して方針に従わなかったものもある。

3.1.1 「御」の読み

「御」の読みについては、「オ」「オン」「オオン」「ミ」「ゴ」がありうるため、作業上の混乱・不統一が生じやすい。「鎌倉時代編」では最も基本的な読みを「オオン」とし、例外的に「ミ」「ゴ」「オ」と読むべき語を別途定めることにした。

3.1.1.1 原則

「鎌倉時代編」での「御」の読みは「オオン」を基本とし、「オン」は用いない。

3.1.1.2 「ミ」と読むもの

現時点で「ミ」の読みを与えるのは以下の語の前の「御」とする。

明・灯（あかし）※1 明かし文（あかしぶみ） 有り様（ありさま） 生・阿礼（あれ）※1
桂（うちき） 占（うら） 影（えい） 影供（えいぐ） 弟（おとうと・おとと）
垣（かき） 神楽（かぐら） 門（かど）※1 狩（かり） 狩野（かりの）※2
川水（かわみず） 酒（き）※1 几帳（きちょう） 櫛・髪（くし・ぐし）※1
櫛笥（くしげ） 国（くに） 蔵（くら） 蔵町（くらまち） 車（くるま）～
気色（けしき） 子（こ）※1 輿（こし）※1 格子（こうし） 言（こと）※1
心地（こち） 心（こころ）～ 国忌（こつき） 注連（しめ） 注連縄（しめなわ）
簾（す）※1 隨身（ずいじん） 誦経（ずきょう） 厨子（ずし） 修法（ずほう）
庄（そう） 荘（そう） 曹司（ぞうし） 障子（そうじ） 台（だい）※1
台所（だいどころ） 嶽（たけ）※1 館（たち） 霊（たま）※1 手洗（たらし）※1
帳（ちょう）※1 手水（ちょうず） 津（つ） 綱（つな） 局（つぼね）
弟子（でし） 寺（てら） 堂（どう）※1 導師（どうし） 読経（どきょう） 名（な）
庭所（にわどころ）※3 法（のり） 墓（はか） 佩刀（はかし） 階（はし）
八講（はっこう） 屏風（びょうぶ） 封（ふ） 札（ふだ） 船（ふね） 牧（まき）
馬草（まぐさ） 馬屋（まや・むまや） 女（むすめ） 女（め） 水（もい）※1
社（やしる） 息所（やすんどころ）※1 山（やま） 湯（ゆ）～ 幸（ゆき）※1
代（よ）※1

※1 「御～」で1最小単位。ただし「鎌倉時代編」では他の最小単位と結合させない。

※2 「御（み） | 狩（かり） | 野（の）」と短単位を分割。

※3 「御（み） | 庭（にわ） | 所（どころ）」と短単位を分割。

3.1.1.3 「ゴ」と読むもの

現時点で「ゴ」の読みを与えるのは以下の語の前の「御」とする。

椅子(いし) 願 願書 願果たし 器(き)※1 襖(けい) 後(ご)※1
定・錠(じょう) 齋会 産(さん) 所※1 書 前(ぜん)※1 託宣 達※1
殿(てん)※1 悩(のう)※1 拝 盤(ばん) 服所(ふくどころ)※2 房・坊(ぼう)
本性(ほんじょう) 覧※1 領 料※1 霊(りょう)※1 領所

※1 「御～」で1最小単位。ただし「鎌倉時代編」では他の最小単位と結合させない。
※2 「御(ご) | 服(ふく) | 所(どころ)」と短単位を分割。

3.1.1.4 「オ」と読むもの

現時点で「オ」の読みを与えるのは以下の語の前の「御」とする。

鏡※1 仏名(ぶつみょう) 前(まえ) 座(まし)※1 座所(ましどころ)※2
許(もと)※1 物(もの)※1

※1 「御～」で1最小単位。ただし「鎌倉時代編」では他の最小単位と結合させない。
※2 「御座(おまし) | 所(どころ)」と分割

3.1.1.5 「オン」と読むもの

現時点で「オン」の読みを与えるのは以下の語の前の「御」とする。

身(み)※

※「御～」で1最小単位。ただし「鎌倉時代編」では他の最小単位と結合させない。

3.1.1.5.1 「御衣」の読み

「鎌倉時代編」に出現する「御衣」については「オンヅ」を基本とするが、読みの統一は図らず、個別に判断して「ミケシ」「ミソ」「ミヅ」「ギョイ」の読みを与えた箇所も存在する。

※「オンヅ」「ミケシ」「ミソ」「ミヅ」の場合、全体で1最小単位。ただし「鎌倉時代編」では他の最小単位と結合させない。

3.1.1.6 場合によるもの

3.1.1.6.1 「ミ」と読むもの

以下の語の前の「御」は、ある条件付きで「ミ」の読みを与える。条件を満たさない場合には、原則通り「オオン」と読む。

遊び：「大御～」の場合
技：書字形が「み」の場合
大壺：「大御～」の場合
影(かげ)：書字形が「み」の場合
傘：和歌で字数的に「み」となる場合、もしくは書字形が「み」の場合
神：「くにつ御神」の場合
厠：「御厠人」の場合
崎：岬の意味の場合
岳：「御岳精進」の場合
室：和歌で字数的に「み」となる場合

3.1.1.6.2 「ゴ」と読むもの

以下の語の前の「御」は、ある条件付きで「ゴ」の読みを与える。条件を満たさない場合には、原則通り「オオン」と読む。

座：敷物の意味の場合「ゴ」

3.1.2 撥音の有無

撥音が入り得るものは、撥音を入れて読む。

3.1.2.1 現代語では撥音あり、当該時代の参照資料では撥音無表記

「案内」に対するルビが「あない」など、「鎌倉時代編」での参照資料の表記が撥音なしの場合は多々あるが、撥音の無表記と解せる限り、撥音を入れた読みを基本とする。

【例】
案内（アンナイ） 顕証（ケンソウ） 対面（タイメン） 弾碁（ダンギ） 南殿（ナンデン）
念仏（ネンブツ） 変化（ヘンゲ） 本意（ホンイ）※ 御息所（ミヤスンドコロ）
※連声例外。

3.1.2.2 現代語では撥音なし、当該時代では撥音あり

現代語では撥音なしだが、「鎌倉時代編」での読みでは撥音を入れた読みが一般的であるものに対しても、撥音を入れて読む。

【例】
東（ヒンガシ）

3.1.2.3 例外

「懸想（ケソウ）」：『日本国語大辞典』第2版の「懸想（ケソウ）」の項には「ケンソウの撥音無表記」とあるが、「ケソウ」は立項されていない。「懸想」については撥音は入れず「ケソウ」と読む。

副詞「なぞ」：「ナンゾ」とは読まず、「ナゾ」と読む。

3.1.3 促音の有無

「日記」に対するルビが「にき」など、「鎌倉時代編」での参照資料の表記が促音なしの場合は多々あるが、促音の無表記と解せる限り、促音を入れた読みを基本とする。

【例】
毬杖（ギッチョウ） 日記（ニッキ） 別当（ベツトウ）

3.1.3.1

促音なしの形が古形であると確認できるものについては、促音を入れずに読む。

【例】
三日（ミカ） 四日（ヨカ）

3.1.4 直音化

「阿闍梨（アジャリ→アザリ）」のように、直音化し得るものは直音化した読みを基本とする。

【例】
阿闍梨（アザリ） 楽所（ガクソ） 冠者（カンザ） 気色（キソク） 化粧（ケソウ） 験者（ゲンザ）
顕証（ケンソウ） 警策（コウザク） 尺（サク） 笏（サク） 錫杖（サクジョウ） 尺八（サクハチ）
麝香（ザコウ） 娑婆（サバ） 水晶（スイソウ） 修行（スギョウ） 誦經（ズキョウ） 宿院（スクイン）
宿世（スクセ） 従者（ズサ） 数珠（ズズ） 修法（ズホウ） 修理（スリ） 誦す（ズ（ン）ズ）
順（ズン） 笙（ソウ） 箏（ソウ） 判官（ゾウ） 精進（ソウジン） 請ず（ソウズ） 装束（ソウゾク）
菖蒲（ソウブ） 職（ソク）※1 初夜（ソヤ） 尊者（ソンザ） 大呪（ダイズ） 追従（ツイソウ）
仁王（ニンノウ）※2 念誦（ネンズ） 判者（ハンザ） 病者（ボウザ） 本所（ホンゾ）
領（ず）（ロウ（ズ））※3

※1 ルビに「しき」とあれば「シキ」と読む。

※2 ルビに「におう」とあれば「ニオウ」と読む。

※3 受領は「ズリョウ」と読む。

3.1.5 長音の有無

「主（シュ→シュウ）」のように長音が入り得るものについては、長音を添えた形の読みを基本とする。

【例】
烏帽子（エボウシ） 家司（ケイシ） 主（シュウ） 灯籠（トウロウ） 女官（ニョウカン） 雛（ヒイナ）
餅（モチイ）

3.1.5.1

長音なしの形が古形であると確認できるものについては、長音を入れずに読む。

【例】
刀自（トジ） 牡丹（ボタン）

3.1.6 清濁

仮名表記の出現形に対し、現代語で濁音化するところに濁点がついていないという場合の処理に関しては、『日本国語大辞典』第2版で古くは清音であったとの記述が確認できる限り、別語形として清音形を登録し、清音で読む。

【例】
かがやく → かかやく
かしがまし → かしかまし
かろうじて → かりうして
たそがれ → たそかれ
ひさご（瓠） → ひさこ
へんざい（辺際） → へんさい
むずかる → むつかる

3.1.7 連声

「三位」（サンイ→サンミ）のように、連声化し得るものは連声化した読みを基本とする。

【例】
観音（カンノン） 三位（サンミ） 親王（シンノウ） 孫王（ソンノウ） 天皇（テンノウ）
天王（テンノウ）
※「陰陽師（オンヨウジ・オンミョウジ）」については、ルビに従う。

3.1.8 語頭の濁音化

連濁でなく、語頭が濁音化し得るものは、濁音化した読みを基本とする。

【例】
見参（ゲンザン） 服（ブク）

3.1.9 語末の「ク」と「コ」, 「ツ」と「チ」の交替

「消息（ショウソク・ショウソコ）」「別（ベツ・ベチ）」のように、語末の「ク」と「コ」, 「ツ」と「チ」の交替形がある場合は、「コ」「チ」の読みを基本とする。

【例】
実（ジチ） 消息（ショウソコ） 切（セチ） 節分（セチブン） 大徳（ダイトコ） 別（ベチ）
捧物（ホウモチ）※1 蜜（ミチ） 律（リチ）※2
※1 ルビに「ほうもつ」とあれば「ホウモツ」と読む。
※2 〈旋律〉を表す場合のみ。

3.1.10 語頭の「ウ」と「ム」の交替

「馬（ウマ・ムマ）」のように、語頭の「ウ」と「ム」の交替形がある場合は、「ム」の読みを基本とする。

【例】
馬・午（ムマ） 駅（ムマヤ） 馬頭（ムマノカミ） 梅（ムメ）
※「青馬」「巳午」「梅壺」といった複合語の場合も「ム」を基本読みとし、「アオムマ」「ミムマ」「ムメツボ」となる。

3.1.11 数

3.1.11.1 一桁の数, 二桁以上で端数のない数

一桁の数, 及び十, 百, 千の桁などでそれ以下の桁に端数のないものの読みは, 以下のとおりとする。

3.1.11.1.1 日数

日数に関しては、「～カ」と読む。

【例】

二日 (フツカ) 三日 (ミカ) 四日 (ヨカ) 五日 (イツカ) 六日 (ムユカ/ムイカ)
七日 (ナヌカ/ナノカ) 八日 (ヨウカ) 九日 (ココヌカ/ココノカ) 十日 (トオカ)
二十日 (ハツカ) 三十日 (ミソカ) 四十日 (ヨソカ) 五十日 (イカ) 百日 (モモカ)
一日：日数「ヒトヒ」、暦の日「ツイタチ」

3.1.11.1.2 年数

年数に関しては、「～トセ」と読む。

【例】

一年 (ヒトトセ) 二年 (フタトセ) 三年 (ミトセ) 四年 (ヨトセ) 五年 (イツトセ)
六年 (ムトセ) 七年 (ナナトセ) 八年 (ヤトセ) 九年 (ココノトセ) 十年 (トトセ)
二十年 (ハタトセ) 三十年 (ミソトセ) 四十年 (ヨソトセ) 五十年 (イソトセ)
百年 (モモトセ) 三千年 (ミチトセ) 八千年 (ヤチトセ)

3.1.11.2 十一以上かつ端数のある数

十一以上かつ端数のある数は、原則として教・助数詞ともに音読みする。「(二) 十四日」は「(ニ) ジュウヨッカ」を基本の読みとするが、『今昔物語集』ではルビに合わせて「(ニ) ジュウシニチ」の読みとする。

【例】

七月十五日の月にいでて、せちに物思へる気色なり。
→「ジュウゴニチ」と読む。「トオカアマリイツカ」などの読みは、書字形に充てられないため、しない。

～年：十一年 (ジュウイチネン) 十余年 (ジュウヨネン)
～日：十二日 (ジュウニニチ) 十余日 (ジュウヨニチ)
～人：十三人 (ジュウサンニン) 十余人 (ジュウヨニン)

3.1.11.3 その他、個別に決めたもの

3.1.11.3.1 暦の月

暦の月に関しては、「一月」「二月」などの出現形であっても、「ムツキ」「キサラギ」・・・という読みを基本とする。

【例】

正月/一月 (ムツキ) 二月 (キサラギ) 三月 (ヤヨイ) 四月 (ウヅキ) 五月 (サツキ)
六月 (ミナヅキ) 七月 (フミヅキ) 八月 (ハヅキ) 九月 (ナガツキ) 十月 (カンナヅキ)
十一月 (シモツキ) 十二月 (シワス)

※ルビに従い、七月 (フツキ)・十月 (カミナヅキ) など別の読みを与えることもある。

3.1.11.3.1.1

ただし、日数を指す場合は以下のように読む。

【例】

一月 (ヒトツキ) 二月 (フタツキ) 三月 (ミツキ) 四月 (ヨツキ) 五月 (イツツキ)
六月 (ムツキ) 七月 (ナヌツキ) 八月 (ヤツキ) 九月 (ココノツキ) 十月 (トツキ)

3.1.11.3.2 人数

人数に関しては、十以下を「～タリ」と読み（「一人」は「ヒトリ」）、十一以上を「～ニン」と読む。

【例】

十以下 : 一人 (ヒトリ) 二人 (フタリ) 三人 (ミタリ) 四人 (ヨタリ) 五人 (イツタリ)
六人 (ムタリ) 七人 (ナヌタリ) 八人 (ヤタリ) 九人 (ココノタリ) 十人 (トタリ)
十一以上 : 十一人 (ジュウイチニン) 十二人 (ジュウニニン) 二十人 (ニジュウニン)
三十人 (サンジュウニン) 四十人 (シジュウニン) 五十人 (ゴジュウニン)
百人 (ヒャクニン) 十余人 (ジュウヨニン)

3.1.11.3.3 元号に続く年月

元号に続く年月日に関しては、数・助数詞ともに音読みする。ただし、「(二) 十四日」は「(ニ) ジュウヨンニチ」と読む。

【例】

天喜三年十月十三日の夜の夢に、
→「|テンギ|サン|ネン|ジュウ|ガツ|ジュウ|サン|ニチ|」

貞観三年辛巳二月二十九日癸酉
→「|ジョウガン|サン|ネン|シンシ|ニ|ガツ|ニジュウ|ク|ニチ|キユウ|」
※年号・日付に続く干支も数を表す要素と見なす。

3.1.11.3.4 複数の数の併記

概数を表したり、複数の月をまたいだことなどを表すため、同一桁の複数の数が併記されている場合、数・助数詞ともに音読みする。

【例】

かくあつかふほどに、四五月も過ぎぬ。
→「シゴガツ」と読む。「ウツキサツキ」などの読みは、書字形に充てられないためしない。
※日数を指す場合は「シゴツキ」と読む。

～年：一二年（イチニネン）	二三年（ニサンネン）	三四年（サンシネン）	四五年（シゴネン）
～日：一二日（イチニニチ）	二三日（ニサンニチ）	三四日（サンヨッカ）※	四五日（シゴニチ）
※「三四日」の場合のみ「～カ」と読む。			
～人：一二人（イチニニン）	二三人（ニサンニン）	三四人（サンヨニン）※	四五人（シゴニン）
※「三四人」の場合のみ「四」は「ヨ」と読む。			

3.1.11.3.5 参考

上記の他、既出の数詞+助数詞の読みを参考として示す。

【例】

・「重」

一重 (ヒトエ) 二重 (フタエ) 三重 (ミエ) 五重 (イツエ) 七重 (ナナエ)
九重 (ココノエ) 千重 (チエ)

・「疋」

一疋 (イチヒキ) 二疋 (ニヒキ) 三疋 (サンヒキ) 四疋 (ヨヒキ) 十疋 (ジツピキ)
二十疋 (ニジツピキ) 三十疋 (サンジツピキ) 四十疋 (シジュウヒキ) 百疋 (ヒヤツピキ)

・「尺」

一尺 (イツサク) 二尺 (ニサク) 三尺 (サンザク) 四尺 (シサク) 五尺 (ゴサク)
六尺 (ロクサク) 七尺 (シチサク) 九尺 (クサク) 二三尺 (ニサンザク) 三四尺 (サンシサク)
七八尺 (シチハッサク)

・「度」

一度 (ヒトタビ) 二度 (フタタビ) 三度 (ミタビ/サント) 四度 (ヨタビ) 七度 (ナナタビ/シ
チド) 九度 (ココノタビ) 三十度 (ミソタビ) 百度 (モモタビ)
一二度 (イチニド) 千度 (チタビ)

・「具」

一具 (ヒトヨロイ) 五十具 (ゴジュウグ)

・「国」

九国 (ココノクニ) 十余国 (ジュウヨコク)

・「列」

十列 (トオツラ)

・「返」

二十返 (ニジツペン) 一二百返 (イチニヒヤツペン)

・「講」

三十講 (サンジュウコウ)

・「歩」

百歩 (ヒヤクブ)

・「間」

四五間 (シゴケン) 十余間 (ジュウヨケン)

・「本」

一本 (イツポン/ヒトモト)

3.2 基本読み一覧

上で示した方針以外のものについても、できる限り読み方を統一するよう努めた。以下に、上記方針以外で、個別に定めた「鎌倉時代編」での基本読みを示す。

3.2.1 基本読みを統一したもの

以下に挙げるものは、そこに示す通りの読み统一到する。
*印を付けたものは、ルビがない場合の基本読みであり、ルビがあればそれに従う。

《あ》

悔ずる(アナズル) 天の下(アメノシタ) *歩く・歩き(アリク・アリキ) ※1 安殿(アンドノ)
抱く・抱き(イダク・イダキ) 内裏(ウチ) ※2 桂(ウチキ) 祖父(オオジ) 女子(オンナゴ)
※1 書字形「あるく」は語彙素「歩く(アルク)」
※2 「今内裏」は「イマダイリ」

《か》

容貌(カタチ) 仮名(カナ) *門(カド) 軽し(カロシ) ※3 関白(カンパク)
後の宮(キサキノミヤ) 蔵人(クロウド) 孝・孝ず・不孝(キョウ・キョウス・フキョウ) 野(ケ)
経営(ケイメイ) 煙(ケブリ) 気配/けはひ(ケワイ) 元服(ゲンブク) 講師(コウジ)
業障(ゴッショウ)
※3 「軽々しい・軽びる・軽む・軽める・軽らか」に準用。

《さ》

邪気(ザケ) 侍(サブライ) *候ふ(サブラウ) 四位(シイ) 自然(ジネン) 実法(ジホウ)
衆(シュウ) 宿徳(シュウトク) 修す(シュス) ※4 *白髪(シラガ) 神璽(シンシ) 進士(シンジ)
頌(ズ) 隨身(ズイジン) 誦す(ズス) 誦ず(ズズ) *術・術なし(ズチ・ズチナシ)
相撲(スマイ) 受領(ズリョウ) ※5 軟障(ゼジョウ) ※6 狭し(セバシ) 前生(ゼンセイ)
先帝(センダイ) *左右(ゾウ) 姓(ゾウ)
※4 「修理」「修行」は「スリ」「スギョウ」と読む。
※5 直音化例外。「頌」とあれば「ロウ」と読む。
※6 直音化例外。

《た》

大織(ダイシヨク) *戯る・戯れ(タワブル・タワブレ) 天下(テンガ) 尊し(トウトシ)

《な》

眠る・眠り(ネブル・ネブリ) 直衣(ノウシ) 拭う(ノゴウ) *日本(ニッポン)

《は》

万歳(バンザイ) 隙(ヒマ) 拍子(ヒョウシ) ※7 便(ビン) 便宜(ビンギ) 服(ブク)
不定(フジョウ) 不憫(フビン) 陪従(ベイジュウ) 変化(ヘンゲ) 反故(ホグ) 菩薩(ボサツ)
牡丹(ボタン) 本意(ホンイ) ※8 本性(ホンジョウ)
※7 直音化例外。
※8 連声例外。

《ま》

真名(マナ) 丸し(マロシ) 転ぶ(マロブ) 蜜(ミチ) 命終(ミョウジュウ)
(~)馬(~)((~)ムマ(~)) 午(ムマ) 梅(~)(ムメ(~)) 妻(メ) ※9 面目(メイボク)
召人(メシウド) 参上る(モウノボル) 母屋(モヤ) *唐(モロコシ)
※9 和歌で字数上「ツマ」と読むべきところは除く。

《や》

ゆほびか(ユオビカ) ※10 *行く(ユク)
※10 ユホビカとは読まない。

《ら》

緑衫(ロウソウ)

《わ》

童(ワラワ) 童べ・童女(ワラワベ) 酔ふ・酔はす・酔ひ(エウ・エウス・エイ)

3.2.2 読みを複数認めるもの

「鎌倉時代編」では、読みを複数認めざるを得ないものも多い。その中でも、文脈などの使用状況から読みを区別し、それぞれの場合ごとに読みを一つに確定したものと、現状では明確な区別基準のないまま、複数の読みを認めているものがある。以下にそれぞれを示す。

3.2.2.1 使用状況ごとに読みを一つに確定したもの

辺り	アタリ	「辺り」単独	
	ワタリ	「～の辺り」, 「〇〇(地名など) 辺り」の場合	
魚	イオ	散文(和歌以外)	
	ウオ	和歌	
朝廷	オオヤケ	ルビ優先。ルビが無い場合, 以下の場合を除き「オオヤケ」	
	ミカド	ルビ優先。「わが朝廷」「ひとの朝廷」の場合	
音	オト	無生物, 打楽器, 音信	
	ネ	生物, 笛琴	
男	オトコ	ルビ優先。ルビが無い場合文脈で判断	
	オノコ	ルビ優先。ルビが無い場合文脈で判断(特に, 「宮中に仕える男」の意の場合)	
女	オンナ	ルビ優先。ルビが無い場合文脈で判断	
	ムスメ	ルビ優先。ルビが無い場合文脈で判断	
督(語彙素「守(カミ)」)	カミ	基本読み「～督の君・殿」の場合	
	カン	「督の～」の場合	
現世	ゲンセ	基本読み	
	ゲンゼ	仏教語	
前(の)	サキ	ルビ優先。ルビが無い場合, 「先代の」という意味や, 後(あと・のち)に対応するもの	
	マエ	ルビ優先。ルビが無い場合, 後(うしろ)に対応するもの	
大臣	ダイジン	ルビ優先。ルビがない場合, 以下の場合を除き「ダイジン」	
	オトド	ルビ優先。ルビがない場合, 単独の「大臣」や, 「～大臣」の「～」が次の場合に「オトド」	
		・「前」(これ自体は「サキ」と読む)	
		・訓読みのルビがある「右」「左」「内」「太政」「左右」	
		・「～(品詞は問わない)の」	
		・ルビに読み添えの「の」がある「人名-姓」・「地名」	
例	タメシ	ルビ優先。ルビが無い場合, 「前例」としか解せない箇所や, 以下の場合を除き「タメシ」	
	レイ	「例の」「例ならぬ」「例よりも」のような「いつも」「普通」という意味が含まれている場合	
誰	タレ	基本読み。和歌の場合字数により判断	
	タ	「誰が」「誰そ」など。和歌の場合字数により判断	
地	チ	「地面」「土地」の場合	
	ジ	「布地」の場合	
年	トシ	「年」単独	
	トセ	「二年」など, 数字の後	
	ネン	音読み数詞に続く場合	
比叡	ヒエ	「～の山」	
	ヒエイ	「～山(ザン)」	
塞ぐ・塞がる・塞げる	フタグ・フタガル・フタゲル	和文資料	
	フサグ・フサガル・フサゲル	漢文系資料	
法華	ホッケ	基本読み。	
	ホケ	「～経」	
	ホウゲ	「ほうげ」とルビがある場合	
親王	和語読み: ミコ	基本読み。「～の親王」	
	漢語読み: シンノウ	上が漢語・元号の場合	
皇子	和語読み: ミコ	基本読み。「～の皇子」	
	漢語読み: オウジ	上が漢語・元号の場合	
文字	モンジ	ルビ優先。	
	モジ	ルビ優先。また, ルビが無い場合の基本読み。	
夜行	ヤコウ	「夜, 行くこと」「夜間に出歩いたり活動したりすること」	
	ヤギョウ	「鬼や化け物が列をなして夜歩くこと」「百鬼夜行」	
夜半	ヨワ	ルビ優先。ルビが無い場合, 以下の場合を除き「ヨワ」	
	ヤハン	ルビ優先。ルビがない場合, 漢文系資料では「ヤハン」	

3.2.2.2 現状では明確な区別基準なく、複数の読みを与えているもの

「鎌倉時代編」に限った問題ではないが, 明確な区別基準が立てられなくとも複数の読みを与えた出現形がある。以下に示すようなものに関しては, 注釈書などを参考に, 個別に読みを割り当てている。

【例】

《あ》

朝 (アサ・アシタ) 兄 (アニ・ショウト) 主 (アルジ・シュウ) 庵 (イオ・イオリ)
答ふ (イラウ・コタウ) 御衣 (オンゾ・ミゾ・ミケシ)

《か》

頭 (カシラ・アタマ) 后 (キサイ・キサキ) ※ 衣 (コロモ・キヌ)
※後の宮 (キサイノミヤ)

《さ》

下 (シモ・シタ・モト) 外 (ソト・ト)

《た》

大夫 (タイフ・ダイブ・カミ)

《な》

寝 (ヌ・イヌ)

《ま》

行幸 (ミユキ・ギョウコウ・ギョウゴウ) 妻子 (メコ・サイシ)

《や》

夜 (ヨ・ヨル)

参考文献

- 小木曾智信・小椋秀樹・田中牧郎・近藤明日子・伝康晴 (2010) 「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」『情報処理学会研究報告』Vol. 2010-CH-85, pp. 49-58.
- 小木曾智信・小椋秀樹・近藤明日子・須永哲矢 (2010) 「形態素解析辞書「中古和文UniDic」とその活用例」『日本語学会2010年度秋季大会予稿集』, pp. 243-248.
- 小木曾智信・中村壮範 (2011) 『国立国語研究所内部報告書『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装 改訂版』(LR-CCG-10-06).
- 小椋秀樹・小木曾智信・原裕・小磯花絵・富士池優美 (2008) 「形態素解析用辞書UniDicへの語種情報の実装と政府刊行白書の語種比率の分析」『言語処理学会第14回年次大会発表論文集』, pp. 935-938.
- 小椋秀樹・須永哲矢・小木曾智信・近藤明日子・田中牧郎 (2011) 「「中古和文UniDic」における言語単位の設計」『言語処理学会第17回年次大会発表論文集』, pp. 312-315.
- 小椋秀樹・須永哲矢 (2012) 『中古和文UniDic短単位規程集 平成21 (2009) -平成23 (2011) 年度科研費補助金 基盤研究 (C) 「和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発」研究成果報告書2』.
- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕 (2011) 国立国語研究所内部報告書『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版 (上) (下)』(LR-CCG-10-05-01, 02).
- 須永哲矢・小木曾智信 (2011) 「コーパスとコロケーション強度を用いた中古語の語認定」『日本語学会2011年度春季大会予稿集』, pp. 275-280.
- 須永哲矢 (2011) 「コロケーション強度を用いた中古語の語認定」『国立国語研究所論集』2, pp. 91-106.
- 富士池優美 (2012) 「中古和文における長単位の概要」『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp. 51-58.
- 富士池優美 (2015) 「『日本語歴史コーパス 平安時代編』の形態論情報」『コーパスと日本語史研究』, ひつじ書房, pp. 237-280.

資 料

要 注 意 語

1 接頭的要素

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
1.1	アイ 相	接頭辞 「相」と1最小単位との結合体が名詞である場合は除く。(相=乗り, 相=討ち)			
	【例】 いまひとたび【あひ】見せたまへ。				
1.2	ウチ 打ち	接頭辞 「打撃を加える」意味の場合は動詞とする。			
	【例】 さるまじき御振る舞ひも【うち】混じりける。 いとわびしければ、【うち】泣きて縫ふままに				
1.3	オ 御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。[御鏡, 御座(おまし)※, 御許(女性の尊称), 御物] ※「御座所」の場合, 「御座(おまし) 所(どころ)」と分割・読む。			
	【例】 奥なる【御】座に入りたまひぬ。 【御】仏名のまたの日、				
1.4	オオン 御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。[御殿油, 御殿籠る]			
	【例】 もし世におはせば【御】顔見せたまへ				
1.5	オン 御	接頭辞 「平安時代編」での「御」の読みは「オオン」を基本とし, 「オン」は用いない。ただし, 次に挙げるものは, 「御」を「オン」と読み, 後の部分と併せて1最小単位とする。[御衣, 御身]			
	【例】 白き【御】衣ども、 【御】身ひとつ				
1.6	カキ 掻き	接頭辞			
	【例】 琴をすこし【掻き】鳴らしたまへる				
1.7	コ 故	接頭辞			
	【例】 【故】大納言の遺言あやまたず				
1.8	ゴ 御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。[御器, 御後, 御所, 御前, 御達, 御殿, 御悩, 御覧, 御料, 御霊]			
	【例】 私の【御】願にて書かせたてまつりたまひける法華経千部				
1.9	サシ 差し	接頭辞			
	【例】 手を【さし】入れて探りたまへれば				

- 1.10 ショ 接頭辞
諸 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(諸=国, 諸=所)
【例】
殿上人、【諸】大夫、院司、下人まで
- 1.11 ナマ 接頭辞
生
【例】
心得ず、【なま】いとほしとおぼゆる御さまなり
恥づかしくもありぬべく、【なま】わづらはしく思へど
- 1.12 ホノ 接頭辞
仄 「ほのか」「ほのめく」「ほのぼの」「ほのめかす」は除く。
【例】
寝殿の南面にぞ灯【ほの】暗う見えて、
- 1.13 マ 接頭辞
真
【例】
なれこそは岩もるあるじ見てし人のゆくへは知るや宿の【真】清水
- 1.14 ミ 接頭辞
御 次に挙げるものは後の部分と併せて1最小単位とする。[御明, 御生(みあれ(御阿礼)), 御門, 御溝(みかわ), 御酒, 御髪, 御座(みくら), 御子, 御輿, 御言, 御簾, 御衣(みそ・みぞ), 御台, 御嶽, 御霊, 御手洗(みたらし), 御帳, 御堂, 御水(みもい), 御息所, 御幸, 御代]
【例】
藤壺の【御】ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、
- 1.15 モテ 接頭辞
以て 所有の意味の場合は動詞とする
【例】
この子を【もて】かしづきて、率て歩く。
- 1.16 モノ 接頭辞
物 後接語が2最小単位からなる1短単位の場合のみ切り離す。
【例】
帝【もの】心細く思したり。

2 接尾的要素

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
2.1	ウエ 上 【例】 小原の殿の御母【上】とこそは、	接尾辞-名詞的-一般			
2.2	カタ 方 【例】 つくづくと臥して思ふに、ゆき【かた】なければ、	接尾辞-名詞的-一般 「仕方」の「方」は除く。		動詞連用形	
2.3	ガタイ 難い	接尾辞-形容詞的	形容詞-タイ(文語形容詞-ク)	動詞連用形	

【例】
いとたへ【がたき】ほどのもの悲しさなり。

2.4 **ガチ** 接尾辞-形状詞的
勝ち

【例】
火桶の火も、白き灰【がち】になりてわろし。

2.5 **ガテラ** 接尾辞-名詞的-副詞
がてら 可能

【例】
秋の野も見たまひ【がてら】、雲林院に詣でたまへり。

2.6 **ガネ** 接尾辞-名詞的-一般
がね

【例】
女君達は后【がね】とかしづきたてまつりたまひしほどに、

2.7 **カネル** 接尾辞-動詞的 下一段-ナ行（文語下 動詞連用形
兼ねる 二段-ナ行）

【例】
いみじくたへ【かね】御涙のとまらぬを、

2.8 **ガリ** 接尾辞-名詞的-一般
許

【例】
「文は大輔【がり】やれ」

2.9 **ガル** 接尾辞-動詞的 五段-ラ行-一般（文 形容詞・形状詞
がる 語四段-ラ行）
助動詞「たがる」の「がる」は除く。

【例】
あやし【がり】て見れば、鉢の中に文あり。

2.10 **ギミ** 接尾辞-名詞的-一般
君

【例】
その殿の若【君】、

2.11 **クサイ** 接尾辞-形容詞的 形容詞-サイ
臭い

「～めいた感じがする」という意。望ましくない意を強める用法。「かび臭い」「焦げ臭い」の「くさい」は除く。

【例】
青【くさい】ほど未熟な私に
照れ【くさく】で言えなかった「ありがとう」。
米国よりずっと古【くさく】なってしまった。

2.12 **ゲ** 接尾辞-形状詞的
気

【例】
笑ひたまふさまも、いとをかし【げ】なり。

2.13 **ゴト** 接尾辞-名詞的-一般
毎 そのもの一つ一つ、その時その時の意。

【例】
この男、人の国より夜【ごと】に来つつ、

2. 14 **さ** 接尾辞-名詞的-一般
 さ 「そうだ」「過ぎる」が接続するときの「なさ」「良さ」の「さ」, 「憂さ」の「さ」は除く。
 【例】
 色の黒【さ】赤【さ】さへ見えわかれぬべきほどなるが、
2. 15 **サマ** 名詞-普通名詞-一般
 様 「有り様（アリサマ）」「反様（カエサマ）」「勝様（マサザマ）」の「様」は除く。
 【例】
 横【さま】にいみじき目を見、
2. 16 **ザマ** 接尾辞-名詞的-副詞
 様 可能
 「縦様（タタザマ）」の「様」は除く。
 【例】
 帰り【ざま】に立ち寄りたまひて
2. 17 **ジュウ** 接尾辞-名詞的-副詞
 中 可能
 【例】
 日本国【中】の大小の諸神の御名を書きて、
2. 18 **タチ** 接尾辞-名詞的-一般
 達 【例】
 南院の君【達】とこれかれ集りて、
2. 19 **ダツ** 接尾辞-動詞的 文語四段-タ行 動詞連用形
 立つ 【例】
 君にも言ひ伝へず、さかし【だち】て
 受領などおとな【だち】たる人は、ふときいとよし
2. 20 **チュウ** 接尾辞-名詞的-副詞
 中 可能
 漢語の1最小単位と結合したものは除く。（空=中）
 【例】
 「流転三界【中】」など言うにも、
2. 21 **ツキ** 接尾辞-名詞的-一般
 付き 「札付き」（知れわたっていること, 悪い評判が世間に広まっている人の意）は除く。
2. 22 **トウ** 接尾辞-名詞的-一般
 等 【例】
 「生活・人事・伎能・学問【等】の諸縁をやめよ」とこそ、
2. 23 **ドノ** 接尾辞-名詞的-一般
 殿 【例】
 中納言【殿】の御車ぞ。
2. 24 **ドモ** 接尾辞-名詞的-一般
 共 【例】
 男【ども】六人、つらねて、

- 2.25 ナシ 名詞-普通名詞-一般
無し 「有り無し」「心無し」「事無し」「頼り無し」「名無し」「由無し」(よしなし)の「無し」は除く。
【例】堀江漕ぐ棚【無し】小舟
- 2.26 ニクイ 接尾辞-形容詞的 形容詞-クイ
難い 醜悪の意の「醜い」は除く。
【例】聞き【にくき】こともあらむと思へば、
- 2.27 バミ 接尾辞-名詞的-一般
ばみ
【例】されくつがへる今様のよし【ばみ】よりは、
- 2.28 バム 接尾辞-動詞的 五段-マ行-一般 (文語四段-マ行)
ばむ
【例】梅の花のわづかに気色【ばみ】はじめてをかしきを、
- 2.29 ブリ 接尾辞-名詞的-一般
振り 様子・状態の意。
【例】舌【ぶり】いとものさはやかなり。
- 2.30 ミ 接尾辞-名詞的-一般
み ミ語法
【例】里遠【み】小野の篠原わけて来てわれもしかこそ声も惜しまね
- 2.31 ミ 接尾辞-名詞的-副詞 動詞連用形
み 可能 並列
【例】泣き【み】笑ひ【み】語らひ明かす。
- 2.32 メ 接尾辞-名詞的-一般
奴 ののしる語。
【例】なぞわ女【め】、『さたが』といふべき事か。
- 2.33 メカシイ 接尾辞-形容詞的 文語形容詞-シク
めかしい
【例】あまり上衆【めかし】と思したり。
- 2.34 メカス 接尾辞-動詞的 文語四段-サ行
めかす
【例】思ほし人【めかさ】むにつけても、
- 2.35 メク 接尾辞-動詞的 五段-カ行-一般 (文語四段-カ行)
めく 擬態語的なものの「めく」は除く。(きら=めく, ざわ=めく)

【例】
秋の野のいとなま【めき】たるなど見たまひて、

2.36 ヤスイ 接尾辞-形容詞的 形容詞-スイ（文語形 動詞連用形
易い 容詞-ク）

【例】
人の心は花染めの移ろひ【やすき】色にぞありける

2.37 ヨウ 接尾辞-名詞的-一般
様

【例】
檜皮、瓦、所どころの立葺、透垣など【やう】のもの乱りがはし。
大饗の折、殿ばらの御車の立ち【やう】などよ。

2.38 ラ 接尾辞-名詞的-一般
等 複数を表す。

【例】
我【ら】がためにも大事なり

3 助詞

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
3.1	イエドモ 雖も	助詞 「雖」という出現形のみ適用。	接続助詞	格助詞「と」	
	【例】 飲羽の号有り【と】、未だ首丘の実を見ず				
3.2	カ か	助詞	係助詞	活用語には連体形	
	【例】 いかなること【か】と思し疑ひてなんありける。				
3.3	ガ が	助詞	格助詞	活用語には連体形	
	【例】 わ【が】身はか弱くものはかなきありさまにて、				
3.4	カシ かし	助詞	終助詞	活用語には終止形	
	【例】 交野の少将には、笑はれたまひけむ【かし】。 今年だに声すこし聞かせたまへ【かし】。 おのづから軽き方にぞおぼえはべる【かし】。※ ※係助詞「ぞ」の結びのため連体形。				
3.5	カナ 哉	助詞	終助詞	活用語には連体形	
	【例】 待つ人も来ぬものゆゑに鶯の鳴きつる花を折りてける【かな】 いとあはれに悲しく心深きこと【かな】と涙をさへなむ落としはべりし。				
3.6	ガナ がな	助詞	終助詞	活用語には連体形、 命令形	
	【例】 かの君たちを【がな】、つれづれなる遊びがたきに、などうち思しけり。				

- 3.7 **ガナ** 助詞 副助詞
がな 何がな, どうがな等
【例】
「御肴何【がな】」など言ひて、芝の上にて飲みたるもをかし。
- 3.8 **ガニ** 助詞 副助詞 連体形, 終止形
がに
【例】
桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふ【がに】
- 3.9 **カラ** 助詞 格助詞 活用語には連体形
から
【例】
つつましく恐ろしくおぼえて、心【から】よるべなく心細きなり。
袖の香をよそふる【から】に橘のみさへはかなくなりもこそすれ
- 3.10 **コソ** 助詞 係助詞 活用語には連体形
こそ
【例】
いとはかなうものしたまふ【こそ】、あはれにうしろめたけれ。
- 3.11 **サエ** 助詞 副助詞 体言および体言に準ずる語, 形容詞連用形, 格助詞等
さえ
【例】
霧も深く露けきに、簾を【さへ】上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。
師走のつごもりの夜、寝起きてあぶる湯は、腹立たしう【さへ】ぞおぼゆる。
- 3.12 **シ** 助詞 副助詞 活用語には連用形, 連体形
し
【例】
人目【し】なき所なれば、心やすく入りたまふ。
植ゑ【し】植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや
- 3.13 **シカ** 助詞 終助詞 連用形 シガ
しか
【例】
かの五節を思し忘れず、また見て【しが】など心にかけたまへれど、
- 3.14 **シモ** 助詞 副助詞 活用語には連用形, 連体形
しも
【例】
をり【しも】かの明石の人、年ごとの例の事にて詣づるを、
心やすく【しも】対面したまはぬを、これかれ押し出でたり。
やはらかなる【しも】いとしかりけり。
- 3.15 **ズツ** 助詞 副助詞
ずつ
【例】
雪ただいささか【ずつ】うち散りて、道の空さへ艶なり。
- 3.16 **スラ** 助詞 副助詞 活用語には連体形 ソラ
すら
【例】
鳥の音【そら】希なる山の中也と云へども、露恐しき思ひ無し。
富貴にして、騒がしからむ【すら】、よしなきに、

3. 17	ソ そ	助詞	終助詞	連用形（カ変・サ変 型活用語は未然形）	
	【例】 姫君の御前にて、この世馴れたる物語などな読み聞かせ【そ】。				
3. 18	ゾ ぞ	助詞	係助詞	活用語には連体形	
	【例】 月のおもしろきに、夜更くるまで遊びを【ぞ】したまふなる。				
3. 19	ダニ だに	助詞	副助詞	活用語には連用形、 連体形	
	【例】 なほすこし出でて見【だに】送りとまへかし。 しばし見ぬ【だに】恋しきものを、遠くはましていかに、				
3. 20	ツ つ	助詞	格助詞		
	【例】 秋の末【つ】方、いともの心細くて嘆きたまふ。				
3. 21	ツツ つつ	助詞	接続助詞	連用形	
	【例】 はかなきことどもをうち語らひ【つつ】、明け暮らしたまふ。				
3. 22	テ て	助詞	接続助詞	連用形	デ
	【例】 恥づかしう思い【て】、背後向きたまへり。 「琵琶、声やん【で】、物語せむとする事おそし」				
3. 23	デ で	助詞	格助詞		
	【例】 此を思ふに、此の世のみ【で】敵には非けるにかとぞ人皆怪びける、				
3. 24	デ で	助詞	接続助詞	未然形	
	【例】 なほ雨風やまず、雷鳴り静まら【で】日ごろになりぬ。				
3. 25	ト と	助詞	格助詞		
	【例】 「あれは誰そ」【と】おどろおどろしく問ふ。				
3. 26	ト と	助詞	接続助詞	終止形	
	【例】 「さらば、いとかひなからむ。異夜はあり【と】、かならず今宵は」とあり。				
3. 27	ド ど	助詞	接続助詞	已然形	
	【例】 しばしうち休みたまへ【ど】、寝られたまはず。				

- 3.28 **トテ** 助詞 格助詞
とて
【例】
いみじかるべきたびのこと【とて】、皆人心を尽くしたまひてなん。
- 3.29 **トモ** 助詞 接続助詞 動詞・動詞型活用の助動詞の終止形、形容詞・形容詞型活用の助動詞の連用形
とも
【例】
姫君は、となる【とも】かうなる【とも】、おのれに添ひたまへ。心細く【とも】、しばしはかくておはしませむ。
- 3.30 **ドモ** 助詞 接続助詞 已然形
ども
【例】
風はいとよく吹け【ども】、日のどかに曇りなき空の西日になるほど、
- 3.31 **ナ** 助詞 終助詞 活用語には終止形
な
【例】
さばかりの夢をだにまた見てしが【な】。
- 3.32 **ナガラ** 助詞 接続助詞 動詞型活用語には連用形（まれに連体形）、形容詞型活用語には語幹
ながら
「～しつつ」「～ではあるが」の意。
【例】
現のことともおぼえず、あやしき心地し【ながら】うれしと思ふ。ありし【ながら】の御手にて、紙の香など、例の、世づかぬまでしみたり。いみじうわびし【ながら】、泣く泣く出でぬ。
- 3.33 **ナド** 助詞 副助詞 活用語には終止形
など
【例】
心ばへ容貌【など】、深き方はえ知りはべらず。
- 3.34 **ナム** 助詞 係助詞
なむ
【例】
宮は、昨日より内裏に【なん】おはしますなる。
- 3.35 **ナム** 助詞 終助詞 未然形
なむ
【例】
萌え出づる春に逢ひたまは【なむ】と念じわたりつれど、
- 3.36 **ニ** 助詞 格助詞 連体形・連用形・終止形
に
【例】
なかなかこれを見る【に】いと悲しくて、ほろほると泣かれぬ。今日は、二条院に離れおはして、祭見【に】出でたまふ。風いたう吹き、海の面ただあし【に】あしうなるに、
- 3.37 **ニ** 助詞 接続助詞 連体形
に
【例】
心も空に浮きたちて、いかで出でなんと思ほす【に】、雪かきたれて降る。

- 3.38 **ニテ** 助詞 格助詞 活用語には連体形
にて
【例】津の国までは舟【にて】、それよりあなたは馬【にて】急ぎ行き着きぬ。
- 3.39 **ノ** 助詞 格助詞 活用語には連用形、
の 終止形、（体言に準ずる）連体形
【例】ほのかに見たてまつらん【の】心あれば、格子をやをら引き上げて、たれその森。くるべき【の】森。
- 3.40 **ノ** 助詞 準体助詞
の
【例】帯は、中将【の】なりけり。
- 3.41 **ノミ** 助詞 副助詞 活用語は連体形
のみ
【例】さぶらふ人とても、若々しき【のみ】こそ多かれ。このころとなりては、何ごとにつけても心細く【のみ】思し知る。
- 3.42 **ハ** 助詞 係助詞
は
【例】母君【は】、故北の方の御姪なり。
- 3.43 **バ** 助詞 接続助詞 未然形、已然形
ば
【例】夜明けはてぬれ【ば】、御方々帰り渡りたまひぬ。さそふ水あら【ば】とは思はず、
- 3.44 **バカリ** 助詞 副助詞 活用語には連体形
ばかり
【例】御文どもを、見たまふこともなくて、読みきこゆる【ばかり】を聞きたまふ。
- 3.45 **バシ** 助詞 副助詞 活用語には連用形、
ばし 活用語の連用形に接続助詞「て」の付いたもの
【例】道命阿闍梨の子にて【ばし】侍りけるやらむ。（沙石集）
- 3.46 **バヤ** 助詞 終助詞 未然形
ばや
【例】思ひつることども語らは【ばや】、と思ひつづけてながめたまふ。
- 3.47 **へ** 助詞 格助詞
へ
【例】朱雀院の姫宮、六条院【へ】渡りたまふ。
- 3.48 **マデ** 助詞 副助詞 活用語には連体形
まで

【例】
 児のいとゆゆしき【まで】うつくしうおはすることたぐひなし。

3.49 **モ** 助詞 係助詞
も

【例】
 世にめづらしくありがたきことにて、世人【も】心をおどろかす。

3.50 **モ** 助詞 接続助詞 連体形
も

【例】
 内裏へ参らんと思しつる【も】出で立たれず。

3.51 **モガ** 助詞 終助詞 連用形
もが

【例】
 いま一たび見たてまつるものに【もが】な、とのみおぼえて、

3.52 **ヤ** 助詞 係助詞
や

【例】
 「海賊の舟に【や】あらん、小さき舟の飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。

3.53 **ヨ** 助詞 終助詞 活用語には連体形、
よ 命令形

【例】
 「時々は、山におはして遊びたまへ【よ】」と、
 月も隔たりぬる【よ】と、宮は静心なく思されて、

3.54 **ヨリ** 助詞 格助詞 活用語には連体形
より

【例】
 「一目見し【より】、静心なくてなむ」とのたまへり。

3.55 **ヲ** 助詞 格助詞 活用語には連体形
を

【例】
 まだ格子もさながら、梅の香をかしき【を】見出だしてものしたまふ。

3.56 **ヲ** 助詞 接続助詞 連体形
を

【例】
 書きとどめて、姫君にも見せたてまつりたまふべかりけるもの【を】。

3.57 **ヲ** 助詞 終助詞
を

4 助動詞

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
4.1	キ き	助動詞 過去・完了	文語助動詞-キ	連用形（カ変・サ変 には未然形・連用 形）	
	【例】 「一目見【し】より、静心なくてなむ」とのたまへり。 かの夕霧の御息所のおはせ【し】山里よりはいますこし入りて、				

4.2	ケム けむ	助動詞 過去推量	文語助動詞-ケム	連用形
	【例】 かならずしも心ざしあるやうには見たまはざり【けむ】。			
4.3	ケラシ けらし	助動詞	文語助動詞-ラシ	連用形
	【例】 桜花咲きに【けらし】なあしひきの山の峽より見ゆる白雲			
4.4	ケリ けり	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ケリ	連用形
	【例】 なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住み【けり】。			
4.5	コス こす	助動詞 希望	文語助動詞-コス	連用形
	【例】 ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげ【こせ】			
4.6	ゴトシ ごとし	助動詞 比況	文語助動詞-ゴトシ	活用語には連体形
	【例】 袖の葉の【ごとく】なる宿直衣の袖の上に、 「雲居の雁もわが【ごと】や」と独りごちたまふけはひ若うらうたげなり。 手に捧げたる【ごと】思ひあつかひ後見たてまつるにかかりてなむ、 いはば、薪負へる山人の花の蔭に休めるが【ごとし】。 その中に楊貴妃【ごとき】は、あまりときめきすぎて、 前栽の露はなほかかる所も同じ【ごと】きらめきたり。			
4.7	サセル させる	助動詞 使役・尊敬	文語下二段-サ行	四段・ナ変・ラ変以外の未然形
	【例】 年に二たび住吉に詣で【させ】けり。			
4.8	ジ じ	助動詞 打ち消し推量	無変化型	未然形
	【例】 惟光、いささかのことも御心に違は【じ】と思ふに、			
4.9	シメル しめる	助動詞 使役	文語下二段-マ行	未然形
	【例】 まことに出家せ【しめ】たてまつりてしにはべり。			
4.10	ズ ず	助動詞 打ち消し	文語助動詞-ズ	未然形
	【例】 目に見え【ぬ】仏神を頼みたてまつりて、			
4.11	セル せる	助動詞 使役・尊敬	文語下二段-サ行	四段・ナ変・ラ変の未然形
	【例】 声よき人にうたは【せ】て、我も時々拍子とりて、			

4.12	タイ たい	助動詞 希望	文語形容詞-ク	連用形
	【例】 ものよすががありて伝へ聞き【たき】人々、			
4.13	タリ たり	助動詞 断定	文語助動詞-タリ-断定	体言
	【例】 「凜々【と】して氷鋪けり」といふことを、			
4.14	タリ たり	助動詞 完了	文語助動詞-タリ-完了	連用形
	【例】 年は六十ばかりになり【たれ】ど、			
4.15	ツ つ	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ツ	連用形
	【例】 あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐし【つ】らむことを思しのたまふ。			
4.16	ナリ なり	助動詞 断定	文語助動詞-ナリ-断定	活用語には連体形
	【例】 心憂きものは人の心【なり】けり。 仏天の告げあるによりて奏しはべる【なり】。			
4.17	ナリ なり	助動詞 伝聞	文語助動詞-ナリ-伝聞	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形
	【例】 極楽といふ【なる】所には、菩薩などもみなかかることをして、			
4.18	ヌ ぬ	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ヌ	連用形
	【例】 いとあはれにかたじけなくおぼえてうち泣き【ぬ】。			
4.19	ベシ べし	助動詞 推量	文語助動詞-ベシ	終止形
	【例】 人々もあきれて、いかにす【べき】ことともえ思ひ得ず、 上達部などさる【べき】かぎり、車にてぞ仕うまつりたまへる。			
4.20	ベラナリ べらなり	助動詞 推量	文語助動詞-ナリ-断定	終止形
	【例】 音羽山木高く鳴きて郭公君が別れを惜しむ【べらなり】			
4.21	マウシ まうし	助動詞	文語形容詞-ク	未然形
	【例】 鼻に紅をつけて見たまふに、絵に描きても見【まうき】さましたり。			

4. 22	マシ まし	助動詞 反実仮想	文語助動詞-マシ	未然形	
	【例】 「昼なら【ましか】ば、のぞきて見たてまつりて【まし】」				
4. 23	マジ まじ	助動詞 打ち消し推量	文語助動詞-マジ	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
	【例】 今年はかならずのがる【まじき】年と思ひたまへつれど、宮の若君は、宮たちの御列にはある【まじき】ぞかしと御心の中に思せど、				
4. 24	マホシ まほし	助動詞 希望	文語形容詞-シク	未然形	
	【例】 この君を尋ね【まほし】げにのたまひしかば				
4. 25	ム む	助動詞 意志・推量	文語助動詞-ム	未然形	
	【例】 今はとて別れなば、いかなる心地せ【む】と思ひまどひたまふ。				
4. 26	ムズ むず	助動詞 推量・意志	文語助動詞-ムズ	未然形	ンズ
	【例】 「いづちもいづちも、足の向きたらむ方へ往な【むず】」 「さて、いつか女御殿には参りはべら【んずる】」と聞こゆれば、				
4. 27	メリ めり	助動詞 推量	文語助動詞-メリ	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
	【例】 ほのかに見たてまつりける人のいみじきものに聞こゆ【めれ】ど、さすがにいとやむごとなき人にこそはべる【めれ】。				
4. 28	ユ ゆ	助動詞 受身・自発・可能	文語下二段-ヤ行	未然形	
	【例】 光る源氏といは【ゆる】御盛りの大将などにおはせしころ				
4. 29	ラシ らし	助動詞 推量	文語助動詞-ラシ	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
	【例】 色まさるまがきの菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふ【らし】 ぬき乱る人こそある【らし】白玉の間なくも散るか袖のせばきに				
4. 30	ラム らむ	助動詞 現在推量	文語助動詞-ラム	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
	【例】 ただ今の空を、いかに御覧ず【らむ】。 内々は心やましきことも多かる【らむ】。				

4.31	ラレル られる	助動詞 受身・可能・自発・尊敬	文語下二段-ラ行	四段・ナ変・ラ変以外の未然形
	【例】 来し方行く先思しつづけ【られ】て、心弱く泣きたまひぬ。			
4.32	リ り	助動詞 完了・存続	文語助動詞-リ	サ変の未然形、四段の命令形
	【例】 里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせ【る】ねやの月かけかの白く咲け【る】をなむ、夕顔と申しはべる。			
4.33	レル れる	助動詞 受身・可能・自発・尊敬	文語下二段-ラ行	四段・ナ変・ラ変の未然形
	【例】 なかなかこれを見るにいと悲しくて、ほろほると泣か【れ】ぬ。			
4.34	ロウ ろう	助動詞 推量の助動詞「らむ」の変化したもの	無変化型	終止形（ラ変には連体形）
	【例】 希有に離る【らう】に、とこそ云ふべけれ。			
4.35	ンメリ んめり	助動詞 「り」+「めり」の「るめり」撥音便無表記「めり」		文語助動詞-メリ
	【例】 「いかで、かかる古代の物を見出でたまひつらむ。置いたまへ【めり】ものを、さる姿にて、世になき物も。かしこしかし」			

5 「一の～」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
5.1	アマノガワ 天の川	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 これをば【天の川】となむ思ひぬる				
5.2	アマノハシダテ 天の橋立	名詞-固有名詞-地名-一般			
	【例】 【天の橋立】の丹後和布、出雲の浦の甘海苔、				
5.3	アリノママ 有りの儘	名詞-普通名詞-副詞 可能			
	【例】 北の方の心を【ありのまま】に言へば、				
5.4	イチノイン 一院	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 内裏、春宮、【一院】、後の宮、次々の御ゆかりいつくしきほど、				
5.5	イチノカミ 一上	名詞-普通名詞-一般			

【例】
めづらしげなし。一上にてやみなん

5.6 **イチノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
一宮

【例】
女【一の宮】も、かくぞおはしますべかめる、

5.7 **イツキノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
齋宮

【例】
【齋の宮】のわらはべにいひかけける。

5.8 **イノコ** 名詞-普通名詞-一般
亥子

【例】
その夜さり、【亥の子】餅参らせたり。

5.9 **イノシシ** 名詞-普通名詞-一般
猪

【例】
そのとき、大きな【猪】が、にはかに、草の中から、あれて出ましたから、

5.10 **ウエノハカマ** 名詞-普通名詞-一般
表袴

【例】
浮紋の【表袴】にかかれるほどけざやかに見ゆ。

5.11 **ウジノカミ** 名詞-普通名詞-一般
氏上

【例】
また六百六十四年には【氏上】を定め、豪族領有民を確認するなど豪族層の編成が進められた。

5.12 **ウノハナ** 名詞-普通名詞-一般
卯の花

【例】
【卯の花】のいみじう咲きたるを折りて、

5.13 **ウマノカミ** 名詞-普通名詞-一般
馬頭 基本読みは「ムマノカミ」

ムマノカミ

【例】
右の【馬の頭】なりけるおきな

5.14 **ウワノソラ** 名詞-普通名詞-形状
上の空 詞可能

【例】
【上の空】なる心地のみしつ明かし暮らすを、

5.15 **エノキ** 名詞-普通名詞-一般
榎 動植物

【例】
肥後五日町の古い【榎】の空洞に、|長三尺餘周り二三尺の白蛇住む。

5.16 **オニノマ** 名詞-普通名詞-一般
鬼の間

【例】
上、【鬼の間】におはしますほどなりけり。

【例】
麓まで【尾の上】の桜散り来ずはたなびく雲と見てや過ぎまし

5. 18 **カクノミ** 名詞-普通名詞-一般
香菓

【例】
九種の【香菓】以下のものを、

5. 19 **カノコ** 名詞-普通名詞-一般
鹿の子

【例】
いつとてか【鹿子】まだらに雪のふるらむ

5. 20 **カルノイチ** 名詞-普通名詞-一般
軽市

【例】
飛鳥時代の市である海石榴市や【軽市】、

5. 21 **カンノキ** 名詞-普通名詞-一般
貫の木

5. 22 **キサイノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
后宮

【例】
朱雀院の【後の宮】の御方などめぐりけるほどに

5. 23 **キタノカタ** 名詞-普通名詞-一般
北の方

【例】
この二条殿は、【北の方】の御殿なり。

5. 24 **キノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
柵造

5. 25 **クスノキ** 名詞-普通名詞-一般
樟

【例】
【楠の木】は、木立おほかる所にも、ことにまじらひ立てらず。

5. 26 **クニノカミ** 名詞-普通名詞-一般
国守

【例】
この【国守】の北の方も詣でたりけり。

5. 27 **クニノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
国造

【例】
郡司は、もとの【国造】など伝統的な地方の豪族が任じられ、

5. 28 **クノキミ** 名詞-普通名詞-一般
九君

【例】
かの北の方の御おとうと【九の君】を、やがてえたまはむと、

5. 29 **クレノオモ** 名詞-普通名詞-一般
呉母

【例】
【くれのおも】つらゆき来し時と恋ひつつをれば

- 5.30 **コウリノカミ** 名詞-普通名詞-一般
評督
【例】
一般のコホリの評造または【評督】に対応するものが柵造、
- 5.31 **コオリノミヤツ** 名詞-普通名詞-一般
コ
郡造
【例】
一般のコホリの【評造】または評督に対応するものが柵造、
- 5.32 **コトノハ** 名詞-普通名詞-一般
言の葉
【例】
なほ言ふべき【言の葉】もなき心地して、
- 5.33 **コノカタ** 名詞-普通名詞-副詞
此の方 可能
表記上分割不可のときのみ使用。
【例】
病を受けし歳より【以来】、
- 5.34 **コノカミ** 名詞-普通名詞-一般
兄
【例】
「似るべき【兄】やははべるべき」
- 5.35 **ゴノキミ** 名詞-普通名詞-一般
五君
【例】
中の君、四の君、【五の君】とおはす。
- 5.36 **コノミ** 名詞-普通名詞-一般
木の実
表記上分割不可のときのみ使用。
【例】
樹を殖る事は【菓】を得、其の影に隠れむが為也。
- 5.37 **ゴンノカミ** 名詞-普通名詞-一般
権頭
【例】
越前の【権守】兼盛、兵衛の君といふ人にすみけるを、
- 5.38 **ゴンノソチ** 名詞-普通名詞-一般
権帥
【例】
大宰【権帥】になしたてまつりて、流されたまふ。
- 5.39 **サンノキミ** 名詞-普通名詞-一般
三君
【例】
【三の君】泣けば、四の君もうち泣きて、
- 5.40 **サンノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
三宮
【例】
【三の宮】こそいとさがなくおはすれ。

5. 41 **シチノキミ** 名詞-普通名詞-一般
七君
【例】
【七の君】、「刈萱のなまめかしきさまにこそ、弘徽殿はおはしませ」
5. 42 **シノキミ** 名詞-普通名詞-一般
四君
【例】
源中納言の【四の君】なり。
5. 43 **ジンノザ** 名詞-普通名詞-一般
陣座
【例】
おこなひに【陣座】ざまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせたまふに、
5. 44 **スケノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
少領
【例】
一般のコホリの評造または評督に対応するものが柵造、【助督】にあたるものが判官なのであろう。
5. 45 **スノコ** 名詞-普通名詞-一般
簀の子
【例】
酔ひすすみて、みな人々【簀子】に臥しつつ、静まりぬ。
5. 46 **セノキミ** 名詞-普通名詞-一般
兄の君
【例】
我が【背の君】はひとりか寝らむ
5. 47 **ソチノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
帥宮
【例】
その日、【帥宮】も参りたまへり。
5. 48 **タケノコ** 名詞-普通名詞-一般
竹の子
【例】
いまさらになにに生ひいづらむ【竹の子】の憂き節しげきよとは知らずや
5. 49 **タノモ** 名詞-普通名詞-一般
田の面 「平安時代編」では語形「タノム」の用例のみ
【例】
みよしのの【たのむ】の雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる
5. 50 **タブノキ** 名詞-普通名詞-一般
楡 動植物
5. 51 **ツキノカツラ** 名詞-普通名詞-一般
月の桂
【例】
秋くれば【月の桂】の実やはなる光を花と散らすばかりを
5. 52 **ツギノマ** 名詞-普通名詞-一般
次の間
【例】
【次の間】に、長炭櫃に、隙なくゐたる人々、

- 5.53 **トウノベン** 名詞-普通名詞-一般
頭弁
【例】
蔵人所より、【頭弁】、宣旨うけたまはりて、
- 5.54 **トオノキミ** 名詞-普通名詞-一般
十君
【例】
【十の君】、「淑景舎は『朝顔の昨日の花』となげかせたまひしこそ、ことわりと見たてまつりしか」
- 5.55 **トノエ** 名詞-普通名詞-一般
外の重
【例】
御垣より 【外の重】 守る身の 御垣守
- 5.56 **トノクスリ** 名詞-普通名詞-一般
外葉
【例】
「本草集注」「典葉」「【外葉】」という文字の書かれた木簡も発見されています。
- 5.57 **トモノオ** 名詞-普通名詞-一般
伴の緒
【例】
ものものふの八十【伴の緒】の思ふどち心遣らむと馬並めて
- 5.58 **トヨノアカリ** 名詞-普通名詞-一般
豊明
【例】
【豊明】は今日ぞかしと、京思ひやりたまふ。
- 5.59 **トリノコ** 名詞-普通名詞-一般
鳥の子
【例】
【鳥の子】を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものかは
- 5.60 **ナイシノカミ** 名詞-普通名詞-一般 ナイシノカン
尚侍
【例】
【尚侍】の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なむおはしけるを、
- 5.61 **ナイシノスケ** 「一の～」
典侍 表記上切れないため
【例】
源【典侍】といひし人は、尼になりて、
- 5.62 **ナカノキミ** 名詞-普通名詞-一般
中君
【例】
この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、【中の君】、四の君、五の君とおはす。
- 5.63 **ナカノマ** 名詞-普通名詞-一般
中の間
【例】
宰相は【中の間】に寄りて、まだささぬ格子の上押し上げて、
- 5.64 **ヌイノカミ** 名詞-普通名詞-一般
尚縫

【例】
父種継の従姉である【尚縫】が最近体調を崩して宿下がりをしていると聞いたからである。

5. 65 ノノミヤ 名詞-普通名詞-一般
野の宮

【例】
九月には、やがて【野宮】に移ろひたまふべければ、

5. 66 ハイノキ 名詞-普通名詞-一般
灰の木

【例】
クロバイ（【ハイノキ】科）

5. 67 ハチノオ 名詞-普通名詞-一般
発緒

【例】
壹越調の声に【発の緒】を立てて、

5. 68 ハチノス 名詞-普通名詞-一般
蜂の巣

【例】
【蜂の巣】の大きにて、つきあつまりたるなどぞ、いとおそろしき。

5. 69 ヒダリノツカサ 名詞-普通名詞-一般
左の司

【例】
【左馬寮】の御馬、蔵人所の鷹すゑて賜りたまふ。

5. 70 ヒトノクニ 名詞-普通名詞-一般
外国

【例】
【外国】にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるる。

5. 71 ヒノキ 名詞-普通名詞-一般
檜 動植物

【例】
何の心ありて、あすは【檜の木】とつけけむ。

5. 72 ヒノモト 名詞-普通名詞-一般
日の本

【例】
絵のさまも唐土と【日本】とをとり並べて、

5. 73 フンノツカサ 名詞-普通名詞-一般
書司

【例】
上の御遊びはじまりて、【書司】の御琴ども召す。

5. 74 ホゾノオ 名詞-普通名詞-一般
臍の緒

【例】
御【臍の緒】は殿の上。

5. 75 マノアタリ 名詞-普通名詞-副詞
目の当たり 可能

【例】
【目のあたり】ならずとも、さるべからむ雑事らはうけたまはらむ

- 5.76 **ミチノベ** 名詞-普通名詞-一般
道の辺
【例】
【道の辺】の草の花
- 5.77 **ミノモ** 名詞-普通名詞-一般
水面
- 5.78 **ミヤノメ** 名詞-普通名詞-一般 ミヤノベ
宮咩
【例】
近うて遠きもの 【宮のべ】の祭。
- 5.79 **ムロノキ** 名詞-普通名詞-一般
榎木 動植物
【例】
玉箒刈り来鎌麻呂【むろの木】と棗が本とかき掃かむため
- 5.80 **モノノク** 名詞-普通名詞-一般
物の奥 「もののおく」は除く。
【例】
「【もののく】にて、むかひさぶらひて、かかるわざし出づ」とさいなむ。
- 5.81 **モノノグ** 名詞-普通名詞-一般
物の具
【例】
家も焼けほろび、【物の具】もみなとられはてて、
- 5.82 **モノノケ** 名詞-普通名詞-一般
物の怪
【例】
昔より【物の怪】には、時々わづらひたまふ。
- 5.83 **モノノフ** 名詞-普通名詞-一般
武士
【例】
猛き【武士】、仇敵なりとも、
- 5.84 **モノノフシ** 名詞-普通名詞-一般
物の節
【例】
古は、【物節】のかぎり、一人づつありて、
- 5.85 **ヤマノハ** 名詞-普通名詞-一般
山の端
【例】
月もやうやう【山の端】近くなりたり。
- 5.86 **ロクノキミ** 名詞-普通名詞-一般
六君
【例】
典侍腹の【六の君】とか、いとすぐれてをかしげに、
- 5.87 **ワタノハラ** 名詞-普通名詞-一般
海原
【例】
【わたの原】寄せくる波のしばしばも見まくのほしき玉津島かも

6 「一が〜」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
6.1	イワガネ 岩が根 【例】 かどかどしき【岩が根】に一輪の花を點したる風情、	名詞-普通名詞-一般			
6.2	カリガネ 雁が音 【例】 月さし出でて曇りなき空に、翼うちかはす【雁が音】も列を離れぬ、	名詞-普通名詞-一般			

7 「一つ〜」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
7.1	タキツセ 滝つ瀬 【例】 奥山にたぎりて落つる【滝津瀬】の玉散るばかりものな思ひそ	名詞-普通名詞-一般			
7.2	ヨサリツカタ 夜去方 【例】 今日の【夜さつかた】、京へ上る。	名詞-普通名詞-副詞 可能			
7.3	ワタツウミ わたつうみ 【例】 【わたつ海】に親おし入れてこのぬしの盆する見るぞあはれなりける	名詞-普通名詞-一般			
7.4	ワタツミ 海神 【例】 棹させど底ひも知らぬ【わたつみ】の深き心を君に見るかな	名詞-普通名詞-一般			

『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編』 短単位規程集 Ver.1.0

2017年3月22日

編者・発行者 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 コーパス開発センター

執筆担当者 鴻野 知暁（言語変化研究領域 プロジェクト PD フェロー）

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話 042(540)4300（代表）

URL http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/